

---

# 花咲く歌を夜明けにつなぐ。

津森太壱。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花咲く歌を夜明けにつなぐ。

### 【Nコード】

N8141V

### 【作者名】

津森太吉。

### 【あらすじ】

これまでひとりを買ってきた、花盛りも過ぎた王女に持ち込まれたのは、大国の皇子との縁談。国の後継者である王女は、気が乗らないながらも、国のために皇子を婿に迎え入れることにしたが……。

\*本編完結済、番外編をたまに展開予定。

00 : たから。(前書き)

ようこそおいでくださりました。  
楽しんでいただけたら幸いです。

00 : たから。

きみは知っているかい？

あそこには、大層な宝があるそうだ。  
どんな宝だと思う？

ああ、残念だがわたしは知らない。  
見たことがないからね。

だが、話を聞くと気になるだろう。

あそこにどんな宝が眠っているのか。  
わたしは気になって仕方なくてね。

だから見てこようと思う。

奪うつもりはないよ。

ただ見るだけだ。

なぜ見るだけにするかって？

そんなのは決まっている。

その宝は、見ることしかできないらしい。

自分のものにはできないらしい。

つまり、奪えない。

それは呪いがかかっているからだ？  
違うよ。

呪いなんかない。

どうやらね、その宝はわたしたちの心に訴えかけるらしい。  
どんなふうに訴えられるかは、やはりわからないがね。

それらの真意を確かめるためにも、わたしは見てこようと思う。  
今からとても楽しみだよ。

宝を見て、わたしはどう思うだろう。  
なにを感じるだろう。  
とても、とても楽しみだよ。

数年前に建立されたばかりだろう家屋を、小高い丘から眺めた。  
とても大きくて、とても広い。流れる空気は穏やかで優しく、いか  
にも幸せそうな家族向けの家屋だ。

ふん、と鼻で笑う。

幼い頃に聞かせられた宝の話を思い出した。

「それがあんたの宝か」

ばかにするわけではないが、自分にはあまりにも不似合いで、あ  
んなのは追いかけていられないと想着てしまう。

「まあ、人それぞれに、宝はある」

人の宝、人の幸せ、それらはすべてそれぞれだ。だから、否定も  
しなければ肯定もしない。その必要もない。たとえ自分には到底理  
解できなくても。

「クロ」

「ん、今行く」

「……なにか見えるのか？」

「世界」

「随分と壮大なものを……」

「そうでもない」

自分呼びに来た悪友におどけて笑って、クロは眺めていた家屋から視線を外した。

「さて、ここからはどうする？」

「どうするって……まあどうもしようがないんだけどね」

「随分としおらしくなったな、クロ」

「ははは……逃げようにも逃がしてくれないじゃないの」

「それがおれの仕事だからな」

「はあ……いいよ、半ば諦めてはいるからね」

「半ば？」

にやり、と意地悪く笑う悪友に、もはやクロの諦めは境地に近い。

「今から逃げてもいい？」

「べつにいいけど、どこに逃げるんだ？」

そう、問題はそこにもある。クロには逃げ場がない。まずは目の前の悪友が大きな壁だ。

だが、それでも、逃げたいと思うのは仕方ない。

「おれ、もう少し世界を見たい」

「目的地に到着してからでも遅くはない」

「確証あるの？」

「おれがそう動いてやる。それでいいだろ」

「頼りになるお言葉ですこと……」

「信じろよ」

ぼん、と肩をたたく悪友の力は、とても頼りになる。だから信じていないわけではない。そう言う限りは、実行してくれると思う。

それなのにどこか信じられないのは、今ここに在る己れの状況だろつ。

「……これでいいのかなあ」

「まだ言ってるし」

そう言うが、この状況をどう受け入れたらいいのか、クロには未だ理解できない。悪友だって、クロがそうであることは承知しているはずだ。

「ほら、行くぞ。予定よりだいぶ遅れてるんだ。相手方には連絡済みでも、礼を欠いているんだからな」

「はいはい」

目的地がもつと遠くであったらよかつたのに、歩いて二週間とはなんと近いのか。月日とはこんなにも短いものであつただらうかと、クロはため息をついた。

00 : たから。(後書き)

楽しんでいただければ幸いです。



01 : らしくない。

その日、セムコンシャス王家の者たちは浮足立っていた。理由は明快だ。これまで女傑と謳われ、婚約者も、その候補も受け入れず、頑なにひとりを買っていた王女が、このたび漸く婚約者を迎えるからである。それも大国の皇子、噂などがまつたく耳に入ってこない妙な皇子ではあるが、それでも大国の皇子が王女の婚約者になるのだ。

王や王妃を始めとした城内の人々は、抑えられない喜びに皆が満面の笑顔だった。

ところが、である。

「到着が遅れるとの知らせが入りました」

と、宰相は王に伝えた。

今か今かと待ちわびていた王や王妃は肩を落としたが、それでもすでに国は出立したとの話を聞き、ほつと安堵した。この縁談をなかつたことに、と言われないかと心配だったのだ。それが杞憂に終わり、ただ到着が遅れるというだけのことだ。

しかし。

「まだ、なのか」

予定では四日の行程が、一週間経つても到着しない。いくらなんでもこれは遅れ過ぎではないだろうか。

王や王妃は、どうしたものかと思案した。道に迷っているのか、それともなんらかの事故に遭っているのかと、迎えの隊を国境まで派遣した。

「な、いないっ?」

「通過した形跡すらありませんでした」

予想外なことに、皇子の行方はわからなくなってしまった。

この事態はさすがに王女の耳にも入ることになる。

「べつにいいわよ。どこで道草くつてようが、事故で死んでようが、わたしには関係ないわ」

「王女殿下、それは……っ」

残念なことに、王女は仕方なく大国との縁談を受け入れたがために、乗り気でもなければ成功させる気もなかった。大国の皇子を気にしている暇があるなら、政務に勤しむ人である。そもそも縁談を、国の体面的なものと捉えていた。

「殿下、この縁談は、とてもとても、大切なものなのです」

「国にとっては、そうでしょうね。けれど、わたし自身には最悪でしかないのよ」

「そうおっしゃらず、どうか、どうか」

王女を宥めるのも一苦労、しかしセムコンシヤス王家には王女しか後継者がおらず、その苦労をひたすら甘受するしかない。臣下の胃は、もはや幾度も穴が空いている。

「だいたい、こんなおばさんに婿入りするなんて、おかしいのよ。わたし、今年でいくつになると思っているの？ 帝国に踊らされたのよ、陛下は」

「そんなことおっしゃらないでください、殿下！」

縁談を蹴りまくっていた王女は、適齢期を幾分か過ぎてはいるものの、魅力がたくさんあった。本人は「おばさん」だと言い、着用する礼装も地味なものばかりで、装飾にも手を出さないが、この歳になっても国の貴族からは直接口説かれるほどの魅力がある。実は大国からの縁談の申し入れは、これが初めてではなかったりするのだ。片っぱしから王女が縁談を蹴りまくっていただけで、中にはさまざまな国からの申し入れがあったのである。

漸くまとまったかと思つた縁談に、臣下を始めとした王や王妃は、大きく肩を落とした。

皇子はいつたい、どこに消えてしまったのか。

そんな、皆がもうどうしたらいいかわからないと、そう失望しかけていたある日のことだった。

「すみません」

と、王城の門番に声をかけた若い騎士がいた。

「はい？」

返事をした門番は、いつたいどこに属している騎士だろうと首を傾げながら、まじまじと騎士を見やった。どうやら二人連れのように、騎士の後ろにはひよろりとした青年が、ぼんやりと明後日の方向を眺めていた。

「トワイライ帝国近衛騎士、二の隊副長、ノルイエ・ファン・ラッシュと言います」

「は……トワイライ帝国？」

それは、迎え入れる予定の大国の皇子の、国名であった。騎士は、その国の近衛騎士だと名乗ったのである。ノルイエという騎士は、それからすぐ後ろの青年を引っ張り、門番の前に立たせた。

「こいつ、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライと言って、トワイライ帝国の皇子なんですけど」

「……、皇子？」

「ええ、そう見えませんがね」

「……皇子？」

「婿入りする予定なんですけど、当初の予定からだいぶ到着が遅れてしまいましたね」

ははは、と笑う騎士に、門番はたびたび耳を疑う。

「……皇子？」

三度めにそう訊いたとき、へらりと、青年が笑った。

「どうも、クロネイです」

それは確かに、大国から迎え入れる予定の、皇子の名であった。

トワイライ帝国の皇子、クロネイが、従者もつけず騎士とふたりだけでセムコンシャス王国の城に到着した話は、あつというまに城内に広まった。もちろん、王女の耳にも早々に届いた。

「騎士と、ふたりだけ？」

「ええ、そのようです」

「車は？」

「ありません」

「荷物は？」

「多少の持ち物はあるようですが」

「単品？」

「殿下、それは失礼かと」

そのとき王女は、瞬間的に「変な皇子が来たかもしれない」と、その面白さに興味惹かれた。ゆえに、思わず声を上げて笑っていた。

「な、なにその皇子」

「殿下……っ？」

「迷子になっていたわけでも、事故に遭っていたわけでもなかったのね。これだけ遅れて、いったいなにをしていたのかしら」

久しぶりに、腹の底から笑った。どうでもいいと思っていたことだが、人間的に皇子には興味が湧いた。

「ジーン、わたしを案内してちょうだい。ちょっと逢ってみたいわ」  
「今は王陛下と謁見しておられるようですが」

「かまわないわ。陛下も、わたしと同じように腹の底から笑っているでしょうね」

笑った衝動で溢れた涙を拭いながら、王女は侍女に案内させ、漸く到着したという皇子がいる場所へと向かう。廊下を進むたび、仕官たちが王女を振り向きはしたものの、その双眸は喜びや安堵、それに混じった不安などが含まれていて、しかし王女を不快にさせるほどの力はなかった。

王と皇子が謁見しているという広間の扉を前にして、王女は衛兵ににこりと笑いかけ、それから堂々と入室する。王女の予想に反して、謁見の間は静まり返っていた。というよりも、場違いな姿に、誰もが言葉を失っていた。

「こんにちは、はじめまして」

王女がそう声をかけて、初めて皆が王女の登場にハツとした。もちろん王女は皇子に声をかけたので、皇子も振り向いた。その姿は、あまりにも皇子らしくはなかったけれども。

「こんにちは、はじめまして。おれはクロネイっていうんですけど、あなたがおれのお嫁さんかな？」

ぬけぬけと王女を「嫁」宣言した皇子は、にこにここと笑っている。周りに花を咲かせている幻覚を見せるような笑みだ。思わず目をこすりそうになってしまう。

「シャルナユグ・ホロン・セムコンシャスよ。そうね、あなたがわたしのお婿さんかしら？」

花の幻覚に惑わされそうになりながらも、どうにかそこは王族としての矜持で乗り切り、王女は微笑む。雰囲気は気圧されるなんて初めての経験だった。

「シャル姫？ シャナ姫？ それともシャググ姫？」

「……、はい？」

「あ、ルナ姫かな？ どう呼んだらいいですか？」

呼び名のことか、と突拍子もない問いに目が丸くなる。意表をよ  
くついでくる皇子だ。

「お好きに、呼んでくださいませ？」

「では……シャナ姫、と。おれのことにはクロネと呼んでください、  
シャナ姫」

「……姫という歳でもありませんし、けっこうです」

「そうですか？ では、シャナ」

にこ、と皇子は笑みを深めた。また周りに幻覚であるう花を咲か  
せている。

と、そこに。

「あなたはクロで充分だ」

べし、と容赦ない平手で、皇子の後頭部を叩いた者がいた。皇子  
が唯一連れてきたという騎士だ。皇族に対し無礼な振る舞いではあ  
ったが、皇子の笑みは苦笑に変わっただけで、親しそうな雰囲気がある。

「痛いな……ああ、シャナ、こちらはノエです。ノルイエ・ファン・  
ラツシュ。祖国で近衛騎士隊に所属していて、おれの婿入りについ  
てきてくれた騎士です」

「お初にお目にかかります、シャルナユグ王女殿下。どうぞ、ノエ

とお呼びください」

王女に対しては律儀な態度を取るらしいノルイエ、ノエという騎士に、王女も顔を引き攣らせながらも笑みを向ける。

なんとというか、なんだろうこのふたり、と思う。この場の空気を、いったいどう読んでいるのだろう。そもそも騎士であるノエはともかく、皇子はまったく皇子らしくない格好だ。ノエのほうが、皇子だ、と言われて頷けてしまえる。皇子は皇族らしい派手な衣装ではなく、まったく地味な、街の青年だ。花を咲かせるような笑みがなければ、皇族だと言われても信じられない。

ここに来るまでに、いったいなにがあったのだろう。

それを訊く前に、まずはゆっくり休まれよ、という王の一言が間に入って訊けなかったが、確かにゆっくり休ませる必要があるそうだったので、その場は挨拶を交わすくらいにして王女は広間を辞した。



02 : 思いもしなかった。

シャルナユグ、シャナは考えていた。

「予算が足りないわ……」

「ええっ？ クロネイ皇子のこと考えてたんじゃないんですかっ？」

「は？ なんのこと？」

じつと見ていた書類から顔を上げて、心底驚いた顔をしている部下を見やる。

「は、って、は？ そんな憂い顔で、なんでクロネイ皇子のこと考えてないんですか。昨日ご到着したそうじゃないですか」

「……ああ、忘れていたわ」

「いつもの無駄にある記憶力はどこにいったんですか！」

「違うわよ。挨拶を忘れていたの。お疲れだと思って、今朝は遠慮しておいたのよ。今から行ってくるわ」

「え、今からっ？」

危うく本当に忘れるところだった、とシャナは書類を机に置き、くるりと踵を返して部屋を出る。部下が慌てたようにシャナを呼んでいたが、さもないことだろうから無視する。廊下に出れば、扉の前に控えていた近衛騎士が当然のように会釈し、歩き出したシャナの後ろに続く。近衛騎士にどこへ行くのかと問われたが、シャナはにやりと笑っただけにして廊下を進んだ。

しかしてその結果。

「まだ眠っておられる……?」

皇子、クロネイに宛がわれた部屋の前でシャナを出迎えたのは、律儀な皇子の騎士、ノエだ。

「体力もないくせに、二週間も歩きまわりましたからね。さすがに疲れたんでしょ」

「……歩き回った?」

ノエがぼろりとこぼしたそれに、シャナは食いつく。

帝国を出立して四日もあれば到着するセムコンシャス王国、しかし皇子は二週間もかかって到着した。

その理由を、ノエは口にしたのだ。

「ああ、王女殿下にはお話していませんでしたね。到着が遅れたのはクロ……皇子が、おれの目を盗んでは、道なき道を道として歩き回ったからですよ」

思わず、シャナは目を丸くする。

「……それは言い訳かしら?」

「ま、そうですね。事実ですけど」

「……もしかして皇子は、わたしとの婚姻がおいやなのかしら?」

「国を出られて万々歳、とかは思っていると思いますよ?」

沈黙する。

それはいったいどういことだろう。シャナとの縁談を、どうに

かして断ろうとした言い訳だろうか。いやそもそも、縁談を持ち込んだのはクロネイの祖国、トワイライ帝国のほうだ。となると、クロネイ自身が、シヤナとの婚姻をいやがったとしか思えない。

「わたしとの婚姻がいやなら、わたしはべつにかまいません。過ぎた歳ですし、もとよりその気もありませんでしたから。今回は父上……陛下の独断です。わたしが今こう言う限り、お帰りいただいてもけっこうですが」

変わった皇子だ、と思つて興味は湧いていたものの、シヤナには縁談に対する気持ちが薄い。というより、無きに等しい。いやいやながらも夫婦になるなら、友人のような関係ができれば上等だと、そんな気持ちでいたくらいだ。

だが考えてみれば、トワイライ帝国ほどの大国が、セムコンシヤス王国という小国に政略的な縁談を持ち込んだところで、利益があるのはセムコンシヤス側だ。トワイライ帝国にはなんの利益もないはじめからおかしい話だと思つてはいたが、やはりこれはおかしな話だったかと、シヤナは思った。

その、ときだ。

「シヤナの匂いが……ああ、おはよーごじやーますー」

噛みまくつた朝定番の挨拶に、正直吃驚した。気配がまるでなかったし、扉が空いた気配もなかったからだ。

「んな恰好で出てくんなよ、クロ。かつこ悪いぞ」

シヤナが吃驚していても、ノエのほうはまったくそんなことはな

く、寝間着姿のぼさぼさ頭で部屋から顔を出したクロネイに、暢気に話しかける。

「いにや、すつごくにえむくて……きづいたら、ひる？」と

「すぐえ勢いで噛みまくりだな、おい。なに言ってるかもわからん」「ちよお、まって……おきるから」

「ごしごしと目を擦ったクロネイは、やはりなんというか、皇子らしくなかった。

「おはようございます、シヤナ」

完全に目が覚めたわけではなさそうな、けれども朝ならとても爽やかな笑みを、シヤナは真正面から受けた。

「お……おはようございます。もう昼ですが」

「すみません、眠り過ぎました。思った以上に疲れていたみたいですよ。柔らかい寝台なんて初めてですし、あんなに寝心地がいいとは予想外でした」

「いやはや失礼、と言いながら、クロネイはシヤナを「どうぞ」と部屋に促した。

「え？」

「すぐに、着替えます。中でお茶でもどうぞ。ノエが淹れてくれるお茶は意外と美味しいですよ」

「いやそんな、いくら婚姻が決まっているとはいえ、部屋を別々にされている以上、正式に夫婦となるその日までは挨拶程度のものしか交わすことは許されないものだ。セムコンシヤス王国では、それ

が婚前の数日間とされ、外出が制限される。だからシャナは儀式的に挨拶に伺ったわけだが、クロネイはそんなシャナの返事を訊くことなく部屋に戻っていく。

シャナは、ちらりとノエを窺った。

「こちらの通過儀礼はご存知？」

「一応、教えましたけど」

「……知識としてはあるのね」

「クロには関係ないですね」

「どういふことよ」

「昔からああですから」

つまり人の話を聞いているようで聞いていない。また、聞いていないように聞いている。そういうことだ。

「変な皇子……」

思わずそうこぼすと、ノエは苦笑した。

「いろいろあるんですよ」

そう言いながら、ノエも慣習をわかっていながらシャナを部屋に促した。ここで断るのもどうかと思い、シャナは近衛騎士を伴って部屋にお邪魔する。

中央の長椅子に腰かけ、ノエのお茶をいただくとすぐ、クロネイは続き間の寝室から出てきた。瞬間的に瞠目してしまうのは、これはもう仕方ない。

「待たせてすみません。急いで用意したので、これしか着るものがなくて……どこかおかしいですか？」

昨日もさつきも、まったく皇子らしくなかったクロネイだが、着るものが変わると雰囲気までがらりと一変する。整えられた髪は、昨日までは薄汚れていたのか灰色に見えたが、実は銀髪であったらしい。夕焼け色の双眸は、寝起きのせいか少し潤んでいて、頼りない。それを包むように白い礼装が、漸くクロネイを皇子らしく見せている。

しかし、その白い礼装は、神官のものだ。

「神官でしたの？」

「え？ あ、違います。なにか着るものはないかとお願いしたら、急なことでこれしかないと言われまして」

それを甘んじて着ているわけか、と思うと、本当に皇子なのか疑いたくなる。そもそも、着るものをお願いするとは、どういうことだ。

「そういえば荷物が……帝国から多少は届いていましたが」

「ああ、それはおれのではないですよ。おれのは、昨日持っていたものがすべてですから」

確かに、皇子の私物と思われるものは、トワイライ帝国から届いていない。婚姻に伴って必要になる最小限のものしか、送られてきていない。

しかしながら。

「昨日の……あれがすべて？」

身一つのように思えたのだが、と首を傾げたら、クロネイは苦笑

した。

「あちこち歩き回るには、路銀が必要でしょう？ 換金しながら歩いたので、荷はほとんど無くなってしまいました」

あはは、と笑う神経が知れない。

この大国の皇子は、本当に歩きでこの国までやってきたらしい。

「車はいかがされたのです」

「途中で換金しました。いい値で売れましたよ」

がく、と肩が落ちる。車まで換金したらしい。それも、ここに来るまでに二週間は経過しているわけだから、おそらく出発したその日に売ったと思われる。

なんて皇子だ。

「あなた、本当に皇子なの？」

うつかりそう訊いてしまったが、クロネイはただ柔らかく笑んだ。

「たぶん」

しかも曖昧な答えを返された。

「とりあえず、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライという名は、おれが持つ唯一の名ですよ」

偽名ではないし、偽者でもないと、クロネインは言う。

「ああ、もう少ししたら、クロネイ・エイブン・セムコンシャスで

すね」

などと、暢気にも言う。

「この皇子は、その名が本物である限り、確かに大国の皇子だ。」

「……わたしと婚姻する気があるの？」

「ああそれ、いいですね」

「はい？」

「おれに敬語は要りません」

「それならあなたも……」

「いえ、おれはシャナの地盤になるために、ここへ来たんです」

ふとシャナは、口を噤む。

シャナの地盤になるために、などと言う男は、初めてだった。口説く文句としては、一流かもしれない。この国では、いくらシャナが優秀でも、女だからという理由で卑下する者が、少なからず存在しているのだ。

シャナが言葉を失っていると、クロネイはさらに笑みを深めて言った。

「シャナという花を、明日に、繋げるために」

ただただ、優しい笑み。

そして力強い笑み。

「おれをあなたの婿にしてください、シャナ」

こんなところで、こんなふうに、求婚されるとは思いもしなかった。





どうやら神官服がお気に召したらしいシャナの婿どのは、荷を売り払ってしまったせいで着るものがない婿のためにシャナが急きよう意させた礼装より、好んで神官服を着て歩いている。おまけに、そちらの方面にでも力を入れるつもりなのか、神学まで学び始め、一日の大半を神殿で過ごすようになっていた。

そしてなぜか日課となっているのが、シャナとのお茶会である。

「地の女神、天の大神……アヌ神とラグナ神は、親子なんですよね」

この日も神官服を着たクロネイは、子ども向けの絵本の形式を取っている聖典を手に、にこにここと笑ってお茶をしている。

「なんだか嬉しそうね」

「祖国では学ばませんでしたから、いろいろと楽しいです」

「学ぶことが？」

「ええ」

聞いた話によると、クロネイはものすごい勢いで神学を吸収しているらしい。到着からわずか五日で、聖典の半分を暗誦できるくらいまでになったとか。しかも古文のほうで、だそうである。

「まあ神学は、狭き門でもあるから……難しいかもしれないわね」

「シヤナは信仰しないのですか？ あ、王族の方に失礼なことでしたね」

「かまわないわ。そうね……人より薄いかもしれないわ。道は己れ切り開くもの、神を頼ってばかりもいられない。そう思うから」  
「さすがシヤナ」

にこ、と笑みを深めたクロネイは、シヤナの素直な本音に文句を言うこともなければ、王族のくせになんたる不信心、と罵ることもない。

セムコンシヤス王国の信仰は、地の女神アヌと、天の大神ラグナの二神を信仰している。この大陸を作りたもうた神として、クロネイの祖国トワイライ帝国でも信仰されている。つまり一般的な宗教で、信仰者が多い。それでも、神学という学問にしまうと、そこは狭き門である。戒律が厳しいからだとされているが、本当のところは、神の声を聞くことができなければ神官にもなれないからだ。それでも人々は、たとえ声を拝聴できなくとも、二神を信仰する。

宗教とは人の想いの集合体であり、心の支えであり、拠り所であるものだと、シヤナはそう思うから信仰心が人より薄いのかもかもしれない。

「あなたは神を信じるの？」

「半分は」

「半分？」

「この大陸を作りたもうた神、なのでしょ？ 大陸の歴史は、人々の歴史より長くて、さすがに根源がわかりませんか」

なるほど、クロネイは原点的な部分で神の存在を信じているらしい。

「そうね……わたしも大陸の歴史は、わからないわ」

「それこそ、神のみぞ知る、ことでしょうか？」

「その通りだわ」

「人の歴史は、遺跡やそれらにまつわるものを調べればわかります。土を見て、層を見て大陸のことを知ることはできるでしょうが、それは大陸の年齢みたいなものでしょう？ しかもその年齢すら、知るには限界がある。土を掘り続けることなんて、できませんからね」

言うことは的を射ている、と思う。

確かに、と頷いて、シヤナはクロネイの手許に視線を移した。

「聖典を暗誦できると、伺ったけれど」

「ああ、これですか？ 絵が綺麗で、気に入ってしまいました」

「そう……将来は神官の道に進むつもり？」

「シヤナの地盤になるには、必要なことでしょうか？」

神官の資格は取るつもりでいる、らしい。資格とは、もうすでにクロネイは達成しているようなものだが、聖典を暗誦していることを前提とし、神の声を聞けることだ。

「……あなたは聞こえるの？」

「聞こえる？ なにがです？」

「声が」

聞こえなければ神官になることはできない。今こうしてクロネイが神学を学んでいるのは、シヤナの夫となることが確定し、王族として扱われているからだ。

「おれに天恵はありませんよ」

はは、と笑って答えたクロネイに、少しだけ、目を見開いた。

天恵とは、授かった者の多くが精霊と契約することにより、その属性の力を使うことができるものの、総称である。水の天恵を授かれば、水精霊と契約することでその属性の力が使え、風の天恵を授かれば、風精霊と契約することでその属性の力を使えるようになる。天恵を授かった者の多くは、いやほとんどは、精霊と契約し、天恵術師と呼ばれていた。

そして、授かる天恵は一つだけであるから、精霊と契約し力を揮うことができても、一つの属性しか扱えない。

だが、それらの法則から外れた天恵者が、いないわけではない。稀に、二つの属性天恵を授かり、精霊がふたり、扱える力も二つという天恵術師がいる。ふつうの天恵者の一割にも満たない人数だが、確かに存在している。

さらには、そこからもっと外れた天恵者も、いないわけではない。たとえば、神官の天恵。セムコンシヤス王国では、神の声を聞くことができる者を、神官と呼ぶ。トワイライ帝国でも、神官は神の声を聞くことができる者のことだ。神官は精霊と契約しない。精霊と契約しなくとも、天恵を使えるからである。

つまるところ、精霊と契約しない、特定の天恵を授けられる場合がある、ということである。

クロネイは神官の資格を取るつもりでいるようだが、必要とされるその特定の天恵、神の声を聞く力がなければ、神官の資格は得られない。

「神のお声を拝聴できないのに、神官に？」

「え？ ああ、そういう意味ではないです。天恵はありませんって、それだけですよ」

「だから、神官には天恵が必要なのよ。お声を拝聴できる、天恵が知らないのだろうかと教えれば、クロネイは予想通り、吃驚したような顔をした。」

「え、そうなんですか？」

「本当のところはわからないけれど、その天恵がなければ神官にはなれないと、わたしは聞いたわ」

「……あれ？ そうなんですか？」

「やたらと首を傾げるクロネイに、シャナのほうも首を傾げたくなくなる。」

「なにを疑う、いや、確認しようとしているのだろう。」

「天恵がないと、神官にはなれないわよ」

「確かにおれは天恵を授かっていませんが……あれ？」

「なに？ なにが疑問なの？」

「シャナの話ですと、神の声を聞く力が、神官に必要な天恵だと、そういうことになりますよね？」

「そうよ」

「あれ？」

なにやら考え込むように首を傾げたクロネイは、ふとシャナに断りを入れ、席を立った。露台でお茶をしていたのだが、そこから部屋の中へ入ることはなく、露台の前に広がる庭でシャナとクロネイを護衛するノエを呼び、欄干に手をつく。

「ノエ！ ノルイエ！ ちょっと」

「ああ？ 姫とのお茶を邪魔すんなんて言ったの、あんただろうが」

そんなことを言っていたのか、と思いながら、怪訝そうに近づいてきたノエをシャナも見やる。

「おれ、神官になれないみたいなんだけど」

「は？ なに、あんた神官目指すのかよ、今度は」

「必要だろ」

「はあ。まあ、あんたならなれるんじゃないやね。あれだけ気に入られていれば」

「でも、おれ、天恵ない」

「なんで天恵が関係あるんだよ」

「神官は、神の声を聞く天恵が必要だそうだ」

「……ん？ あんたいつのまに天恵者になった？」

「やっぱりそうなる？」

ノエとの会話では、クロネイもやはり敬語が出ないらしい。ノエが敬語でないのは首を傾げたくなることだが、シャナが気になったのはふたりのそればかりではなかった。

「そのお話、どういうこと？」

と、思わずふたりの会話に参加してしまう。

「天恵者になった、というのは、どういう意味？」

問うたシャナに、答えたのは怪訝そうな顔をしたままのノエだ。

「そのままですよ。クロに天恵はありません。けど、神官に必要な天恵が神の声を聞けることってのは、おれらにしてみたら変な話です」

「え？」

さっぱり意味がわからなかった。

「クロは、神にめっちゃくちや気に入られてますよ。アヌ神とラグナ神ではありませんが」

「……、はい？」

どういうことだそれは、とシヤナは瞠目する。

「おいクロ、呼べるか？」

「ん？ うん、たぶん」

呼べる、と突拍子もない発言をしたクロネイは、ふと空を仰いだ。

「ミスト」

それは呼ぶというよりも、囁きかけているように、声を風に乗せていた。

そうして。

「びつくりだよ、クロ。呼ばれたのも吃驚だけど、なんでアヌの故郷にいるの」

と、空から人が降ってきた。しかも、その人の背には、白い羽が生えていた。





はあ、と王女シャルナユグは憂い顔でため息をつく。誰もが目を奪われるその姿に、しかし困ったようにクロネイが苦笑している。

「あの、シャナ？」

遠慮がちにかけられた声に、シャナはどうにか気を取り直して顔を上げる。

「今のお方が、風の神である？」

「ミストです。風と水を司る神だと、自分で言っていました」

先ほどまでのことを思い出すと、またため息がこぼれる。

「ああ、そんなにため息をついたら、せっかくの幸せが……」

クロネイの心配に、今はそれどころではないと、気が滅入る。

シャナの話に疑問を持った騎士ノエが、クロネイに「呼べるか」と問うて呼び出したのは、風と水を司るといふ神、風水神ミストだった。お伽噺のような神の存在を、そんなにも簡単に、あっさりと呼び出されて、平然としていられるわけがない。

神の声を聞いたこともなければ、姿を見たこともないシャナには、かなり衝撃的なことだった。

「この衝撃をどうしたらいいのかしら……」

「そんなに驚かせてしまいましたか？」

「神という存在を信じていないわけではないけれど、いきなり目の前に現われたお方に対して、わたしに驚くなと？」

「ああ……そうですよ、すみません。ミストはおれの友人みたいなもので、昔からああやって突然現われるもので」

突然なにかしらの気配が現われることに、驚くことがあまりないのだと、クロネイは暢気にも笑う。そういえば、クロネイも気配なく動くようなところがある。ノエはそれに驚くことがない。彼らは本当に慣れているのだろう。

「それにしても……本当にあのお方は、神であられると？」

「自分でそうだと言っていましたから、そうだと思いますよ」

「……翼のある人間など、いませんからね」

突然現われた翼のある神は、来たかと思えばすぐにどこかへ飛んで行ってしまった。

『アヌの故郷かあ……久しぶりだからちよつと遊んでくるね』

と、神というには軽い調子で、飛んで消えたのである。

シヤナが知る神話の風水神は、確かに翼のある神であったから、調子が軽くともあれは神なのかもしれない。

「なぜ……なぜ、風の神があなたの呼びかけに、応えるの？」

「呼んだのは今回が初めてですよ」

「え？」

「ここでは、という意味ですよ、もちろん。シヤナもご存知のとおり、帝国もセムコンシヤス王国も、アヌ神とラグナ神を信仰しますでしょう？ ミストは、ごく一部の限られた土地で信仰される神で、この地には縁もゆかりもありません。が、呼んでみたら来てくれた

ので……どうやらアヌ神とお知り合いのようですね」

「シャナが訊きたかったのはそういうことではないのだが、クロネイが言うことは間違っていない。風水神は、この地では信仰されていない神だ。」

「おれがいたのが、そのごく一部の土地でしたから、まあそこで知り合ったといえますか……気に入られたといえますか」

「……あなた、なに者？」

「いったいクロネイは、なにがどうあって、神と知り合いなどという間柄になったのか。天恵者ではないというのは、これでは嘘になる。神の声を、直接に逢って聞くことができるのだ。」

クロネイは、にこりと微笑んだ。

「おれは、シャナの婿ですよ」

銀の髪が、さらりと風に流される。それはきらきらと光っていて、シャナは眩しさに目を細めた。

「なぜ笑うの？」

「シャナが好きだなと、思うからです」

「……そんなこと、軽々しく言うものではないわ」

なんなのだろう、この皇子は。

神と知り合いだというくせに、その天恵はなく、しかし恩寵を受け、それがさもふつうだとばかりの態度を取る。平然とシャナに求婚し、婿だと言い、好きだなどと言う。

ここへ来るまでに二週間もの時間をかけ、まるで逃亡しているかのように、遅れて現われたくせに。

なんだか不愉快だ。

シヤナは、国のためと思って大国の皇子との縁談を受け入れはしたものの、気持ちはそれに追いついていない部分がある。クロネイのような皇子でなければ、到着したその日に追い出してやっていたところだ。シヤナは婚姻など、受け入れたくもない。

「わたしと出逢ったのは、つい最近のことでしょうに……っ」

「……時間が必要なのですか？」

「わたしは断ったはずよ！ 皇子を婿に迎えるつもりはないと……今後、誰とも婚姻しないと！」

「知っていますよ」

だからなんだ、とばかりにクロネイが苦笑する。

不愉快でならない。

なぜ、クロネイは笑うのだろう。

なぜ笑えるのだろう。

シヤナは受け入れないと、そう言っているのに。

「もういいわ……っ」

儀式的にクロネイとの面会はしていたものの、それも今日までにしようと、シヤナはお茶の席を立った。

望んで受け入れた縁談でもない、クロネイとは友人のような関係が築けられたらいい、その思いは変わらない。クロネイがなに者であろうと、それはシヤナには関係ないことだ。神と知り合いだろうがなんだろうが、天恵があるうがなかるうが、シヤナが気にかける必要はない。

それを。

「シヤナ」

クロネイが、止める。手を取られ、近くに引き寄せられた。

「なにをするの……っ」

「シャルナユグ」

引き寄せられた先には、クロネイの玲瓏な顔がある。まるで、ひとり腹を立てているシヤナを宥めるかのような、そんな微笑みにシヤナは不覚にも囚われてしまう。

「おれを受け入れられなくても、おれは、シヤナの婿です」

「そん……なこと、わかっているわ」

「シャルナユグ」

「なによ」

真摯な双眸が、じっと、シヤナを見つめてくる。あまりの真っ直ぐな瞳に、シヤナはいたたまれなくなつて視線を反らした。

「シヤナ、あなたがおれを受け入れられないのも、わかります。おれのような人間が、皇子だとは思えませんものね。それでもおれは、あなたの婿になりたいです」

「そんなに繰り返し返さなくても、この縁談はもう白紙にはできないわ。わかっているわよ」

「……ごめんなさい」

「？ なぜあなたが謝るのよ」

視線をクロネイに戻したら、なんだか泣き出しそうな顔をしたクロネイが、それでも笑おうとしていた。

この皇子は表情が豊かだ。感情の一つ一つに表情があつて、さま

ざまな顔を見せる。それでも、その夕焼け色の双眸だけは、いつもどこか暗い。

「おれみたいなのが、あなたの婿になろうなど、無礼だと承知しています……それでも……それでもおれは、シヤナの地盤で在りたい。だからシヤナ、おれがあなたの後ろにいることを、許してください」

「……許すもなにも……わたしに対して無礼とはなに？ わたしは確かに王女よ。けれど、わたしの国はあなたの国には及ばぬ小さな国。無礼と言うなら、わたしのほうよ」

許しを請うたクロネイに言い返すと、泣きそうな顔をしながら笑おうとしていたクロネイが、本当に無理やり笑った。

なにもそんなに無理をして笑うことはないのに、なにが彼をそうさせているのか、不思議でならない。

「あなたの婿に選ばれて、おれは幸せですよ」

「……幸せ？」

「こんなおばさんを娶ることの、どこが幸せだというのか。花盛りも過ぎ、あとはただ緩やかに老いていくこの身は、シヤナよりも若いクロネイには不相応だ。

シヤナは望んでいない、それなのにクロネイは望んでいる、その関係にシヤナは眉をひそめた。

「わたしはあなたより、十も歳上なのよ」

「九つですよ」

「適齢期も過ぎた、おばさんなのよ」

「素敵なご令嬢ですよ」

「あなたを幸せになんてできないわ」

「幸せですよ、おれは、充分に」

クロネイがわからない。

ノエは言っていた。国を出られて万々歳、と思うくらいには、この縁談をクロネイが受け入れていると。果たしてそれは、どういう意味だったのか。幸せだと言うその口で、本当はなにをどう思っているのか。

「……式までにもう時間がないわ。帰るなら今よ」  
「いやですよ」

帰らない、と言ったクロネイは、それまで掴んでいたシヤナの手を離し、帰るものかと言わんばかりに身を引く。拗ねたような顔までして、そっぽを向いた。

「……帰る場所なんて、おれにはない」  
「え……?」

ひらりと身を舞わせて欄干を超えたクロネイは、帰る場所がないという言葉に少し驚いたシヤナを振り返ると、「帰らないから」と繰り返して、そのあとすぐ庭を走り抜けていった。

「あー……あほめ」

ノエはクロネイを追いかけることなく、呆れた顔で見送っている。

「姫」

と、ノエがシヤナを呼ぶ。

「あいつ、わりと素直なんで、だいじょうぶですよ」



笑ったノエは、シャナの不安を和らげるようにそう言って、漸くクロネイを追いかけて走り去った。

「帰る場所がないって……どういうことよ」

最後にそんな大きな疑問を残していくなんで、胸中がもやもやする。

あの皇子は、いったいシャナを、どうしてこつも振り回すのか。

「もっ……っ」

ちょっとした苛立ちに、シャナは拳を握って欄干を叩いた。手が、ただ痛むだけだった。

喧嘩、のようなものを、したと思った。

けれどもそれは、シャナの一方的な感情であつたらしい。

クロネイは、「帰らない」と言つてシャナとお茶の席を離れたが、翌日も同じようにシャナのところに来て、お茶に誘つてきた。その翌日も、そのまた翌日も、シャナが戸惑うのをよそに、クロネイはやって来た。ただ、「帰るなら今よ」と言つたシャナのそれには反抗心があるらしく、ずっと拗ねたような顔をしている。ノエが「わりと素直なんで」と言つた通りの、正直な反応だ。

そしてこの日も、クロネイはシャナのところにやって来る。やはり神官服姿で。

「シャナ、シャナ、休憩でしょう？ 休憩しましょう。お茶にしましょう」

懲りずに来たか、と思つてしまうのは、シャナが喧嘩のようなものをしたと思つていたからだ。

「殿下、皇子も来たことですし、休憩にしましょう」

「今日は無理よ。わかつているでしょう？ 皇子、今日は忙しいの、明日にしてくれるかしら」

シャナは書類から顔を上げることなく、部屋に顔を覗かせていた

クロネイに、素っ気ない態度を取る。部下たちがはらはらとしていたが、かまっていられない。今日は忙しいのだ。夕方に貴族院の会議が控えているため、城には貴族や各領地の領主が集まりつつあり、シヤナも議題になるであろうことをまとめて考えておかなければならない。

「少しくらい休まないと……それに、議会は明日もあるでしょう。しかも夜会もありますよ」

「ああ、そうだったわね。礼装は手配したわ。袖を通して、身体に合わせて確認してちょうだい」

「済ませました。ぴったりでした。さすがシヤナです」

「そう。なら、あとはおとなしく部屋にいなさい。明日の夜会は、臣下にあなたをお披露目するという口上もあるの。うるちよろしいで」

部屋にいたくないなら神殿でもいい、とシヤナはクロネイをばっさり無視する。なにか言ってくるかと思ったが、それもなくて静かです。沈黙が続いた。静か過ぎるなと思ってふと書類から顔を上げたら、いきなり背後に人の気配がする。

「それなら、ここにいますね」

吃驚だ。どうしてこう、気配なく動くのか。

「ちょ……部屋か神殿にいなさい。わたしは忙しいのよ」

部下が用意したのか、クロネイは椅子を運んで、シヤナの後ろにちょこんと置いて座っていた。

「邪魔はしません。いるだけです」

「皇子……」

「ああそれと、おれはクロネイです。クロネがいやなら、ノエのよ  
うにクロでもいいです。犬みたいでイヤですが」

「……呼んで欲しいなら、その敬語はやめて」

「え」

そう切り返されるとは思わなかった、とばかりにクロネイ、改め、  
クロは目を真ん丸にした。それは思った以上にクロを子どもっぽく  
見せ、可愛らしくした。

「敬語をやめたら、本当に呼んでくれるのですか？」

「やめたら、ね」

「わかりました、やめます。クロネって呼んで、シヤナ」

「え」

今度はシヤナが目を丸くする番だった。そんなにあっさり敬語を  
やめるとは思わなかったのだ。

「最初にやめてと言ったときは、いやがったくせに……」

「それはそれ、これはこれ。やめれば呼んでくれるなら、やめるよ」

ああ、素直だ。まさに素直だ。ノエの言うとおりだ。

「シヤナ、クロネだよ、クロネ。はい、呼んで」

うきうきと、目を輝かせるクロに、シヤナはたじろぐ。確かにこ  
の先ずつと「皇子」と呼ぶわけにもいかない、それはわかってい  
ることだが。

「く……クロ」

呼ぶならそつちのほう可愛い、と思っていたことは内緒にして、シヤナは顔を引き攣らせながら口にする。  
すると、とんでもないものが待ち受けていた。

「しゃ……しゃな」

ぶわりと、全身から花を咲かせたクロが、夕焼け色の双眸をきらきらと光らせて満面に笑みを浮かべていた。随分な感激の仕方だ。名を呼ばれることが、だいぶ嬉しいらしい。

眼の端に移る部下たちが、そんなクロを見て目許を手巾で拭っているように見えるのは、気のせいだろうか。いやはやよございましてね、皇子、などという眩きも、幻聴だろうか。

ハツとする。

話が反れた。

「へ、部屋に戻んなさいっ」

「やだ」

「く……っ」

不覚にも、可愛いと思ってしまった。

「わ、わたしは忙しいのよ。そこにいられると集中できないの、邪魔なの、だから戻りなさい」

「邪魔はしない。ここがいやなら、露台にいるから」

どうしてもシヤナとお茶がしたい、或いはそばにいたいらしく、後ろのほうが目なら露台のほうに移動すると、クロは粘ってきた。

「皇子……」

「クロ、だ。クロネがいいけど」

「……もう一度呼ばれたかったら、部屋に戻りなさい」

「え」

それはひどい、という顔をされる。本当に表情が豊かな皇子だ。

「殿下、少しくらいいいじゃないですか。殿下も皇子も、一日に逢う時間はこの休憩のときだけなんですし」

擁護してきた部下に、クロの目が輝く。それはあまりにも眩しい。絆されるものかと思っただ、見つめられるとどうも、なにか言うたびにシヤナが虐めているような気がしてくるから不思議だ。

シヤナは深々とため息をついた。

「ああ、そんなにため息をついたら幸せが……」

「皇子」

「クロだよ」

名を呼ばれたいしそばにもいたい、それがありありと伝わってくる。

けつきよくシヤナは、「少しだけよ」とクロの滞在を許した。クロだけではなく部下までそれを喜んで、休憩しないつもりが、お茶を飲みながらの仕事、になっちゃった。

「進まないわ……議会で変な発言したらどうしてくれるの」

「シヤナならだいじょうぶ」

「その確信はどこからくるのよ」

「いつもかつこいいから」

「……かつこいい？」

「凜としていて、清々しくて……羨ましいくらいだよ」

椅子に深く腰掛け、背もたれに身体を預けたクロが、柔らかな笑みを浮かべながらシャナを褒める。シャナには、その余裕こそが羨ましく感じられた。これで自分より歳下だなんて、正直驚かせられる。

「……あなたも参加する？」

「おれ？ 無理むり、おれは国政向きの頭でないから。シャナが戻ってくるのを待っているよ」

敬語をやめたクロは、歳相応というよりも、少しおとなに見えた。敬語のままであったほうが、よほど子どもっぽく見える。なんだか、すぐに追いつかれそうだ。歳上の威厳というものも、掻っ攫われそうに思う。

「……クロ」

「ん？」

「わたしはあなたより歳上だけれど、だからといって、わたしに追いつこうなんて思わなくていいのよ」

無理をしてまで、早く成長しようなどと、思って欲しくない。今このとき、一瞬一瞬を大切にしたい。

本心からそう思って口にすると、クロは唇を歪めた。

「おれはもう成人したよ」

「そうね……それでも、わたしから見たら、あなたはまだ子どもよ」「成人した」

「わたしが成人したのは、あなたとの歳の差の年数分、前のことよ」  
ムツと、クロが不機嫌そうな顔をする。

「……シヤナは、おれが歳下なのが、いやなの？」

「違うわ。今このとき、一瞬一瞬を、大切にして欲しいのよ」

「なら、おれもそれをシヤナに言うよ。シヤナも、今を大切にして欲しい」

椅子を離れたクロが、ゆっくりとシヤナのそばまで歩み寄ってきて、すぐ近くで跪いた。

「おれに今を大切にして欲しいと言うなら」

シヤナの手を、クロはそっと、握ってくる。

「シャルナユグ」

なぜだろう。見上げてくるクロに、心が反応した。

「おれと一緒に歩む未来も、大切にしてくれないか」

それは、まるで二度めの、求婚に聞こえた。



礼装効果が、遺憾なく発揮されていると思う。

シヤナが見立てたクロの礼装の色は白、装飾も少なくし、質素に仕立てていた。

それを当人に着せてみると、外見だけはちゃんと皇子に見える。

「確かに皇子ね」

「え。おれ、疑われたままなの？」

「ふだんがらしくないからよ」

「あー……ごめんなさい？」

「その口は、らしくないままね」

「敬語をやめると言ったのはシヤナでしょうに」

「そこまで崩れているとは知らなくて」

「見本があれだから、仕方ないよ」

あれ、と言われた見本は、飄々としているノエだ。どうやらノエは、近衛騎士兼お幼馴染であるらしい。

「おれのせいにすんなよ」

「ノエのせいだよ。おれのこと皇子扱いしないし」

「それはあなたの気質がそうだからだろうが」

「う……」

仲がいいとは常々思っていたが、本当に仲がいい。ノエの口調が

クロに対して皇子扱いでないのは、幼い頃からずっと一緒にいるからだろう。

「皇子らしくないのは、昔からのね」

「そう言うけど、なら皇子らしいって、なに？」

「そうね……まず神官服は着ないと思うわ。もっと派手な衣装で、傲慢で、高慢でしょうね」

「……シヤナは、おれにそうあって欲しいの？」

「いいえ」

そんな王子を見たことがあるから警えにしたのだが、シヤナとしては真つ向からお断りである。

「皇子らしいってなんだろう……んー」

「逆に訊くけれど、どうしてそれを悩むのかしら？」

「シヤナは、おれが何番めに産まれたか、知ってる？」

「皇子としては第三、だったかしら？」

「母親が正妃だから皇子としては第三だけどね、上から数えるとおれ、十番めくらいなんだ。そこまでくるとね、もうほとんど放置なんだよ。テキトーに生きる？ みたいなの？」

「ええ？」

まさか、と思ったが、本当のことらしい。ノエまで頷いている。

ふつつなら、なにが起こるからわからないからと、不謹慎なことではあるが、皇子も皇女も関係なく平等に教育されるものだ。しかしクロには、その平等が行き渡らなかつたという。

「もう誰が姉上で誰が兄上なのかもわからないんだよ。どこかに嫁いだり、婿に行ったりで、一番上の兄以外もういないから」

「わからないものなの？」

「そもそも、本当におれが陛下と妃殿下の息子なのかも、不明だしね？」

「えっ？」

「って、それは冗談。おれ、妃殿下の若い頃にそっくりらしいし、性格も陛下に似てるらしいから。これはお墨つき。安心して」

驚かせないで欲しい。ただでさえ臣下たちがクロの素性を改めている最中であるのに、そんなことを言われたら大変なことになる。

「びつくりさせないで。わかっているでしょう？ あなたのことを

疑っている貴族は、まだいるのよ？」

「たとえばファルム侯爵？」

「知ってるの？」

「シヤナのおじいさんだよ。到着したその日に、挨拶に行ったよ」

いつのまに行動していたのか。確かにファルム侯爵は、シヤナの母、王妃の父で、シヤナにとって祖父にあたる。これがなかなかの堅物で有名だ。

「これが大変だったよ。おまえのような人間は知らん、の一点張り……名乗ったんだけど、恰好が恰好だったから逢ってくれなくて。

どうしようかなあと考えていたら、おれってば一時間以上そこに突っ立ってたみたいだね。邪魔だつて追い出されるかと思ったら、恰好をどうにかできれば逢えるかもしれないよって、親切にも教えてくれた人がいたんだ。そこでなにか着るものありませんかってお願いしたら、これに着替えるって、神官服くれたの。で、着替えたら逢ってくれたんだよ」

「いつ逢いに行ったのよ？」

「ん、シヤナに逢ってすぐ。ほかに、有名どころには挨拶に回って歩いたよ」

その辺はばつちりです、とクロはニツと笑う。思わず顔が引き攣った。やるべきことはとうに済ませていたらしい。

そして、好んで着用していると思われる神官服は、間接的にファルム侯爵からいただいたものだから、という理由で律儀にも袖を通して続けていたようだ。

「シヤナからもらった衣装は、部屋にいたときに着てた。だってシヤナからだし？」

「恥ずかしいから言わないでくれる？」

「これを自慢しないでどうするの？」

「誰に自慢するのよ？」

「国民みんな」

「やめて」

「今日の衣装もシヤナがくれたもの」

「やめて！」

そもそも着替えすら売り払って路銀にしたクロが悪い。

まったく、シヤナの婿どのは、たまにものすごいおとなびて見えるのに、子どもっぽいところもあって大いに振り回してくれる。

「婚礼衣装も楽しみだな。シヤナが見立ててくれるんだよね？」

「仕方ないでしょ。あなた、婿なんだから」

「ねえシヤナ、おれ、かっこいい？」

「……、は？」

「ほら、シヤナが見立てて用意してくれたこの衣装、どうよ？」

歳下だからか、それとも兄弟が多いクロだからか、歳上が思わず歳下を可愛いと思うその仕草をよくわかっているような気がするの  
は、シヤナの気のせいだろうか。

「珍しく皇子らしく見えるわ」

「それひどいな」

「事実よ」

「ふだんはどう見えてるんだよ……」

クロの玲瓏な容姿は、そうでなくとも人目を惹く。銀の髪、夕焼け色の双眸など、この国にはいないのだ。綺麗だと、思うことはシヤナでもしばしばある。

そこに可愛いが加味されるから、シヤナは困っている。

クロに、本当に慕われていると、勘違いしそうになるから。

自分が愛されようとしていると、思ってしまうから。

「シヤナ？」

「……なんでもないわ。ジーン、わたしも着替えるから、お願い」

「おれも手伝う」

「やめて」

「ひどい、即答だ」

「当たり前よ」

ばかなこと言わないで、とクロに背を向け、侍女のジーンを呼ぶとシヤナは寝室に入る。そう、クロはなぜかシヤナの部屋にいて、侍女や侍従をにこにこさせている。もともと衣裳部屋が寝室のほうに隣接しているので着替えに不便はないが、クロがいるといたいのとは、心持ちが変わる。そもそも、セムコンシヤス王国の慣習を無視してくれているクロは、いつでもシヤナを驚かせるわけだが。

「シヤナ」

「きゃあ！」

「え、もう着替え終わったよね？」

ちよつと着替えを終え、そう長く伸ばしてもいない髪をジーンに結び上げてもらっている最中に、クロは突然と寝室に顔を出してシヤナを驚かせた。

「婚礼もまだの間で、簡単に入ってこないで」

「いいじゃないの。おれとシヤナの仲だろ」

「どんな仲よ。そもそも、本当なら部屋に入ること厳禁なのよ？ それ以上は入ってこないでちょうだい」

「それは残念。けど、ここまで来たし、せつかくだからいいでしょ」「なにがっ？」

ふつと笑ったクロが、しっかりと寝室に入ってくる。もちろん扉は開いているし、閉まらないようにノエが扉を押さえている。

「髪、結わせて？」

「え？」

「触りたかったんだ。シヤナの髪、綺麗だから」

そう言つて、クロは戸惑うジーンから櫛を受け取ると、勝手にシヤナの髪に触れた。

「わあ、柔らかい。金つて、硬いかと思つただけだ」

「ちよ、え、クロ？ ジーン、なにをさせているの？」

「おれの髪は硬いんだよ。癖もなくて、面白味もない。けど、シヤナの髪は柔らかくて、優しいな」

鏡越しに、クロの満面笑顔、幻覚であろう花が見えた。嬉しいと

きの表情はいつもこれだ。

「シャナ、シャナもおれの髪、結えてよ。シャナとお揃いになる飾り、つけたいから」

「え？ 飾りって、女ものよ？」

「うん。ほら、まるでおれがシャナのものっていう感じがするじゃない？ やって、シャナ」

嬉しそうにシャナの髪を梳きながら、クロは器用にも少しずつ編み込みなどを入れ、シャナの淡い金色の髪を一つにまとめていく。その手つきは繊細で、横ではらはらと見守っていたジーンでさえも、徐々に感心の眼にさせていく。

「う、上手いです……わたし侍女なのに、ま、負け……」

「ジーンはシャナの特徴を捉えた結え方、上手いよね。でもほら、こうすると背がすごく綺麗に映えると思わない？」

「あ、はい。そうですね、もうちょっとこうしたら……」

「さすがジーン！ これで紗を巻いてもらうっていつのはどう？」

「いいですね！ わたし、用意してきます」

「できれば白で」

「わかりました！」

ジーンの腕前を落ち込ませることもなく、クロは仕上げた。いつもより首許が頼りなくて違和感が残るものの、鏡越しに見えるクロは満足げで、思わずシャナも口許を緩めてしまう。

「うん、いい感じ。これで紗を首に巻いて、隠してもらって、完成」

「……あなた、侍女になれるわよ」

「いやだな。おれは男だから、侍従だよ」

失礼なことを言ったつもりだったが、それはクロには効かないらしい。罵られても貶されても、この皇子なら笑って流してしまえそうさ。

「……いいわ。ここに座って、クロ。あなたの髪も結えてあげる」  
「本当？　ありがとう、シャナ」

見立てるのは礼装だけで、そのほかには手を出すつもりはなかったのだが、なんの作戦かクロは銀の髪をまったく弄っていないから、シャナは苦笑するとクロの髪に手を伸ばした。

クロの髪は、本人が言っていたように硬く、すんと真っ直ぐだ。ふわふわ跳ねるシャナの金の髪とは違う。少し羨ましい髪質だ。

「これ、つけてね。お揃いになるから」

本来ならシャナの髪につけられるはずであった対の髪飾りは、一つを残してシャナの髪につけられたようだ。もう一つを、クロが差し出してくる。結えたところに差し込む形となるそれは、白い羽と黒い羽が一つずつ、小さな丸い水晶に添えられた飾りだ。

「高い位置に結えるから、少し髪を引つ張るわよ」  
「どうぞ」

シャナはクロのような技術はないので、申し訳ないがさつと一つにまとめていく。後ろ髪は残して上だけを一つに結え、そこに髪飾りを差し込んで終わりだ。

揃って髪を結えたところで、クロに頼まれて紗を取りに行っていたジーンが戻ってくる。

「殿下、これを首に。それから皇子も」



「これまでお揃い？ 気が効くね、ジーン」

紗は、シヤナの露出した首を隠し、クロの襟を飾る。

準備がすべて整ったところで、ふたりで鏡の前に立った。

腰に腕を回されたので、軽く叩いて牽制する。けれどもクロはめげなくて、腰に手を添えられてしまった。

「ちょっと……」

「いいでしょ」

にこにここと笑うクロは、どこからどう見ても、嬉しそうだ。なにがそんなに嬉しいのかと、思わず問いたくなる。

こうして並んで立つと、シヤナのほうが少し背が高い。それがどうも気になる。クロがまだ子ども部類に入る年齢だということが、気になってしまふのだ。

「……ジーン。白い靴で、踵がないの、あるかな」

「え？ あ、はい、ございます」

「履き替えてもいい？ もちろんシヤナね」

「わかりました！」

シヤナが気にしたこと気づいたのか、それとも自身が気になったのか、クロはシヤナの靴を踵のないものに履き替えさせた。

「やっぱり。靴に踵がないと、おれのほうが背、高い」

気にならなくなったよね、という、優しい笑みを向けられた。視線が僅かにシヤナのほうが低くなっただけだが、それでも、その心

遣いは嬉しい。

「だいじょうぶだよ、シャナ」

そつと、クロが耳許に囁いてくる。

「おれ、まだ成長途中で、背も伸びているから。あつというまにシヤナを追い越すよ」

近過ぎる声に、頬が赤くなったのは、クロを意識してのことではないと思いたい。

けれども。

「綺麗だね、シャナ」

不覚にも、その笑みには囚われてしまう。

頑なに閉ざしていたものが、音を立てて、崩れていく気配がした。

シャナの付き添いにクロがつく。腕を絡め、並んで歩くさまは、さぞや仲睦まじく見えたことだろう。

夜会の席は、王女の婚姻を心から喜んでいて。待ち望んでいた王女の婚姻だ。たとえクロの素性に疑念を抱く者がいようとも、それらは夜会の雰囲気にも吞まれ、影を小さくする。

王や王妃も、クロの挨拶には満面の笑みを浮かべ、祝辞を述べた。誰もが、喜びの中にあつた。

国の安泰を、安寧を、喜んでいた。

「クロ」

「ん……？」

臣下の家族と懇談中のシャナから少し離れ、クロは壁を背にして、シャナの後ろ姿を眺めていたところだった。そこにノエが、見かねたように声をかけてくる。

「その顔、どうにかしろ。ばれるぞ」

「……笑っているつもりだが」

「目が、笑ってないんだよ」

さすがはノエだ。完全に演技できていると思っていたのに、あっさりと思許の真実を見抜かれる。

「十秒、時間をやる。どうにかしろ」

そう言っつてノエが、クロの姿が誰からも見えないように、隠してくれる。深呼吸して目を擦れば、もうその顔は完璧な嘘に塗り替えられた。

「気が、抜けた。ごめん」

「なんで気が抜けるんだ。緊張するところだろ、ここは」

「いや、シヤナが……」

「シヤナ姫？」

「可哀想だなと、思っつて」

「……今さらだろ、そんなの」

もともと目つきも悪ければ愛想も悪いノエは、不機嫌そうな顔をしていても誰にも咎められない。それがたまに羨ましいクロは、笑みを張りつかせたまま、そつと溜息をつく。

「……いいのかなあ」

「それこそ、今さらだ。おい、また顔が……いい加減にしろ、クロ。隠せないならもう部屋に戻れ」

「あれ？ 笑っつてない？」

演技は完璧のはずなのに、どうも、上手く仮面を被っつていられないようだ。

どうしても嘘が見える目許を手のひらで隠すと、クロはさらに場所を移動し、人目を避ける。

「いったいどうした、クロ」

「いや、だから、シヤナが……」

「覚悟してただろ。今さら後悔してんのか」

「後悔はない……けど」

「けど？」

「シヤナを幸せにしたい」

「すればいいだろ。そのために国を出たはずだ」

「そう……そうだ、おれは、国を出た」

目許を隠しながら、クロは、その姿を探す。柔らかな笑みを浮かべ、凜としたその姿を見つけると、なぜだろう、涙が出そうになる。

「シヤナ……」

綺麗だと、思った。初めて逢ったその瞬間から、眩しくてならなかった。触れるのが怖くて、けれども逢いたくて、仕事の邪魔をしてまでも毎日通った。

まさか自分が、そこまで囚われるとは、思いもしなかったけれども。

今この瞬間が、真実なのだろうと思う。

「……シヤナ」

「ごめんなさい、という言葉が、あなたを傷つけるだろう。」

許して、という言葉が、あなたを失望させるだろう。

「おい、クロ」

「ノエ、おれは、シヤナにひどいことを、しようとしている」

「クロ」

「幸せにしたいのに……な」

崩れていく。

これまで、ばかみたいに笑っていた、その虚勢が。

壊れていく。

どうしたらいいだろう。

どうすればいいだろう。

身体から、力が抜けていく。

「いい加減にしろよ、クロ。顔がヤバいって、言ってるんだろ」

崩れ落ちそうになった身体を、ノエに腕を掴まれて、強い力で引っ張られた。

ハッとする。

「あ……悪い。また気が抜けた」

「それやめろ。緊張しろ、頼むから。無理なら部屋戻れ」

「いや、まだシャナのそばに……夜会も終わってないし、シャナと踊りたいし」

「なら顔をどうにかしろ。色も真っ蒼だぞ」

自分ではどうも、その不調に気づけない。ノエがいてくれて助かったと、正直に思う。

そのとき。

「どうしたの……」

シャナが、こちらに気づいていた。すぐ近くまで来ていたシャナから、ふわりと漂った優しい香りに、胸が疼く。

瞬間的にふつと微笑んだ。

「……シヤナ」

「どうしたの、クロ」

淡い色はもう似合わないからと、濃紺の礼装をまとうシヤナに、白の紗と白の靴を履かせたのは、シヤナには淡い色も似合うと思っただからだ。きつく見えてしまうその姿を柔らかく見せるために、金に輝く髪も細かに編み込んで大胆な形にした。

思った通り、シヤナの姿は変わった。予想以上に、美しくなった。シヤナは綺麗だ。

「……シヤナ、踊ってくれる？」

「え？」

「おれと、踊ってくれる？」

ちょうど、緩やかで静かな音楽が奏でられたところだ。人々は思い思いに、連れ添いと手を取り合っただけで中央に移動し、踊り始めている。その輪の中に、クロはシヤナを誘った。

「待って」

「ん？」

「顔色が悪いわ……駄目よ、休みなさい」

心配そうな顔をしているシヤナに、誘いを断られてしまう。それだけでなく、近くの椅子にまで座らせられた。

「シヤナと踊りたい」

「この先いくらでも機会はあるわ。今は我慢なさい」

「……この先、いくらでも？」

「ええ」

「おれが、下手くそでも？」

「練習すればいいわ。わたしも得意ではないのよ」

隣に腰かけてくれたシヤナは、ほんの少しだけ、優しく微笑んでくれる。

つと感じた罪悪に、胸が痛んだ。なんて都合のいい罪悪感だ。こ  
うなることは、始めからわかっていたはずなのに。

「立場上、わたしは最後までここにいる必要があるの。あなたは先  
に部屋へ戻っていたほうがいいかもしれないわね」

「……ここにいるよ」

「よくなるものも悪くなるわ。いいから部屋に」

「久しぶりに大勢の人に囲まれたから、人に酔っただけだよ。だい  
じょうぶ」

「けれど……」

「ああほら、呼んでる。おれはここにいるから、だいじょうぶ、行  
つてきなよ」

シヤナに声をかけたそうにしている貴婦人がいたので、クロは誤  
魔化するようにシヤナの注意を反らすと、背を押しだした。

「……我慢できなくなったら、部屋に戻るのよ？」

「そのときはちゃんとシヤナに言うから」

心配してくれるシヤナを送り出すと、はあ、とこっさりため息を  
ついた。幸せが逃げる、というのはシヤナに対しては言うものの、  
自分に対してはどうとも思わない。



「うー……心臓痛い」

ああもう本当に痛い、とクロは胸を押さえながら身を丸めた。いっそ気絶できたらいいのに、と思うが、そう都合よくはいかない。

「踊るんじゃないかったのかよ？」

そう、ノエに言われて。

「踊るよ、シヤナと。けど……」

この先いくらでも、その機会はある。シヤナはそう言ってくれた。クロが下手くそでも、自分も得意ではないから一緒に練習してくれると言った。

「未来を、望んで……いいのかな」

それは本当に望めることだろうか。

「ごめんなさいと言ったことが、シヤナを傷つけるのに。許してと言ったことが、シヤナを失望させるのに。」

それは、いつかは、話さなければならぬことだった。知られて拙いわけではない。むしろ一番に知らせるべきことだ。それを黙っていたのは、クロが、自分が思った以上に、シヤナという存在に囚われてしまったせい。

崩れていく。

壊れていく。

国を出るとき、それは覚悟し、決めたことだったのに。

「おれの宝……は」

明日消える光りなら、今ある自分を光りの中に埋めよう。

朝陽を迎えられない運命なら、月夜の中で太陽を見つけよう。

たとえすべてを失っても、己の中に小さな灯火があれば、それは取り戻すことができるだろうから。

「ん……」

「起こしてしまったかしら？」

「……シヤナ？」

「ええ。気分はどう？」

「平気……ええと？」

「夜会が終わってすぐ、部屋に戻ったとたん倒れたのよ。憶えてない？」

「そう……だったかな？」

「医師が言うには、疲労が蓄積していたのでしょうねって。あなた、実はかなり緊張していたのね？」

ぼんやりと見やった先には、濡れた布を絞ってクロの額に置こうとしているシヤナの姿があった。

「緊張、というか……まあ、どうしたらシヤナに好いてもらえるかなって、ずっと考えことはしていたよ」

「冗談はやめてちょうだい」

額に置かれた布の冷たさに、クロはほっと息をつくと微笑む。あ  
あいいなあと思ったのは、シヤナに看病されていることだ。

「本当だよ。おれは、シヤナのお嬢さんになりたくて、ここに  
いるんだから」

「わたしに、今でもその気持ちがないとしても、そう言えるの？」

「だから、好いてもらえるように、いろいろと考えている」

「……まったく、諦めの悪い子ね」

嘘は言っていない。クロには、そういう下心がある。シヤナに好  
いてもらう必要がある。予想外だったのは、自分が逆に、シヤナ  
を好いてしまったことだ。

まったく人間とは、人間の心とは、一様にならない。予想通りに  
動いていくれない。

なんて、厄介だろう。

「シヤナ？」

「なにかしら」

真っ直ぐな瞳を寄こされて、ずくりと、胸が痛んだ。けれどもそ  
れは、シヤナに知られてはいけない。

「……クロ？」

「今度……」

「ん？」

「今度こそ、おれと踊ってくれる？」

「どこで？」

「夜会では踊れなかったから」

額に置かれた布を取り、クロはゆっくり身体を起こすと、寝台から足を下ろした。立ち上がるうとしたらシャナに止められて、ふと顔を上げる。

「疲れているのよ。もう少し休みなさい」

「もうだいじょうぶだよ？」

目もぱっちりしているし、気分もすっきりしているし、そもそも倒れたという自覚すらクロにはない。肩を押してくるシャナの手を掴むと、逆に押し返しながら立ちあがった。

「クロっ」

「ねえ、シャナ、踏み出しは？ トワイライとは、違うでしょう？  
教えて」

「え、ちよ、待って」

「トワイライはこっちから。はい、シャナ」

音楽も、観客もない。静かな部屋で、クロはシャナを無理やり促して踊る。自分が憶えた型でない踊りにシャナは戸惑い、しかしそれでもクロの誘導についてくる辺り、苦手とはいえかなりの練習をしたのだらうと思われる。

「あはっ、シャナ、トワイライの踊れるんだ？」

「む、昔、少し、習ったから」

「誰かと踊った？」

「そんなことあるわけないでしょ……っ」と

「おれが初めてか……いいね、初めて」

シャナのすべてが、初めてだったらしいのに。そう思っていると、シャナも徐々に踊りに乗ってきて、ふたりの波長が合ってくる。そ

うしているうちに、どちらも真剣になってきて、音楽もないのに足音だけで気分が盛り上がってきた。

「上手いね、シヤナ」

「クロこそ」

「じゃあ次はセムコンシヤスの踊り！ シヤナ、おれを誘導して」

「病み上がりが無茶しないの」

「だいじょうぶだよ」

ほらほら、とシヤナを促して、トワイライの型からセムコンシヤスの型へと踊りを移行していく。やはり音楽はないが、気分だけでそれは充分で、シヤナもいつのまにか楽しげに踊っている。

「ふはー……っ」

飽きるまで踊ろうと思っていたが、さすがに疲れて寝台に転がったときには、呼吸が少し乱れて苦しくなっていた。もちろんシヤナも、肩で息をしている。

「久しぶりに真剣に踊っちゃったわ……しかも病人相手に」

「おれは病人じゃないよ」

「似たようなものよ」

「おれはもうだいじょうぶだよ。あー楽しかった！ シヤナは？」

「もう……楽しかったわよ。踊るのが楽しいだなんて、初めて思ったわ」

「初めて？ うわぁ……やっぱり初めてっていいなあ」

誰かの始めてをもらえるとというのは、意外にも嬉しいことだ。もしかして夜のほうもおれが初めてになるのかな、などと考えて、それも嬉しいと顔が綻ぶ。

「なに笑ってるの？」

「なんだか楽しくて」

「楽しい？」

「外がこんなに楽しいところだったなんて、予想外だ」

「……そと？」

「おれは国から出たことがなかったから」

生きていた中で、こんなにも楽しいと言えるなにかが、あつただろうか。そう考えて、出てくる答えは一つもない。今このときを除いて、楽しいと言えたなにかが、クロにはない。

「今がある……そのことが、嬉しいなんて……初めてかな」

これが「幸せ」というものなら、ずっとこの中にいたいと思ってしまう。そんなことは無理だとわかっていても、望んでしまう。それが生きている人間だということなのだろう。

「あなたはいつも笑っていて、なにが楽しいのかよくわからなかったのだけれど……そんなふうに考えていたのね」

「ん？」

「遅れて到着したのは、初めて出た外の国が、珍しかったからなのでしょう？」

「んー……まあ、二度とあることではない、からね」

「そんなことないわ」

ふと見やったシヤナは、クロが想像していた以上に、真摯な瞳をしていた。

「……シヤナ？」

「二度もない、なんてことは、ないわ。あなたは今ここにいて、こうして生きている。願いを、望みを、抱くことができる。それは確かな、あなたの想い。想いは大切にしなければだめよ」

思わず、息を呑んだ。それはシャナに気づかれることのないほど小さな仕草だったが、クロはシャナの言葉に驚いていた。本当に、と訊き返しそうになって、かろうじてそれが音になることを防げたのは、ずくりと痛んだ罪悪感からだろう。

クロは閉口し、シャナを見つめた。

美しい人だと思う。この人が自分の妻となるなど、信じられないけれども自分は確かにこの人の夫となるべくして国を出、認められるべくして行動している。

自分はいつまで耐えられるだろう。

「クロ、あなたの願いはなに？」

ああ、耐えられないかもしれない。

この罪悪感を。

欺くというこの行為を。

この願いを。

好いてしまった人に隠し続けることは、できないのかもしれない。

「……予想外だよ」

「え？」

「おれはきみが好きだ」

想いを大切に。

そう言われてしまったら、言わずにはおれない。

「……冗談はよして。たった数日で、わたしのどこが好きだという



の。いいのよ、無理しなくて。わたしは国の体面を保つために、大  
国であるトワイライ帝国からの縁談を受け入れたのだから」

「冗談なものか。そう言ったところで、シャナは聞き入れないだろ  
う。それはわかっている。」

それでも。

「おれがきみを……シャナを愛しているという事実は、おれにとっ  
て、大切な想いだ」

「上手い冗談ね」

笑って、流されそうになったとしても。

動かない現実と、偽れない真実がある限り、それは否定しようが  
ない。

「……シャナ」

「なにかしら」

「どうか、悲しまないで欲しい」

「え？」

寝転んでいた身体をゆっくりと起こしながら、クロは、呼べばど  
こからでも現われる風のような騎士を呼ぶ。

「ノエ、やっぱりやめるよ。すごく、心臓が痛いから」

寝室には、クロとシャナのほかに、ひっそりと控えている侍女や  
侍従がいたが、それ以外に人気はない。あるのは静寂、そして人な  
らざるもの。

「言っの早過ぎだな、おい」

ノエは、隣室の壁を通り抜けて、その姿を現わした。

ノエのいきなりの登場は、シャナをひどく驚かせた。音もなく、風のように現われたのだから無理もない。ひっそりと控えていた侍女や侍従でさえ、ノエの登場には驚いている。クロも、出逢った頃はよく驚いた。

「いったい、どうやって……今、壁を通り抜けなかったかしら」

「壁なんておれにはあつてないようなものですよ。おれは精霊なん  
でね」

さらりと人間ではないと言ったノエに、驚きっぱなしのシャナがクロを振り向く。クロは、苦笑にも似た笑みを浮かべた。

「ノエは、ノルイエ・レスという精霊なんだ。おれの祖母に召喚されて、契約して、おれのそばにいる」

「……どういうこと？」

「言つつもりは、なかったんだけどね……予想外なことが起きてしまったから、隠していられなくなってしまった」

「隠す……?」

いや、隠していたのでは、ないのかもしれない。言わなければならぬことを、言わずに、黙っていた。知らせるべきことを、知らせずに、言うことができずにいた。それは騙しと、欺きで、クロに罪悪感を募らせた。

あれだけシャナに知られてはならないと思ったことを、こんなにもあっさり吐露しているなんて、自分は今までなにを隠そうとしていたのだろうと、そんなことさえ思った。

「ノエが精霊であると、隠していたの？」

「人型の精霊だから、黙っていれば気づかれない。それなりの恰好をさせれば、特にね。おれより皇子っばいでしょう」

「それは……思ったことだけれど」

「黙っていてごめんね」

「……謝る必要があるもの？」

「騙っていたことになるし、欺いていたことにもなるから」

「それは、わたしを？ それとも、この国を？」

「どっちも」

その瞬間に、シャナはカツとしたように苛立ちを顔に出した。あやっぱり怒るよなあと、暢気にも思ったクロだったが、シャナはすぐに深呼吸すると苛立ちを抑えたようだった。

「なんの目的があるの？ いえ、あつたの？」

「どうして言いかえるの？」

「わたしにそれを謝って、今ここで懺悔しているのなら、目的は達成されなかったということになるわ」

さすがシャナ、とクロは笑う。

「罪悪感にね、負けた」

「罪悪感？」

「言ったでしょう。おれは、シャナが好きだ」

「こんなときに冗談はやめて」

「予想外なことなんだよ、シャナ」

「……予想外？」

「おれは、シャナを好きになる、つもりはなかった」

ああ、傷つけている。それをわかりながらも口にした言葉に、やはりシャナは傷ついたような顔をした。

やっぱりこういう顔はさせたくないし、見たくない。

「けどね、好きになった。シャナが好きだから、隠していられなくなった」

「……冗談ではないの？」

「これだけは信じていいよ。シャナを愛している事実は、もう消えないから」

微笑みながら偽りのない想いを伝えると、シャナから傷ついた表情が消える。むしろクロの言葉を、冗談ではないのかと、真摯に受け止め始めていた。

「目的はなに？」

「ん？」

「わたしが好きだと言うその裏は、なんなの？」

「だから、罪悪感に負けたんだって。すごく心臓が痛いしね。これじゃあ元も子もない」

「どういうこと？」

「気づいて、シャナ。どうして天恵者でもないおれのそばに、ノエがいるのか」

言葉遊びでもするように問えば、シャナは当惑したようにノエへと視線を流し、肩を竦められると再びクロを見つめてくる。

「あなたのおばあさまと、契約しているからでしょう？」

「それはどうして？ 祖母と契約しているのに、どうしておれのそばにいろの？」

「……あなたも天恵者？」

「違うよ。おれはまったく、欠片も、天恵がない」

「それなら……なぜ？」

本当は言いたくない。シヤナを好いてしまったからこそ、言えなくなってしまう。隠すつもりも、騙すつもりも、欺くつもりも、最初からなかった。クロがシヤナを好くということさえなければ、それは出逢った当初から了承されることだった。言えずにいた期間があったからこそ、こうして言いたくもないのに言わなければならぬ事態が、起きた。

愚かなことをしたと、思う。

さっさと言ってしまうていれば、よかったのに。

「おれは、ね……ノエに、生かしてもらっている」

どうかこの一言で、察して欲しい。どうかこれ以上、言わせないで欲しい。それはシヤナへの想いが、訴えてくることだ。

「生かして……もらっている？」

「そう」

「……それは、命のことを言っているの？」

やはり、シヤナだ。言わずして、察してくれる。

「昔、祖母は契約した。この脆弱なわが孫を、命数尽きるまで、護って欲しいと」

「……それが契約の」

「文言というやつだね。かくして召喚された精霊は、その瞬間から

今に至るまで、契約に従って孫を守護している」

「……意味が、わからないわ」

ふるふると首を左右に振ったシャナは、その答えを求めるように、ノエを見上げた。

「……本当に精霊なの？」

「ええ。精霊位は上から二番めのレス、名はノルイエ。こんなナリですが、水の精霊ですよ」

「クロを、護っているの？」

「セイエンにお守りを頼まりましたので」

「クロは、生かされていると言ったわ。それは、どういふこと？」

「そのままです。おれの力で、クロは生きてんですよ」

理解したのか、していないのか、シャナはゆっくりと視線をクロに戻し、じっと見つめてくる。

「どうして……生かされている、ということになるの？」

やはりそれを訊かれるか、とクロは苦笑し、ふっと息をつく。言わずにはおれないらしい。

クロは、胸に手を置いた。

「おれはここに、病を抱えている」

その瞬間、シャナは息を呑んでいた。見開かれた双眸が、なんだか痛ましくて、自分のことではないのに自分のことのように受け止めるシャナが、可哀想に思えてくる。

「生まれつきだね。誰に似たのか、随分と脆弱なんだ」

「そんな、大事なこと……どうして黙っていたのっ」  
にこりと、クロは笑む。

「死ぬつもりで、国を出たから」

言うことができずにいたそれを聞いたシャナは、クロが思ったとおり、ひどく混乱しているようだった。

「なぜ……笑って、いるの」

「ずっと前から覚悟がある。おれの命は短い」

「そんなのわからないわ。病が治ることだって」

「その可能性はない」

だから、とクロは、シャナへの笑みを深める。

「ごめんね」

それでも、と言葉は続く。

「おれは、シャナが好きなんだ」



部屋を、飛び出した。なぜ黙っていたのか、なぜ今になって酷なことを言うのか、いくら訊いても答えてくれなかったから、腹が立って部屋を飛び出してしまった。それが悔やまれる。誤魔化そうとしているそれに、腹を立てずにいればよかった。きちんと、訊くべきことを訊けばよかった。

「姫さん」

はっと、顔を上げる。部屋を飛び出したものの、シャナは扉の前にしゃがみ込んでいただけだ。戻るに戻れず、自室へ帰ることもできず、そうしていた。そこに、どこからともなく現われたノエが、視線をシャナに合わせて屈んでいた。

「ノエ……訊いていいかしら」

「そのために来ました。おれに答えられる範囲でなら、なんでもどろぞろ」

ノエは、悲しそうに微笑んだ。先刻まで飄々としていたのが、嘘のようだ。

「どうしてクロは黙っていたの？ 今になって、どうしてそれを教えてくれたの？」

「その答えはクロが言いましたよ。クロは、姫を妻に迎えても、本

当然の意味で妻にする気はなかつたんです。さつさと身体のことを告げて、悠々と隠居する気だつたんですよ」

「わたしがそれを許さなかつたら、どうするつもりだったの」

「あいつには帰る場所が、もうありません」

帰る場所がない。それはクロの口からも聞いた。

「なぜ？ トワイライは、クロを追い出したというの？」

「いいえ。セイエンが、死んだんです」

「え……」

「意味、わかりますよね」

静かな問いかけに、頷くことができず、シヤナは瞠目する。

セイエンとは、ノエの契約主でありクロの祖母、皇太後のことだ。ノエの口ぶりから、おそらく最近のことなのであるが、亡くなっていたとは知らなかった。

「今はまだかるうじて契約は残っていますが、いつ消えるかもわからない。それに、たとえ帰ろうと思っても、その契約が切れてしまえば……わかりますよね」

「……クロは死ぬの？」

「あいつはもう、それだけ体力がないんですよ。おれの言葉で言うなら、命数が残り僅かだということです。だからあいつは、もうトワイライには、帰られない。姫に拒絶されても、けっきょくのところ、あいつは死ぬしかないんですよ」

なにがどうなろうと、その結果は変わらない。運命を変えることはできない。遅かれ早かれ、クロには、その結末が待ち受けているだけだ。シヤナに拒絶されても、国に帰ることすらできないのである。

なんて、寂しいことだろう。  
なんて、悲しいことだろう。  
込み上げてきた涙に、シヤナは唇を噛んだ。

「ご家族は、なにも言わなかったの？」

声が震える。自分がなぜここまで悲しいと思っているのか、シヤナにはわからない。それでも、悲しくて寂しいことだという、切ない胸の想いには耐えられない。

「ラウルもアンジェラも、クロの命数はわかっていました。だから、最期の旅だと許したんです」

ラウルとは、トワイライ帝国の皇帝、アンジェラは、皇妃だ。つまり、クロの両親である。

「最期だなんて……なぜ決めつけるのよ」

「姫。クロは、わかってんですよ。どうしようもないってことを」

「病は治せるわ……っ……今からでも遅くない」

「風と水を司る神ミストでも、クロの病は治せなかったんです」

「なぜ諦めるの!」

誰もが、クロは死ぬのだと、覚悟している。だがシヤナは、認めたくない。なぜ自分が強くそう思うのか、それはわからないけれども、クロがいなくなってしまつのはいやだと思った。天地がひっくり返っても、否定してやりたい。

認めたくないと言を左右にふり、拳を握っていると、屈んでいたノエが僅かに身動きした。

「おれは、諦めちゃいませんよ」

そう言ったノエの気配に、なにか、悲しみとは違うものを感じた。

「ねえ姫、おれに提案があるんですけど、聞いちゃくれませんかね」

「……提案？」

「まあ、まだ時間はあるんで、ゆっくり考えてください。ぎりぎりまでおれは待てますから」

「どうということ？」

「これは可能性の一つです」

見つめた先のノエは、ただ静かに笑みを浮かべている。

「おれの提案、姫なら時期がくれば、わかると思えます。おれの言葉を理解できるようにになったら、おれの提案を受け入れてください。それまで待ちますから」

「待って、ちゃんと説明して。教えて」

「今はその必要がありません。わかる 때가、必ずくると、おれは信じます」

「ノエ！」

言うだけ言って、ノエは立ちあがる。少しだけ楽しそうに見えるのは、きつと気のせいではない。

ノエがなにを提案と言っているのか、それがわからないまま、シヤナは壁の向こうに消えるノエを見送ってしまった。

シヤナは項垂れた。この胸に渦巻く想いを、どう消化したらいいのかわからない。クロを失いたくないと思っっている自分に驚く一方で、あの天真爛漫な姿に自分がどれだけ心癒されていたのかを思い知る。

どうして今になって、こんな想いを抱かせるようになってから、クロは秘密を口にしたのだろう。

『おれは、シヤナが好きなんだ』

脳裏に浮かんだその言葉に、耐えていた涙が、頬を伝って落ちて行く。

「そう、そうなのね……わたしがあなたを好きになる、その可能性を、あなたは否定していたものね」

好きになるつもりはなかったと、クロは言っていた。けれども好きになったと、言っていた。クロは、耐えきれなくなって口走ってしまったのだ。言いたくないことを、言ってしまういたくなるくらいに、不安になってシヤナに甘えたのかもしれない。

だから、だろうか。

「わたし……っ」

小さな嗚咽が、咽喉を突く。

「どうすれば、いいの……っ？」

クロを、失いたくない。

大国の皇子だから、国の体面があるから、この婚姻をなかったことにはできないから。

たくさんの思惑はあれど、想いは違う。心は違う。

「あなたを、失いたくないわ……っ」

もろもろの諸事情などどうでもいい。ただ今は、シヤナが、クロ

を失いたくないと思っている。

この気持ちは、なんだろう。

わたしはなにを、望んでいるだろう。

なにをどうすれば、この気持ちに、追いつくことができるだろう。

『おれは、シャナが好きなんだ』

その真っ直ぐな瞳に、なにを、返せるだろう。

「クロ、わたし……っ」

わたしはあなたを好きになっても、いいだろうか。

こんな歳上の、花盛りも過ぎた女だけれども、その笑顔を失いたくないと思うこの心を、大切にしてもいいだろうか。

わたしを好きだという、その言葉を信じて、愛されていると思っても、いいだろうか。

11 : 応えるのは怖い。

ぼんやりしながら、政務を片づけていた。昨夜のことが気になつてよく眠れなかったのもあるが、自分の心にあつた気持ちにも驚いて、感情があちこちに飛んで収拾がつかなくなつてしまつたせいだ。

「はあ……」

と、ため息をつくとき、シヤナの政務を補佐してくれている者たちが、「ため息をついたらせつかくの幸せが逃げてしまいますよ」と、クロみみたいなことを言ってきた。クロの存在は、いつのまにか随分とここに馴染んでいるようだ。

「シヤナあーあ、お茶にしよう」

と、恒例行事のように、クロがいつもの姿で現われた。瞬間的にどきりとしたが、シヤナがなにかを口にするよりも早く、補佐官を始めた部下たちが「昨夜はだいじょうぶでしたか」とクロを心配し、無理をしないようにと労う。誰かの心配をするよりも政務に勤しむ部下たちの姿に、クロが与えた影響はすごいなと思った。

「なんかもこもこにされてしまった……シヤナ、助けて」

シヤナが考えごとに没頭している間に、部下たちにかまわれたクロは、たくさんの枕が敷き詰められた長椅子に座らせられ、その中

に埋もれていた。なんとなく愛らしいその恰好に、くすりと、笑みがこぼれる。これで子どものぬいぐるみを持たせたら、もっと可愛いかもしれない。

くすくすと笑っていたら、ふとクロが、不安げな顔で見上げてきた。

「……シヤナ、怒ってない？」

「え？ どうして？」

「おれ……黙ってたから」

「……ああ、そのこと」

昨夜のことを、口走ってしまったと思っていたのだろう。気にしていないわけではないが、クロがそんな顔をする必要はない。

シヤナは枕を避けて自分の座る場所を確保すると、枕の一つをクロにわざと持たせて、長椅子に腰かけた。

「今はなにも言えないわ……考えさせて欲しいの。整理ができないから」

「……ごめん」

「どうして謝るの」

「言うつもりはなかった。けれど……シヤナが……本当に予想外だったんだ。シヤナに迷惑をかけるつもりはなくて……だから、言う必要なんかもなくて」

どうやら、シヤナが思ったことは、あながち外れてはいないようだ。

クロは、己れの運命を不安に思っ、シヤナに甘えた。



ぶわりと心が揺さぶられる。  
強い衝動に、息が詰まりそうになる。

「……今、身体は平気？」

「シヤナ……それは」

「教えて」

「……ノエからもらえる力が弱くなってるから、少し……その「  
「つらい？」

「気にしないでいいから。うん、たまにあることだし、慣れてるか  
「ら」

心配させまいかとするようなその態度に、込み上げてくるものがある。

「無理はしないで。ここで少し休むといいわ」

「邪魔はしない。お茶したら、すぐ戻る」

「いいから。わたしがそうしてと言っているのだから」

この気持ちは、包んであげたいと思うこの心は、なんだろう。  
そう思って、すぐに思い当たる。

護りたい、だ。

シヤナは、クロを護りたいと、庇護欲にかられている。

「枕をここに。そばにいるわ」

「シヤナ……でも」

「歳上の言うことは聞くものよ」

少し強引ではあったが、クロに持たせていた枕をふたりの間に置くと、クロに手を伸ばして肩を引き寄せる。枕はちょうどいい緩衝材になってクロの身体を労わり、シヤナの身体を支えた。

「優しいね、シャナ……優しいのは、おれがいつそうなるとも、わからないから？」

「そうかもしれないわね」

「そっか……そうだよな。けど……そんな同情でも、おれは嬉しいと思ってしまう。ごめん、シャナ……ごめん」

「なぜ謝るの」

「それでもおれは、シャナが好きだ」

どきりと、する。

わたしも、と言ったら、クロはどうするだろう。昨日の今日で、と呆れるだろうか。無理しないで、と信じないだろうか。それとも、心変わりしてしまうだろうか。

「ごめん、シャナ……おれ、気持ちを抑えられない」

ふと身体を起こしたクロが、間に置いていた枕という距離を、取り払う。しがみつくように胸に回された腕は、強くシャナを求めてきた。

「クロ……」

「こんなことまでして気を惹こうとして……ごめん、呆れるよね。情けないよね。こんなことしてまでも、シャナの心が、欲しいなんて」

昨夜のことが、たとえクロの嘘だとしても。クロのこの、天真爛漫で朗らかな気性が、嘘とは思えない。それが不思議だ。

「……ここにいるから、休みなさい」

クロの想いに応えようと思わないのは、クロがいなくなってしまうことを、否定したいからだ。応えてしまったら、それに満足したクロが、天命を享受しそうで怖い。

そうシヤナが自覚するのは、このあとすぐのことだ。

「なぜ座卓なのだ」

クロがシヤナの執務室に通うのが名物となつて、さらにシヤナの膝を枕にして居眠りをするという行事が増えたとき、父王がシヤナの執務室を訪れた。名物を見に来たらしい。

「ここでクロが眠っているからよ」

シヤナは膝元を指さし、膝を枕にされていると、その姿を見せると、父王は目を真ん丸にしたあと嬉しそうに笑んだ。

「よいことだ」

座卓が用意されたのは必然だった。クロが居眠りをするという行事を増やしたため、政務が捗らなくなつたからだ。シヤナの膝を枕にするということがなければ、それほど政務が停滞することもなかっただろう。ゆえに、座卓が用意された。ちなみに補佐官たちの苦肉の策だ。執務室から机や椅子は撤去され、代わりに絨毯と座卓、長座布、大量の枕が部屋に入れられたのである。

「皇子は幸せそうだな」

「……そうね」

「よい影響をもたらしてくれているようだ」

「そうかもしれないわ」

「おまえの態度が軟化した」

「それほど硬かったかしら」

「誰かに気を許すなど、今までになかったことだ。これはよいことだぞ。式典が楽しみだな」

満面に笑みを浮かべた父王は、クロが遅れて入国したことを気にして、トワイライ帝国からなにか言われるのではないかとしばらく案じていた。幸いにもトワイライ帝国からは「末皇子を頼む」としか言われなかったため、心配ことは減ったようではあるが、問題はシヤナの態度だ。それもこの姿を見て、安堵した様子ではある。

「早く孫が見たい」

「気が早いわ」

「いや、まあ、そうだな……おまえには無理をさせてしまって、申し訳ないと思っている。親なら、子が望むように、してやるものを……わたしは駄目だな」

「わたしは王女よ。たとえ後継者がわたしでなくとも、わたしは国のためを、考えるわ」

「……すまない、シャルナユグ」

「それが王族に産まれた者の務めよ」

「そう、だな……だが、皇子とおまえが幸せそうで、よかった。少しでもおまえが望むものを、わたしは与えてやれたらどうか」

幸せか、と問われているようなそれに、シヤナはふと考える。

この状態にあるのは、クロが執務室で居眠りをするようになってしまったからだが、いやなら拒絶すればよかったことだ。休憩のお茶も、いやなら断れば済むことだった。

シヤナは、どちらもいやだとは思わなかった。むしろ、するりと入り込んできたクロに、あっさり馴染んでしまった。簡単に受け入れてしまったのである。

そして、今のこの状態は、いやだとかそういふなにかを思う前に、

クロを包み込みたい気持ちが溢れた結果だ。一晩で様相を変えた執務室に、部下たちの仕業かと呆れもせず、これならクロを膝に抱いたまま政務をこなせると思ったくらいである。

つまりはごく自然に、シヤナはクロを受け入れた。それは甘受している、言えるだろう。

幸せかどうかはともかく、膝の重みは心地よいと、シヤナは思っている。

「……………それほど悪くないわ」

クロを失いたくないと思うこの気持ちを、大切にしたい。それは確かで、その結果がシヤナを、動かしている。

そう、大切なのだ、クロが。

好きだと言われることが、とても、嬉しいのだ。

愛されているという心地よさが、いとしいのだ。

失うことなど考えられない。

けれども、クロの想いに応えるのは、怖い。

もしクロが、想いに応えたシヤナに満足してしまったら、これまでのものが壊れてしまいかもしれない。

誰かを愛し、愛されるというのは、恐怖がつきまとうものらしい。シヤナはそれを知った。知らなければよかったかもしれないと、思ったこともある。けれども、知らなかった頃には戻れず、また戻りたいとも思わない。

初めての想いに戸惑うことも多いが、その相手がクロでよかったと、シヤナは安堵している。クロは、さまざまな感情で、シヤナを揺さぶるのだ。こんなことは、二度と経験し得ないだろう。

「ん……………しゃな……………」

「おっと、婿どのが起きてしまうな。わたしはこれで退散しよう」

まだ起きる様子は見られないが、身動きしたクロに父王が少し焦った。

「ああそうだ、シャルナユグ」

「はい？」

「わたしは、今のおまえのほづが、とても好きだ」

「……父さまったら」

「孫を楽しみにしているぞ」

にっかり笑った父王は、足早に執務室を出て行った。

「しゃな……？」

「なんでもないわ。まだ眠っていてもいいわよ、クロ」

「そ……？」

「ええ」

「……しゃな」

「なあに？」

「すきだよ」

にこお、と花が綻ぶように微笑んで眠りに戻ったクロに、想いに応えるのはやはり怖いと、シヤナは感じた。

方法はないかと、考えた。

クロを失わずに済む方法を、シヤナなりに考えた。

けれども、なかなかいい方法は思い浮かばない。

クロを生かしているというノエの精霊の力は、もとはクロの祖母が願い、その末に契約して得たものである。だが、ノエの契約主であるクロの祖母が他界した今、かろうじて残っている契約はいつ消えるともわからないものだ。それは明日かもしれないし、数年後かもしれない。そのあたりのことは、ノエもわからないのだと言っていた。

欲しい時間が足りない。

それはシヤナを焦らせた。

そんな折、唐突な来訪を受けた。クロは神殿へ神学を学びに、シヤナはいつものように執務室で補佐官と仕事をしていたときである。

「デイラン国の王子が？」

「はい。先ほどご到着あそばして、今こちらに向かってきております」

「今さらなんの用なのよ……夜会にも来なかつたくせに」

「お止めしたのですが、おそらく時間稼ぎにしかないかと」

「諦めて逢えと言っのね」

「申し訳ございません。わが国とデイラン国が今、微妙な関係にありますれば」

「それはわかってるわ。クロがいなくてよかったと思ったのよ」

逢いたくもない人間に逢わなければならぬ。それはよくあることだが、デイルン国の王子とは、それでも逢いたくない人物の筆頭である。派手な衣装に、傲慢で高慢な態度、傳かれることを当たり前とし、人を道具か玩具のように思っている、そんな王子だ。顔も見たくないし声も聞きたくない。存在すら否定したいと、シャナは思い出すたび思っている。

「父さま……陛下はなにをしているの？」

「一緒においになつた使者どのと、謁見中にございます」

「それ、ふつうなら王子も一緒するものではなくて？　むしろ王子が主役でしょう？」

「そのあたりが、まあ、デイルン国の王子……でしょう」

「はああ……いやなものね、まったく。クロとは正反対だわ」

「殿下、おいやでしょうが、どうか、お気持ちを……」

「ええ。仕方ないわ」

いやでたまらないが、デイルン国とは今、微妙な関係にある。体的なことを考えると、王子の横暴を許容しなければならぬ。シヤナの一挙一動に、国が左右されるときだ。

「この部屋に通すのはいやね……フィル、どこかいい場所はないかしら？」

「では控え室はいかがでしょう？　殿下が使われていた机はそこに移動させているのです。なにかのために、と」

「使うときがきたわね。さっさと移動しましょう。王子を案内している者に、そちらに誘導させなさい」

「御意」

「それから、クロが戻ってきたら、こっちに通して。王子には逢わ



せないように」

「承知いたしました」

数分、或いは数十分、デイルン国の王子をやり過ごせればいい。その分だけの書類を持つと、シャナは補佐官たちと執務室を出た。

控え室は、本当は部下たちの休憩のためにと用意していた部屋なのだが、クロが執務室に通うようになってからは使うことがなくなっていた。クロの姿に癒されるとかで、部下たちがそちらへ移動しなくなったのだ。たまに使うようではあるが、今やほぼ物置に近いらしい。

歩いてすぐの控え室へ向かい、部下の筆頭である補佐官フィルが扉を開けようとしたときだった。

「俺の歩く道にいるんじゃないよ」

廊下に響く声と、そして大きな物音が、シャナの耳に届く。なにごとかと顔をそちらに向けると、目に痛い派手な衣装が目に入った。

「……………歩く公害ね」

見たくもないものを見てしまった気持ち悪さに、シャナは毒づく。しかし、それ以上の言葉は続けられなかった。

「殿下、クロネイさまが……………」

フィルが見つけた姿をシャナも見つけ、瞠目する。大きな物音の正体は、デイルン国の王子に蹴りつけられた、神官服姿のクロだったからだ。

「クロ！」

いやなものなど吹き飛んだ。クロの、横たわって腹部を抑えているその姿だけが、シヤナをいっばいにした。

「おお、これはこれは、セムコンシヤスの姫」

シヤナに気づいた王子が、横たわるクロを踏みつけながら、大げさな身振りでシヤナを迎える。

カツとなった。国大事であるが、それどころではなかった。

「退きなさい！」

「はい？」

「その足を退きなさいと言っているのよ！」

「はて……姫はなぜそのように怒るのでしょうか？ この者はわたしの歩く道を邪魔したのですよ？」

だからなんだ、と思った。クロがそんなことをするわけがないだろうと、思った。確かにふらふらとした頼りない歩き方をするが、それはノエのから与えられる力が弱くなって、長い距離を歩けなくなりつつあるせいだ。休み休み歩かなければならないほどに、クロの身体は徐々に体力を失っているのだ。

「退きなさい！」

動こうとしないデイラン国の王子に業を煮やし、シヤナは王子を押し退けると床に膝をつき、呻いているクロを抱き起こす。

「クロ……っ……クロ、だいじょうぶ？」

「うく……しゃ、な？」

「すぐに医師を呼ぶわ。ノエはどこ？ ノエ、もうだいじょうぶよ、

近くにいるなら医師を呼んでちょうだい。すぐに、お願いよ」

姿を見せないノエは、おそらく国の体面を考えてくれたのだろう。主君を犠牲にしてまでも、シャナの国を考えてくれたに違いない。もしこれが祖国であったなら、テイラン国の王子を痛めつけるだけでなく、闇に葬っていたことだろう。シャナが呼ぶとすぐ、するりと姿を見せ、医師を呼ぶために走ってくれた。

「無視とはひどい。それに、神官ごときをなぜあなたが気にかけるのです」

場違いな不機嫌そうな声が、シャナを不愉快にさせる。これだからテイラン国の王子はいやなのだ。

「クロネイは神官ではないわ」

「おや、それは失礼。ですが、神官の恰好をしている。その者は神官でしょう」

「わたしの夫よ」

瞬間的に、テイラン国の王子から、表情が消える。なにをしに来たのかは知らないが、おそらくはシャナが婿に迎える者の様子を見に来たのだろう。隙あらば、となにか企んでいてもおかしくはない。

「神官が、あなたの夫、だと？」

「神官ではないと、言っているでしょう。神殿へ行っていたから、その恰好をしているだけよ。夜会にも来なかったあなたには、わからなかったのね」

「ええ、わたしはその日、ちょっと用事がありましたね。代わりの使者を送りましたので」

嫌味とも皮肉とも取れる言葉に気づかないデイラン国の王子は、僅かに唇の端を上げ、偉ぶった態度で見下ろしてくる。とても不愉快な視線に、シヤナは目を背けてクロを抱きしめる腕に力を込めた。

「しかし、そんな軟弱な男が、あなたの夫とは……なんというか」

「なにかしら」

「悲しいですね」

「あなたにそう言われる筋合いはないわ」

デイラン国の王子に比べれば、いや、比べるまでもなく、クロは己れの夫に相応しいと、この瞬間にシヤナは思う。やはり王子のような人間は、どうしたって好意的にはなれない。

「フィル、陛下のところへ行ってくれるかしら。ことの次第を陛下にお伝えして、デイラン国の方々をお帰しして」

「御意」

これ幸い、とばかりにフィルが走ってくれたが、その一方で、デイラン国の王子は僅かに動揺を見せた。

「お待ちを、姫。わたしは彼に」

「邪魔だと、蹴ったわね。踏みつけて、痛めつけたわね」

「わたしの歩く道を邪魔したからです。わたしは悪くない」

「あなたの一挙一動が、国の一大事に繋がると、どうしてわからないのかしら」

「わたしは悪くないっ」

「わたしの夫は、クロネイ・エイブン・ロンファ・トワイライ、というの。ご存知かしら」

「そんなことくらい知ってますよ。だからなんだというのです。わたしは悪くないというのに」

利用させてもらうのは申し訳ないが、今ここからデイルン国の王子を排除するには、クロの名がもっとも有効的だ。

「ああ、思い出した……デイルンの、カルト王子だ」

「クロ、喋ってはだめよ」

「や、だいじょぶ……くないけど、少しなら」

きつく閉じていた眼をうつすらこじ開けたクロが、僅かに焦った様子のデイルン国の王子カルトを見やって、なぜか笑む。

「父上が、銀山が欲しいと、言ってた」

「？ なにを言っているの？」

「民に圧制を強いる余裕があるなら、もらおうかなと……気をつけないと、トワイライが持つてくぞ」

ハツと気づく。自国セムコンシャスト、デイルン国が微妙な関係にあるのは、デイルン国にある銀山が原因だ。デイルン国の特産である銀が、近年高値になりつつあり、取引があるセムコンシャスト、その問題から関係が微妙になったのだ。そうでなくとも、デイルン国は銀山のことで、各国ともめ事を起こしている。クロの祖国、トワイライ帝国でも、それは同じなのだろう。

「権力もない末の、見捨てられた皇子のおまえに、なにができる！」

急に声を荒げたカルトも、さすがにその問題には気づいたようだ。そして、それをクロが脅しの文言にしていることにも、気づいたようである。

「確かに、おれに権力なんてものは、皆無だけど……おじいさまは

おれに甘いからなあ」

最大の脅し文句だ。デイルン国とトワイライ帝国では、まず国の規模が違う。戦争になったとしても、一日でその決着はつくだろうというくらいに、まず持っている力が違うのだ。

「シャナ、おじいさまに伝えておくよ。銀山要らないみたいだからって」

それはどこかに痛みを置き忘れたかのような、さっぱりとした笑顔で、クロは言った。

「……っ、くそ！ おれは悪くないってのに！」

丁寧に心がけていたのだらう言葉も忘れ暴言を吐いたカルトは、身を翻すと逃げるように走り去った。

大国トワイライ、その規模と権力はやはり、この大陸一である。

今さらだが、外交的な面でトワイライ帝国という後ろ盾はとても大きいらしいと、シャナはどこか複雑な気持ちで小さくため息をついた。

「ああ、幸せが逃げる……だめだよ、シャナ。どんなときでもため息はだめだ」

暢気なクロに、苦笑がこぼれた。



「皇子……いえ、クロネイ殿下のご容態ですが、この、脇腹の骨にヒビが入ったようでございます。ご負担のないよう固定しましたので、しばらくは安静にしてください」

「骨にまでいつていたの？」

デイランの王子に腹部を蹴られたクロを診察した医師に、シャナは眉をひそめた。

「こう申すのはなんともいやなのですが、当たり所が悪かったのだと思われます」

「当たり所って……なんてこと。最悪だわ」

「ごもつとも。それから」

「まだあるの？」

「はい。肩と背に打撲、腕と足に擦り傷がございます。ですが、こちらはすぐに治りますのでご安心ください」

「……満身創痍だわ」

怪我だらけではないかと、シャナは頂垂れながら椅子に腰かける。寝台にはクロが、少し息苦しそうにしながら眠っていた。

「本当にだいじょうぶなの？」

「今晚から明日、明後日は熱が出ます。感染症などの危険がございますので、こちらのほうで完全看護とさせていただきますとついでいま



す

「命に関わることは？」

「今のところはございません」

だいじょうぶです、と医師は言うが、クロの身体は特殊だ。怪我で臥せっている間に、ノエの契約が切れてしまう可能性だって低くはない。

「早く治して。お願い」

「は……ですが、それにはクロネイ殿下の体力の問題も」

「お願いよ」

「姫……こればかりは」

「クロに苦しい思いをさせたくないの。お願い」

「……、承知いたしました」

無理なことを言っていると、無茶なことをさせていると、そう思っても、クロのことを考えると言わずにはおれない。

「わたしがそばにいても、なにもできないけれど……だからお願いね、アイルアート」

「御意」

医師アイルアートにその場を頼むと、シャナは座ったばかりの椅子を離れ、寝室をあとにした。

胸中はざわめき、悔しさに押し潰されそうだ。

廊下に出ると、いつかシャナがそうしてしゃがみ込んでいたように、ノエが不貞腐れたように壁際の床に座っている。

「ノエ」

呼びかけながら歩み寄り、ノエに視線を合わせてシャナも屈む。

「礼を言うわ、ノエ。国の体面を考えてくれて、ありがとう」

「礼を言われるようなことはしちやいませんよ」

「とても助かったわ。それから、ごめんなさい。クロに怪我を負わせてしまったわ」

「それこそ謝られちゃ困ります。騎士としての立つ瀬がないでしょう」

「いいえ。これはわたしの責任よ。デイランの王子に、クロを逢わせてしまったのだから」

「ごめんなさい、と改めて謝ると、ノエは複雑そうな顔をした。

「上の者が下の者に謝るのは、どうかと思いますよ」

「あなたは精霊だもの。人間のそれには、関係がないはずよ」

「まあそうですね……気分は騎士なんで、そう扱っていいですよ」

人間として生活している時間が今も続いているから。ノエはそう言って、肩を竦める。

「あなたは変わった精霊ね」

「レスなんで」

「レス？」

「高位、という意味です。最高位は、セス」

「それは人間で言うところの、貴族階級みたいなものかしら？」

「似たようなもんです。精霊位ですから。まあ、人間ほどごちゃごちゃした関係じゃありませんがね」

精霊界にもさまざまな秩序、理があるようだ。

「……ねえ、ノエ」

「なんです?」

「あなたの力は、どれくらい大きいの?」

レス、というのが高位で、セス、というのが最高位だということなら、レスの位にあるノエの力は、上から二番にあるということだ。それはかなり大きな力を持つということではないだろうか。

「おれの場合は器が大きいだけですよ」

「器?」

「おれってという精霊の、ね」

ニツと笑うノエに、そういうことではない、とシヤナは脱力しながら首を左右に振る。

「精霊が契約主のそばを離れて行動するなんて、考えられないわ。だから、それほど大きな力を持っているということでしょう?」

「ああ……おれは命令されているからセイエンのそばを離れて行動できるだけです。もともとおれはクロのためだけに召喚された精霊ですし、そう命令されてもまあクロならいいかなと思ったんで。だから器が大きいんですよ、おれは」

「冗談で器のことを言っていたわけではなかったらしい。」

「命令……けれど、おばあさまは亡くなられたわ」

「そうです。だから、その命令に従う義務はない。命令が契約内容なんですね。今おれが力を使ってるのは、クロを気に入ってるからです。赤ん坊の頃から知ってるし」

つまりクロは、気紛れな精霊のそれだけで、生きていくというこ

とになる。それはなんと危うい均衡かと、シヤナは僅かに眉をひそめた。

「ノエ、前に提案があると、言ったわね？」

「ん？ ああ、そういえば言いましたね」

「わたしがそれを理解できるまで、待てると言ったわね？」

「姫ならわかると思ったんで。わかったんですか？」

わかるようで、わからない。以前ノエが提示したものは、シヤナならそのうち理解できると言ったものだが、あれから数日経った今でもよくわかっていない言葉だ。

ただ、一つだけ言えることがある。

「わたし……クロを失いたくないの」

その気持ちに気づいてしまった。その想いを、大切にしたいと思うようになってしまった。だからなんとしても、ノエの提案というものを理解しなければならぬ。

「姫、答えは目の前ですよ」

「わからないわ。どうすれば、わたしはクロを失わずに済むの？」

「だから目の前なんですよ」

「……目の前？」

比喩ではないのか、とシヤナはじっとノエを見つめる。

こうして見ると、ノエはどこかクロに似ていて、夕焼け色の双眸などはそっくりだ。ただ、クロほど眠そうな顔ではなく、精霊だといふのにそれらしくない、騎士の顔をしている。こんなに人間味溢れる精霊も、世界には存在するらしい。

ふと、閃いた。

そうだ、ノエだ。

「あなたならクロを助けられるわ」

「そうですね。おれはそういう精霊ですから」

「ノエ、お願い。わたしはまだクロのことを半分も知らないの。もつとクロを知りたいの。そのための時間を、わたしにちょうだい」

時間が欲しい。クロがクロだから、こういう気持ちになったのだ。これがクロ以外の人であったなら、シャナは心を開くこともなかっただろう。シャナを好きだと言い、ごめんねと謝るクロに、シャナは真正面から向きあいたい。

「じゃあ姫、気紛れな精霊と契約しましょうか」

にこりと笑んだノエが、そう言った。

「ただし、条件があるんですけどね」

常々「走るな」と注意される廊下を、誰かが走っている。なんだか騒々しい。なにかあったのだろうか。デイラン国が、なにかしらの動きを見せたのだろうか。

「騒がしいわね」

書類から顔を上げて首を傾げると、補佐官フィルも一緒になって首を傾げる。

「今日は特に議会が招集されるようなこともなかったと思いました  
が……ちよつと見てきます」

「お願い」

静かに午後の政務に勤しんでいるのは、シャナの周りだけなのか。フィルが部屋を出て様子を見に行ってくれたが、まもなく戻ってくる。

「フィル？」

「殿下、クロネイさまが……っ」

クロの名にどきりとしながら、なにごとかとシャナは立ちあがる。熱が下がってからのクロは、安静を言い渡されておとなしく部屋で休んでいた。シャナとお茶をしたいというから、その時間になる

とシヤナのほうから出向くようにし、できるだけクロを動かさないようにと気をつけたのはつい最近のことである。怪我也順調に癒え、無理さえしなければ悪化するようなこともないと、医師アイルアールトからの言葉もあった。

「クロがどうしたの」

「シヤナ！」

それは気圧されるほどの、声だった。

ファイルを押し退けて部屋に入ってきたのは、寝間着のまま部屋を飛び出してきたらしいクロで、固定されている脇腹を押さえながら息を乱している。まだ動いてはならないクロがここにいることに、シヤナは瞠目した。

「な……にを、しているの、クロ！ 部屋に戻りなさい！」

「シヤナ、ノエになにを言ったんだ！」

「！ ノエに……？」

「ああもう……なにがどうなってこんなことに」

やり場のない感情に戸惑っている様子のクロが、頭を抱えてふらりとよろめく。倒れそうになったところで、シヤナは慌ててクロに駆け寄りその身体を支えた。それなりの重さを覚悟していたのだが、思った以上にクロは軽く、力が余ってしまったので急いで往なす。その反動で、けっきょく床にふたりして転んだ。

「軽過ぎるわ、クロ。こんなに痩せていたなんて……ちゃんと食事しているの？」

「それどころじゃないよ。ああでもこの体勢は美味しい。シヤナのふかふかの胸……、じゃなくて！」

どさくさに紛れて抱きつかれているが、それはクロ本人も無意識のうちに行っていることのように、ぐっとシャナに顔を近づけると上目遣いに覗んできた。

「ノエになにを言った？ それとも、ノエになにか言われた？ どっち？」

「……クロを部屋から出さないように、とは言ったわ」

「違う！ いや、違わないけど……そうじゃなくて、あの話をされたんじゃないのか？」

「あの話？」

なんのことかしら、と思ったのは、誤魔化そうとしたからではなく、本当にわからなかったからだ。

「契約だよ。おばあさまがノエとそう契約したように、シャナもつて……そういう話をされたんじゃないのか？」

「ああ……」

「したのか！」

決起迫るようなクロの姿に、シャナの目が丸くなる。そんなにすごい話ではないのに、むしろクロには喜ばしい話なのに、なにがいやなのか怒っているように見えた。

「どうして！ シャナには天恵がないから、しなと思ったのに……」

「天恵はないけれど、わたしには恩寵があるのよ」

「え……っ？」

「この国の王女として生まれ、国を背負う者としての、恩寵があるのよ」



それは、運命、と言つのかもしれない。

シヤナはセムコンシヤスという王国に、王女として生まれ落ちた。シヤナのほかに子に恵まれなかつた王家は、これもまた運命だと受け入れ、シヤナを幼い頃から統治者として育て、国を護るすべてを教えた。シヤナには天から恵まれたものがない、それでも、そういう恩寵は与えられたのである。天恵とは神から与えられた特別な力だが、国から与えられる恩寵もあるのだ。

「地の力、だそうよ」

「地？」

「地の女神アヌさまは、わたしのそれを、認めてくださつたそうなの」

ノエから聞かされた話を、未だ信じられないところはある。それでも確かに、シヤナはノエと、契約をすることができた。

「わたしがあなたの命を護りたいと思うことは、そんなに、おかしいこと？」

「……ノエと、契約……したのか」  
「したわ」

してはならないことを、したとは、思っていない。クロを失えないと思つたからこそ、信じられない話を確証もなく受け入れた。けれどもそれは、クロを思つてのことではない。自分自身が、クロを失つたらどうなるかわからなくて、怖かつたからだ。

「なんで、そんなこと……おれはシヤナに、そんなことをさせるつもりなんか、なかつたのに」

「わたしが望んだことよ。あなたを……失えないの」

「シヤナを失えないおれの気持ちも考えろよ！」

そう怒鳴られて、吃驚する。

「なんでそんな無茶するんだ。おれが、死ぬために国を出たって、そう言ったから？ ノエがないとだめだって、もう命数が尽きるんだって、そんな……そんな保身を、言ったからか？」

「クロ……待つて、どうしてそうなるの？ わたしは言ったわよ？ あなたを失えない、これはわたしが望んだことだって」

「おれはシヤナに、おれのこと振り回されて欲しくない！」

思わず、カツとなってしまう。

「わたしを好きだと言ったのはあなたよ！ 振り回されて欲しくない？ もう充分だわ。あなたのその言葉に、わたしがどれだけ振り回されていると思ってるのよ！」

「シヤナが好きだから、それはもうどうしようもないだろ！ おれだって、予想外だったんだから！」

「だったら国から出なければよかったですよ！ そうすればわたしはあなたに出逢うこともなく、ノエと契約することもなかったわ！」

「生き長らえたくなかったんだよ！」

圧倒される言葉に、反論の余地を失った。

「おれの身体は、命数を延ばしているだけだ。脆弱なこの身体を治すことはできない。ミストだって治せなかったんだ。神さまにも見放されたこの身を、ミストは、だから気に入つたと嘯いておれを友と呼んだんだ。同情で神さまに気にかけてもらっていただけなんだよー！」

「クロ……」

「だから……っ……だから国を出たんだ！」

シヤナに抱きついていていた身体が、ふっと離れていく。

「クロ！」

きらきらと光るものが、宙に飛んだ。それがクロの涙だと、気づけないわけがない。

「クロ、待って！」

追いかける手のひらが、届かない。走り去る姿を、自分がしたことに後悔を感じないシヤナは、追いかけることもできない。

ふと、ノエの言葉を思い出した。

「走らないで、クロ！　お願いよ、お願いだから、身体を大事にして！」

そう叫んだときには、もうクロの姿はなかった。

『ただし、条件があるんですけどね。ついでに、理解してもらいたいことも、一つだけあるんです』

『……なに？』

『まずは条件から話しましょうか。国の恩寵があるあなたの力を、少しばかりわけてもらいます。おれに、ではなく、クロに、です』  
『わたしの恩寵？　わたしに天恵はないわよ？』

『姫はあるんですよ。神からの恩寵ではなく、国からの恩寵が。だ

から姫は、将来この地の王となる。とはいえ、それは一重に姫の努力の結果です。姫が国を護ろうと必死に勉強しなければ、国からの恩寵は得られなかったでしょう」

「国からの……わたしは国に必要とされている？」

「その恩寵が証明しています」

「そうなの……それで、その恩寵をどうやってクロに？」

「姫にある恩寵でおれと契約したら、クロを夫にしてください」

「……それだけ？」

「それだけ、なんて言わないでくださいよ。これが重要なんですから」

「クロを王族に迎え入れることは、もう決定しているわ」

「姫には重要です。クロを王族に加えるというのは、あなたの夫とするということなんですから」

「？　　そうよ？」

「あー……わかっていませんね、姫。おれは、姫に、クロを夫に迎えると言っているんですが？」

「迎えるわよ？」

「……姫、おれがセイエンの命令でクロを護っているのは、クロがセイエンの孫だからです。血縁にあるからです。姫とクロの場合、血縁にはないんですよ。それなのに、どうやっておれは姫の命令を聞いてクロを護ればいいんですか？」

「契約主の言葉には絶対ではないの？」

「そうだったらよかったですけどね、生憎と精霊位が高位までくると、これがかかなりの自由があるんです。絶対的ではありません」

「気難しいわね……」

「精霊とはそういうもんです。だから、血に縛られたりもするんです。セイエンはそれを利用したわけですよ」

「わたしの場合、クロを夫に迎えることで、ノエにその命令を聞かせることができるのね？」

「そこです、姫。意味、わかってます？」

『それは……つまり……』

『赤くなるってことは、わかってくれましたね。じゃあそうしてください。これで名実ともにクロはあなたの夫、あなたの血族です。おれはあなたの命令に従う。条件はそれだけです。まあ人間世界でも、一度契れば永続的でしょう。どんなに後悔しても、クロはあなたのものだ』

『そ……そうすることで、クロを失わずに済む、のね？』

『はい。そこで発生するのが、さっきも言いました理解してもらいたいことです』

『一つだけあると、言っていたわね』

『ええ。一つだけ、理解してもらいます』

『なに？』

『クロの病が治るものではない、ということですよ』

瞬間的に思い出したノエとの会話に、シヤナは唇を噛む。

「ノエ、あなたの言う通りだわ」

両手を組み、祈るようにそこに顔を埋める。

「クロの苦しみは終わらない……命を、命数を、延ばしているだけだもの」

クロは、ノエの力で生きている。いや、生かされている。だから死ぬことはない。

けれどもそれは、長い苦しみを、クロに与えている。

クロの病は治ることはない。脆弱な身体を、健康にすることはできない。怪我をしてすぐに治ることもなければ、風邪を引かないなんてこともない。

ただ、命数を延ばしているだけ。  
どれだけの苦しみがクロを蝕んでいることだろう。クロは、それから解放されたかったのかもしれない。

「ごめんなさい、クロ……それでも、わたしはあなたを失えないのよ」

好きだ、と。

思ってしまった。

失えないと思ったときに、それが愛だと、気づいてしまった。クロと出逢う前の自分には、もう戻れない。

『人間てのは、いつの時代も、愛に葛藤するもんですね』

気紛れな精霊の言葉に、その通りだと、シャナは苦笑した。

だから、これは悟られてはならないのだ。

ノエとの契約は成った。けれども完全ではない。ノエにその命令をするまで、なにかに気取られてはならない。

婚礼まで残り僅かな日数、その日が待ち遠しい。

「ごめんなさいね、クロ……わたしはあなたを選んでしまったわ」

その苦しみを半分、背負うから。

その悲しみを半分、背負うから。

すべてを分かち合って、生きよう。

それがシャナに、唯一できること。



病み上がりでよかった、と言った。  
目先のものに急いで走ることが出来るから、と。

その瞬間、シヤナは現実を否定した。

「また、デイラン国なのね」

「はい、トワイライ帝国に宣戦布告を」

「その判断は、王になるうとしてしている自信過剰な王子かしら？」

「ほかにおりませんでしょう」

「最悪ね」

一度は落ち着いたと思ったのに、とシヤナは抑えきれなかったため息をこぼす。幸せが逃げる、という言葉は、今日から誰からもなかった。皆がため息をつきたい気分だったからだ。

「トワイライに勝てると、本気で思っているのかしら」

「自信過剰でありますれば」

「交渉材料はなに？ ちなみにうちは、トワイライ側よ。同じように、各国もトワイライの側につくでしょうね。誰もデイランには味方しないわ」



「なにか企んでいるようではありましたが……さっぱりわかりません。なにがあそこまで自信過剰にさせているのでしょうかね」  
「知りたくもないわ」

大げさなほど肩を竦めたあと、シヤナは座卓に向かい、白紙にさらさらと文字を連ねる。印を押して封をすると、ファイルに手渡した。

「これを王陛下に。了承を得たら、早急にトワイライの皇帝へ。急いで」

「御意。至急、馬を走らせます」  
「お願いね」

ファイルを走らせたあと、さてどうしたものかと、シヤナは座椅子に埋もれて考える。

デイラン国とはずっと微妙な関係が続いている。それは統治者が変わらない限り、永続的に続くだろうと思われる。関係が悪化し、開戦になるかと思われたこともあったが、それはクロが身を呈して出した脅しによって回避されている。デイラン国も、唯一の資源であり独占的である銀山を、みすみす手放したくなかったのだ。だが、それも終わりだ。なにを思ったのか、敵に回してはならない大国を相手に、宣戦布告した。デイランもお終いだ。銀山は、大国トワイライの手に委ねられることだろう。それがデイランの国に産まれた者にとつて、救いとなるかどうかはわからない。だが確実に、人々の生活は改善されるだろう。開戦によってたくさんの人々の命が犠牲になるだろうが、それも仕方のないことだ。せめて一日も早く終わりとなるよう祈ることしかできない。

「争いごとが多いですね、ここは」

「ノエ」

「クロとも喧嘩してなかったですかね、姫は」

「黙って。余計なお世話よ」

「考えることが多くて大変ですね」

「黙ってと言っているの」

口を挟んできた気紛れな精霊は、珍しく騎士服を着用していない。クロが半ば臥せっているのも、その世話をするのに邪魔だとかで、侍従の恰好をしているのだ。ただ、その腰には剣を帯び、なに者なのかわからない存在になっている。思わず、誰よあなた、と言いたくなるのは仕方ない。

「それで？ クロの様子でも伝えにきてくれたのかしら？」

「姫の命令を聞きにきたんですよ」

「わたしの？」

「たぶん、馬だと間に合わないでしょうから」

そうノエが言ってすぐ、フィールドではない別の補佐官が、予告なく扉を開けた。

「殿下！」

「なにごと？」

「申し訳ありません、入られてしまいました！」

「……入られた？」

「デイランの王子です！」

ぎょっとする。宣戦布告の話聞いたばかりだ。

「どっして……ここに来るにしても、時間が……早過ぎるわ」

「どっちら、こちらに向かう途中での、宣言だったよっでいっせいます」

「道中で……なんて愚かなの。本当に最悪だわ」

「殿下、いかがなさいましょう」

そんなの決まっている。追い出すしかない。けれども、追い出すにしても、正式な文言が必要だ。つまり国としての体裁と措置が必要になる。宣戦布告を聞いたばかりでは、いくら準備していたとはいえ、間に合わない。入られたということは、デイラン国の王子は城下まで来ているということだ。そこまで来られてしまったは、こちらとしてはなに用あつてのことかと、迎えなければならぬ。

「わが国がトワイライの側につくとわかっていながら危険を冒したのなら、こちらになにか、交渉材料にでもなるものがあるのでしょうね……なんだというのよ」

「まあ一つ言うなら……」

「ノエ？」

「クロでしようね」

意外な言葉に、シヤナは首を傾げる。

「なぜ、クロなの？」

「アースの最大の弱点だからです」

「……先帝陛下の？」

「クロが言ったでしょう。おじいさまは自分に甘い、と」

瞬間的に、頭が回転する。その早さには、自分でも驚いた。

「トワイライに宣戦布告しておきながら、攻撃する場所はセムコンシヤス？ 先帝が可愛がるクロがここにいるから、それを脅しに使うおうと？ 道中で宣戦布告したのは、開戦の鐘をセムコンシヤスで鳴らすため、準備もできていないわが国はそれで滅ぼされると、そういう展開だと？」

「さすが姫、その通り」  
「最悪だわ！」

読みが甘かった。これは注意しながら自分のことに気取られたシヤナの失態だ。国を護ろうとしてきたことが、結果、自身で国を追い込む事態を招いている。

「王陛下はなんと言っているのっ？」

「下まで来られては拒否もできない、と。ですが、殿下の判断に任せると仰せでした。時間稼ぎは任せろ、と」

「さすがは王陛下ね……」

責任はシヤナにあると、父王は最後までシヤナに責任を取らせる判断をしたようだ。それなら、フィルに任せた書面は、トワイライ帝国へ届けられることだろう。だが、間に合わない。

「……ノエ」

「はい」

「わたしの命令が聞けるかしら」

真っ直ぐ見据えた精霊は、それが当然のように笑んでみせた。

「今すぐトワイライへ。強力な助けが必要な」

「助け、なんて……おれに対して言うもんじゃないですよ」

「頼めるかしら？」

「条件が一つ」

「なに？」

「今すぐ王族の系譜に、クロの名を」

「……わかったわ。行って」

「では、よろしく」

まるで遊びに行くような気軽さで、ノエが壁をすり抜けて消えていく。これでどうにか父王の時間稼ぎが有効利用されればよいが、せいぜい明日までの限界だろう。

「エリオン、王陛下のところへ」

「はっ」

「系譜にクロの名を、と。血印はすぐに運ばせるわ。わたしとノエの、先ほどの会話もお聞かせして」

「御意」

エリオンを走らせると、シヤナはひとりになって、たびたび椅子に埋もれる。いつまでもそうしているわけにもいかず、数分で身体を起こすと、乱暴に扉を開け閉めしてクロのところへと向かった。

喧嘩の最中ではあるが、今はそれどころではない。ただでさえクロの命は先が不明瞭だというのに、デイランという国が横やりを入れ、不安定だ。あんな国にクロを渡してたまるかと、そういう想いにかられる。

「クロ、入るわよ」

部屋のあるじは併設した寝室にいるだろうが、控えている侍従のためにその声をかけてクロの部屋へと入る。

と、寝室で休んでいるはずのクロが、部屋の中央に立っていた。

「クロ……どうして」

「聞こえたから」

にこりと、喧嘩をしたという気配すら見せない笑みで、クロは準

備を整えていた。いつもの神官服ではなく、シャナが選んで用意した王族の衣装をまとうているのだ。おそろしくどうでもいいことだが、そういう恰好をさせれば皇子に見えるから不思議だ。おまけに帯剣までしている。腰に剣があるクロなど、初めて見た。

「かつこいい？」

見惚れていたシャナに、クロが揶揄するように言う。

「……剣を扱えたのね」

動揺しながらも言えた言葉に、自分でも呆れる。嗜みがあって当然だ。

「これが意外、おれは武闘派でね。だからノエとふたりだけで、ここまで道のりを旅できたわけ」

「……本当に意外だわ」

「一つくらい特技があってもおかしくはない。脆弱でもね」

なにもできないわけではないのだと、クロは言う。教えてくれたのはノエらしい。そして剣は、祖母からもらったのだという。セムコンシヤスまでの道中で荷を売るということをし、手荷物らしきものをもっていかなかったが、これだけは売らずにきちんと持ち歩いていたそうだ。

「隠していたの？」

「ノエが持ってたんだよ。ふだんもノエが持つてる。そのほうが、相手を油断させられるからね」

確かに、油断させられている。神官服でいるときなどは、まった

く害を感じない。おとなしく、気弱に見える。今とは真逆だ。今のクロは、一国の皇子という雰囲気はひしひしと伝わってくる。見た目でここまで変わる人も珍しい。

「さて……おれはなにをしようか？」

「……休んでいなければだめよ。あなたはまだ傷が癒えていないのだもの」

「平気だよ。こうして剣を振り回せるくらいには、回復した」

「それでも、わたしはあなたを傷つけたくないの。傷をつけさせようとする者は、わたしが排除するわ」

だいじょうぶだから、わたしに任せて欲しい。シャナはそう言ったが、クロは首を左右に振った。

「シャナを傷つける者がいる。おれに、それを許せと？ 無茶な話だ」

「クロ」

「言っただろう、シャナ。おれは、シャナの地盤になるために、ここにいます。シャナの足許は揺るがない。おれが、いるんだから」

デイルン国が交渉材料にしようとしている、そのクロが、なんと勇ましいことか。デイルン国の王子は、この姿を見誤った。彼らが思うほど、クロは弱くない。むしろ手強いだろう。

「行こうか、シャナ」

ふだんが皇子らしくない分、今のクロは別人のような覇気を感じる。

デイルン国の王子に混乱を招かれたシャナだが、クロのその覇気に充てられて、徐々に頭が冷えていった。

「ええ……行きましょうか、クロ」

本当は無理をして欲しくないけれども。

クロをかき立てているものがシャナが存在なら、それはどれほどの喜びだろう。



王の許へ行く前に、とシヤナはクロから血印をもらい、先に運んでもらった。なにをするのかと訊いてきたクロには、式典に必要なからと、無難に答えておく。実際に、婚姻が交わされるとき、血の印が必要になるからだ。それを先に済ませておくだけのことなので、これという問題はない。

ふたり揃って王の御前に立ったときには、父王は事情を聞き終えて王家の系譜にクロの名を記していた。これでクロは、クロネイ・エイブン・セムコンシャスと正式に名乗ることになる。ノエの条件を一つ、達成させたというところだ。

「もはや城下は、デイラン国の兵に囲まれているだろうな」

「油断しておりましたこと、お許しください。この責任は必ず」

「いや、わたしも油断していた。おまえにはかりある責任ではない。まさかこうくるとは……トワイライへの書状は速やかに届けさせたが、間に合いそうか？」

「ノルイエに届けさせましたので、ぎりぎりになるとは思いますが」

トワイライへの要請は、ノエにかかっている。馬では間に合わないだろうからと、精霊たるノエが動いたのだから、確実に間に合うだろう。だが、それでも時間はたくさん欲しい。デイラン国の王子カルトが城門を抜けるのは、遅かろうが速かろうが確かなことなのだ。

「よもや戦にしようとは、誰も考えなかっただろ。デイルンも地に落ちたな」

「今代の王は賢王であると、聞くのですが……世継ぎには恵まれなかったのでしょうね」

「その点、わが国は恵まれている。よき後継者が揃ったからな」

緊張した空気の中、父王は陽気に笑ってみせる。それが王の余裕であり、戦が起ころうとも無血勝利を確実にしている者の強さだ。

「王陛下、一つ、よろしいでしょうか」

「なんだ、皇子？」

「おれ……いえ、ぼくのはクロネイと」

「ああ、そうだったな。きみはもうわたしの義息子だ。クロネイと、呼ばせてもらおう。して、なんだ、クロネイ？」

「ありがとうございます」

シヤナに並んで立っていたクロが、父王の許しを得て一步前に進み出る。

「デイルン国の王子カルトの狙いは、おそらくぼくでしょう」

「ほう？」

「もし城内で抜刀する事態となったら、大事です。今は迷わずぼくを、向こうへ差し出してください」

なにを言うのかと思いきや、ノエが言っていたようなことに追加するようにクロがとんでもないことを口にする。

「これはわが国の問題で、あなたひとりの問題ではないのよ、クロ」

「ああごめん、言い方が悪かったか。いや、おれに行かせて欲しいってことだよ、シヤナ」

「同じことよ」

これはセムコンシャス王国の問題で、たとえクロがカルトの狙いであっても、その趣旨は変わらない。

「クロネイよ、シャルナユグの言う通りだ。きみは……いや、おまえはもはやわが国の王族、シャルナユグの婿だ。おまえひとりに、テイランを押しつける真似はしない」

「ですが王、ぼくならば油断を誘えます。それに、カルト王子がセムコンシャスに攻めてきたのには、ぼくに責任があります。ぼくは祖国を盾に、カルト王子を脅迫し、挑発したのですから」

「己が分を弁えぬ若造のしたこと。おまえがしたことは、わが国を護る一手。大きな違いだ」

責任を感じる必要はないと、父王は言う。しかしクロの顔色がそれで晴れるわけもない。

「ぼくの虚弱さを知ってなおそうおっしゃっていただけのことに、感謝いたします。ですが、だからこそ、ぼくにできることを、させてください」

「クロネイ……意外に頑固だな」

「自国を護りたいと思うのは、セムコンシャスの民なら、当然のことではありませんか？」

父王の御前で揺るぎなく心を貫くクロに、さすがの父王も苦笑した。

「よき婿を得られたものだ……では、クロネイよ。無理はせず、己れができることを、わが国のためにつけてくれ」

「御意。ありがとうございます、王陛下」

本来なら、大国トワイライ帝国の末皇子たるクロのほうに、父王よりも身分は上だ。それはクロが婿に迎えられたあとも変わらない。主上国であるトワイライに、セムコンシヤスは敵わない立場にある。しかしクロのその態度は、トワイライの皇子ではなく、セムコンシヤスの王子だ。

いったいどうしたら、こんなにも、セムコンシヤスを想えるのだろう。いくらシヤナが好きでも、ふつうなら国まで護ろうとは思わないはずだ。けれどもそこには、クロ自身が言った「帰るところなんてない」という、危うさがある。

クロは自らの意思で、前へと、進もうとしているのかもしれない。シヤナの隣に、自分の居場所を見つけたのかもしれない。生きようとしているのだろう。

誰かにその命を護ってもらうのではなく、シヤナの隣で。それならシヤナも、自分のために、クロを護ろう。

「わたしも剣を取るわ」

「シヤナ？」

「あなたはひとりではないの。わたしが、いるのよ」

初めは政治的な絡みのある縁談だった。シヤナにその気はなかった。けれども、そのシヤナを変えたのは、地に足をつけたクロだ。シヤナに、長く生きられないことを黙っていた、クロだ。

「あなたがわたしの隣に立つのなら、わたしもあなたの隣に立つだけよ」

絡めた腕は解かれていない。シヤナは強くクロの腕を抱くと、少しだけ吃驚しているクロに微笑んだ。

「あなたはわたしの夫よ、クロ」

口にしたとたん、錯覚だろうが、クロの周りにたくさんの花が咲いた。それに追いつくように、クロは頬を朱に染め、照れくさそうに頷いた。

場違いな、と笑ったのは、その笑いすらも場違いだろうに、父王だった。

「これから戦が起こるやもしれんというのに……暢気な夫婦だ」

開戦の鐘がいつ鳴らされてもおかしくないこの状況で、確かに暢気なことだったかもしれない。けれども、シヤナには必要があった言葉で、クロにも必要な言葉だった。

喧嘩はこれまでだ。いや、クロはシヤナがノエと契約したことを、いつまでも根に持つかもしれない。だが、シヤナはやはり後悔がない。自分にはクロが必要だと、強く感じる。だからノエとの契約は間違いではなかった。

「しゃ、シヤナ……あの」

「なに？」

「く、口づけ！ し、しても、いい？」

そついつ宣言をしてしまうところが歳下だなと思う。

「いくらでもどうぞ？」

笑いながら、組んでいないほうの腕を持ち上げ、手の甲をクロの前に差し出す。さすがにこの場ではこれくらいが当然だろうと思うのだが、しかしそれはシヤナだけの考えだったらしい。

「シヤナ！」

熱烈な口づけを、唇に受けてしまった。それはあまりにも素早く、驚く暇もなかった。

「やっぱりおれ、だめだ……シヤナが好きで、喧嘩なんてしてられない」

潤んだ瞳でそう言われては、怒ることもできない。父王の目の前でのことだったのに、クロに対しての気恥かしさのほうが際立つ。

「場所を考えなさい……っ」

シヤナに言えたのは、せいぜいそれだけだった。

そして、そんな甘いような苦いような空気が、緊張の中に合った場を大きく包み込もうとして。

「王陛下！ デイラン国です！」

先触れもなく乱暴に開かれた扉からの声に、再び一気に、場は緊張する。

「来たか……デイランも無茶なことをする」

「……王陛下」

「ああ」

父王は頷き、深呼吸ののち前を見据えた。

「迎え入れよ。指揮にはシャルナユグ、そしてクロネイが立つ。己

が役割を果たせ」  
「御意」

セムコンシヤス国王の号令は、速やかに伝達された。

いつもは賑やかな城下が、ひっそりと静まり返っている。デイルン国の竜旗がいきなり掲げられ、その紋章を背負った者が街にいきなり現われたのだから、それは当然の結果だ。

城門を背にしたシャナは、つくづく自分の甘さを思い知る。

「油断し過ぎね……まさかここまで潜り込まれていたなんて」

軽く武装したシャナは、抑えきれなかったため息と頭痛に悩まされそうになりながら、武の心得があることで同行することになってしまった補佐官フィルとエリオンに、「悪いわね」と声をかけておいた。滅相もない、とフィルとエリオンは畏まったが、ふたりとも本来は文官であり、武官ではない。シャナ自身も心得があるだけで、武器を手にすることを得意とはしていないが、ふたりの補佐官よりかは腕が立つ。文官であるフィルとエリオンには本当に申し訳ない。

「われわれも、まさかここまでとは考えておりませんでした。判断を誤ったのはわれらです、殿下」

「お互いさまということにしておきましょう。あとは……ノエがどれくらい早く、帰ってきてくれるか……ね」

あつというまに城を囲んだデイルン国の兵士は、シャナの目から見てもそう数は多くない。もともとデイルンとセムコンシャスは、規模としてはセムコンシャスのほうが僅かに勝っている。その分だ



け兵力も勝っているわけだが、城門まで迫ってきているデイランを迎え撃てるほどの兵力は、今ここにはなかった。ノエがどれほどの速度でトワイライ帝国を呼んでくれるかはわからないが、トワイライからの応援と、自国の兵力を呼び寄せせるまで、とにかく対峙し続けるしかない。誰かひとりでも攻撃をしかけてこようものなら、そこから始まる戦いも防戦一方となるだろう。

或いは、交渉によって、事態は変化する。

今のところ、デイラン側の中央には竜旗があるので、王子カルトはそこにいるのだろう。動く気配はないが、出方は窺っている。シヤナの姿も目視しているはずだ。

剣を交えず交渉という方法を取ってくれば幸いであるが、城門の塔にある部屋で待機している父王が出した先触れに反応を示さなかったことを考えると、戦による交渉という手段を用いられる可能性が高い。つまり、武力で従わせようとしているかもしれない、ということだ。

「この沈黙はいやね……かといって、矢を投擲されても困るのだけだ」

防衛の一切を担ってくれている四方の將軍には、デイランからの挑発に乗らないよう兵を宥めてくれと、予め伝えている。だが、この沈黙が長く続けば、兵は焦りを見せるだろう。それすらも挑発なわけだから、とにかく冷静に状況を見極めなければならぬ。

「ところで、わたしが着替えている間に、クロはどこへ行ったの？」  
「クロネイ殿下でしたら、あちらに」

フィルに教えられて、シヤナは姿の見えないクロを探し、城門を見上げる。シヤナから見て真上の監守台に、クロはいた。

「わたしも移動するわ。北方將軍、ここはお願いね」

「お任せを」

「矢が一本でも飛んできたら、すぐに城内へ入りなさい。打ち返さないこと。いいわね」

「御意に」

四方の將軍の中でも一番若く、だのにもっとも冷静な北方將軍は、シヤナが城門前にいることのほうが心配でならなかったらしい。クロがいる場所へ移動するというシヤナを、早く安全なところへ、と急かすくらいだ。

シヤナは、フィルとエリオン、近衛騎士隊と共に、クロが立つ城門の上へと移動する。フィルが、「クロネイ殿下が皇子らしく見える……」と小さく呟き、エリオンが「いや皇子ですから。そう言いたくなりますけど」と突っ込む囁き声が聞こえ、思わず笑ってしまった。やはりクロは常に「皇子らしくない」と周りから見られているようだ。そして今の恰好が、ただセムコンシヤスの王族衣装を着て帯剣しているというだけのことなのに、随分と変わった印象を受けるのだろう。シヤナが感じたことは、皆も感じることであったらしい。

くすりと肩を震わせながら、城門の階段を登り終えたときだった。

「クロネイ殿下!」

と誰かが大きな声でクロを呼び、続いて金属音が響いた。

なにごとかと慌てて顔を上げて見たものは、クロが剣を抜いている姿だった。

「クロっ?」

「シヤナ、動かないで」

駆け寄ろうとしたシャナを牽制したクロは、鞘から抜いた剣を振るい、なにかを切り落とした。

「殿下、お下がりにください。投擲されております」

シャナを護る近衛騎士が、状況をすぐさま把握し、シャナの前に出た。

「開戦するというの？」

ハツと見やると、射られた矢が飛んできていた。それはクロを狙っているようで、正確に位置を把握して飛んでくる。

「クロ！」

「だいじょうぶ。正確過ぎて、落とし易いから」

クロの周りにも、近衛騎士はいる。しかし、狙いが確かで、逆にクロを護れずクロが剣を振るっている状態だ。

とはいえ、デイルン側もそうだが、クロの剣捌きも正確なもので、近衛騎士の出る幕がない。武闘派だというのは、嘘ではないらしい。

「それよりシャナ、どうする？ 挑発だと思うけど、こころも正確におれを狙われると、国としては迎え撃つ必要があるのかな？」

「よ、よそ見しないで！」

「音でわかるからだいじょうぶだよ。等間隔だしね」

数本の矢が一気に射られるのではなく、一本ずつ間隔を持って矢は飛んでくる。挑発だとは思いが、それとは別に、確かな意図でクロは狙われているだろう。

音でわかる、と言ったクロは、顔をシヤナに向けながらも、また飛んできた矢をいともあっさり剣で薙ぎ払った。遊んでいるようにすら見える。

「どうする、シヤナ？」

「と、とりあえずこつちにいらっしやい！」

「シヤナに矢が当たるかもしれないからいやだ」

「我儘言わないでちょうだい！」

「おれはここでも平気だよ。原始的な弓の矢だし」

なんともない、と言いながら、また飛んできた矢をクロは剣で防ぐ。見ていないのにその手は正確だ。

「の……ノエが到着するまで、こちらからは攻撃しないわ！ だから、早くこつちにいらっしやい！ 的にならないで！」

「防戦だけ？ んー……おれが行って蹴散らしてもいいけど」

「あなたひとりではどうにかなる数ではないわ！」

とにかくいいからこちらに、とシヤナはクロを促し、近衛騎士を動かした。そこまですればクロも漸く移動してくれる気になって、ちらりと前方を見たあとはなにこともなかったかのようにシヤナのそばに来る。的にしてくれと言わんばかりであったクロの位置が変わると、やはり矢は射られなくなった。

「挑発かー……ごめんシヤナ、おれ挑発に乗っちゃった」

「率先して冷静さを失わないでちょうだい！」

のほほんと言うクロに初めてまともに腹が立った。

「どうしてそんなに暢気でいられるのよ……矢の的にされていたの

よ？ 当たってもおかしくないのよ？」  
「叩き落とすからだいじょうぶだよ」

皆が緊張したというのに、シャナの婿どのは焦ってもいない。物陰に入ってしまったと、抜き身だった剣を鞘に戻し、軽く息をつきながら石段に腰かけた。

「セムコンシャスに敵意を向けているねえ……シャナ、どうするの？」

「あなたが狙いだというのはよくわかったわ」

クロの隣に腰かけ、シャナも息をつく。どんなことがあっても無理はして欲しくないのに、精神に悪影響を及ぼす婿どのだ。

「おれが狙いならなおさら、的になっていたほうがいいと思うけど」「やめなさい！」

心臓に悪い。クロを失いたくなくてノエと契約したというのに、こんなところで失うなんて考えたくもない。

お願いだから無茶なことはしないで、とシャナはクロの手を掴んで捕まえた。

「……ノエが来るまで、こうしているの？」

「ええ。こちらの兵力だけで、今のデイランを防ぎきることはできないわ。四方の將軍は北方將軍と西方將軍だけで、微妙なところなのよ」

「ノエが到着したら、なにが変わる？」

「状況は変わるわ。けれど、そうね……デイランからの攻撃を受けた今、開戦されたも同義。ノエが到着しても、状況が変わらないかもしれないわ」

「それなら、やっぱりおれが行って蹴散らし」

「あなたが出る前に隊の編成は完了し、迎え撃つことはできるわ。籠城して、トワイライからの援軍を待つ時間が稼げるの」

言い負かしておかないと、ふらふらと動き出してしまいそうで怖い。

捲し立てるように今後のことを話せば、クロはつまらなそうな顔をして「それなら待つしかないか」と諦めてくれた。

「それにしても……」

「どうしたの？」

「展開が、随分と早いなと思って」

「……そう、ね」

「そもそも、セムコンシャスで開戦するっていうこと自体、なにかおかしい」

「それはあなたがここにいるからで」

「いや、それだけの理由とは思えない。おれが狙いなら、暗殺とかそういう手段もある。おれがいるからセムコンシャスを狙う……というのは、どうも早計というか、浅はかというか」

それは仕方ないのだと、シャナはデイルン国の王子カルトのことを話して聞かせた。

「もともと、あまりよい噂はないの。もちろん、よい話もあるわ。どちらが真実かはわからないけれど、わたしとしては、あまりよい感情を持ってないわ」

「あ……まあ、すごく偉そうだったからね」

「カルト王子のその態度が、なにかの裏返しという可能性もなくはないわ。デイルンの国王は賢王ではあるから」

「……なにか後ろにありそうだね？」

「その……女性関係が、あまりよろしくないのよ」

「ああ、それはちよつと、シヤナには精神的に悪いことだね。うん、わかった。あとはおれが自分で勝手に想像するから、話さなくていいよ」

無理をしなくていいと言ってくれたクロに、その心遣いは嬉しいが、「いやいやいや」とシヤナは首を振る。

「あなたに気持ちをわかってもらうなんて、そんなことさせたくないわ」

「シヤナの気持ちはわかりたいよ」

「わたしではなくて、デイランの国王よ。想像しないで」

クロは男だ。デイランの国王の気持ちを、わかって欲しくはない。それはシヤナの、今さらだが嫉妬だ。

だいたいにして、である。

クロは婿入りだが、クロのように相手に素直に惚れる婿もいれば、そうでない場合もある。そういう場合、婿は後宮に愛人を囲うのだ。逆の立場にあるシヤナも、そうだったことは許されている。むしろ後宮とは、そういう場所だ。クロよりもシヤナのほうが国の中では立場も優位になるが、だからといって大国の皇子であるクロを蔑ろにしているわけがない。

クロが、シヤナが、望めば後宮は大勢の人間に溢れることになる。

「そつちの心配をさせたのか、おれ……か、悲しいかも」  
「え？ あ、その、心配はしていないわ。ただちよつと……面白くないだけよ」

「む……ちよつと？」

シャナの心配が少しであると、思ったのか。そういう反応をクロがシャナに見せる限り、今のところ後宮のことを考える必要はなさそうだ。

「訂正するわ。その……だいぶ面白くないのよ」

「おれはシャナ一筋だよ」

「あ……ありがとう」

「おれみたいな貧弱な奴のために、精霊と契約しちゃうしね」

ノエとの契約をやはり根に持っているようだ。

「ねえ……どうしてそんなに、言い方は悪いけれど……死にたいの？」

「え？ べつに死にたくはないよ」

「そうなのっ？」

あれ、とシャナは驚いてしまう。

「確かにおれは死ぬために国を出たけれど……死んだほうがよかつたって、そう思うこともたくさんあったけど、でも、だからって、自分から死にたいとは思ってない……と、おれは言ったかな？」

「……聞いてないわ」

シャナが聞いたのは、「死ぬために国を出た」という言葉だけだ。そこからは、シャナの推測だ。「生き長らえたくなかった」という言葉を聞いていたから、てっきり、クロは死にたがっているものと捉えていた。

どうやら違うらしい。

「おれみたいな虚弱な奴が、皇子なんて立場にあって、それでみん



なに大切にされるっていうのは、どうもおれの中では納得できなくてね。だから、さつさと死んでしまいたい、なんて思うことはたくさんあったよ。けれどね、シヤナ」

考えてみなよ、とクロに言われる。

「今だから明け透けに言えることかもしれないけれど……おれは、甘やかされて育ったから、それが許せないんだ。おれは皇子という立場にあつて、しかも末っ子で、ただそれだけでみんなに甘やかされた。国中を見渡せば、おれみたいな子はたくさんいるのに、けれどその子たちは、おれみたいには生きられない。だからおれは、生き長らえたくはなかったんだよ」

どうして自分ばかり、国を見渡せば同じような子はたくさんいるのに。

クロがそう思っていたなど、正直シヤナには驚きだ。当たり前のように、皇子という立場にいたわけではないらしい。

「自然の摂理を曲げてまで、生き伸びる必要がある命だとは、どうてい思えなかった」

祖国トワイライ帝国にあつて、クロは、もしかしたら居場所がなかったのかもしれない。みんなに甘やかされる自分が、その価値があるのかもわからなくて、悩んでいたのかもしれない。

ばかな子だ、とシヤナは思う。

「あなたが家族だから、そういう家族に恵まれたから、あなたは護られたのよ」

「うん。今は、そう思うよ。みんなおれに優しかった。それは嘘じ

やないって、わかるから」

今はもう卑屈には考えていない、とクロは微笑む。

「だから思ったんだ。ああおれ、すつごく生きたかったんだなあって」

それは国を出ようと決めたときに、思ったことだと言う。

「こんな身体、いやだなあって……つくづく、思ってた」

せめて遺骸だけでも、見せないようにしよう。

命を護る契約もいつ消えるかわからない、それならいつそ遠くの地で、皇子という立場が生きる場所で、ひっそり静かに瞼を閉じよう。

家族の涙を、見なくて済む場所へ。

「シヤナには、悪いけれど……だからおれは、死ぬために国を出たんだ」

シヤナは、クロのその気持ちを踏み躪った。

「ごめんなさい」

けれども、後悔はない。

「それでもわたしは、あなたが……必要だわ」

クロは愛する人のいない地に、眠る場所を定めた。そこは自分も愛されることを望まなかった場所だ。

「おれも、ごめん。それでもおれは、シヤナが好きだから」

予想外だった、というのは、本当なのだ。誰も愛さないと決めたクロは、シヤナに出逢って、その気持ちを抑えられなくなったのだ。ひとりで逝くことが、悲しくなったのだ。

「あなたが苦しいとき、そばにいるわ。あなたが悲しいとき、一緒に泣くわ。だから今は、わたしの勝手を許してちょうだい」

失いたくないのだ。失いたくないと、思ってしまうようになったのだ。クロがあまりにもするりと心に入り込んできたから、追い出すこともできなくなってしまった。

クロを苦しみから解放させてやれない。

「責任、取ってくれるんだろ」

クロにしては珍しく声色の低い言葉に、シヤナは反らしていた目を、クロに戻した。

「おれは、クロネイ・エイブン・セムコンシヤス」

腰かけていた石段から立ち上がったクロは、いつのまにか、再び抜き身の剣を手にしていた。

「シャルナユグ、きみの夫だ」

精悍な笑みに、胸が高鳴る。

いつも子どもっぽくて、着るものがないからと神官服を身につけて、シヤナが用意した衣装には部屋にいるときにしか袖を通さなく

て、シヤナが執務で忙しくてもそばを離れたがらなくて、邪魔をしないからと言うくせにシヤナの膝を枕にするクロが、今日はどうしてだろう、勇ましく頼りがいがある、そんな顔をする。

「……あなた、皇子だったのね」

皇子らしくない、それがクロだったけれども、ただ甘やかされて育ったわけではなく、自分でさまざまなことを考えて行動していたから、皇子らしくなかったのかも知れない。

そして同時に、皇子らしくもあつたのだ。

「おれ、かつこいい？」

国の象徴であることを、クロはよくわかっている。

「そうね……可愛いわ」

「そうだよ、かわ………かわいいっ？」

「その衣装、とてもよく似合っているわ」

「うんさすがシヤナの見立てだよ。さすがシヤナだよ、うん。でもね、可愛いはないと思うなあ？」

せめてかつこいいと言って欲しい、と言うクロに微笑んで、シヤナも石段から立ち上がると部下を呼び、矢が射られたことで城門の内側へと退避したであろう北方將軍と今後の話をすべく、指示を出した。

「ちよ、シヤナ！」

「あなたもいらっしやい。今後の対策を考えるわ」

「おれ政治的な話は無理だよ」

「いるだけでいいわ。いらっしやい」

ふらふらとひとり動きかねないクロを、この場に残しておくことはできない。シヤナはクロの手を強引に引っ張って、階下へと向かった。

「シヤナ、シャルナユグ！ この手は嬉しいけど、でもちょっと待って！」

戦略とかそういうの無理だから、と訴えられたが、とりあえず聞く耳は持たなかった。

闇に乗じて攻撃がなされるかもしれない。そう判断した北方將軍と西方將軍の意見に、シャナは頷いた。警戒を怠ってはならない。父王の先触れに反応しなかったデイランの王子カルトは、愚かだの浅はかだのと言われる王子だが、それなりの賢さはある。どんな戦略が立てられているかはわからないが、こちらがトワイライ帝国の側につくというのはわかつているだろう。闇に乗じての攻撃は、確実に在り得ることだ。

なにか少しでも動きを見せたなら知らせるようにと念を押し、見張りを頼むとシャナは城門の塔へと移動して、父王と今後のことを話すと休ませてもらうことにした。状況が状況なので、クロとは部屋を隣同士にし、いつもは別々で摂る食事も、今晚ばかりは一緒だ。さすがに夜酒は振る舞われず、クロが自らお茶を淹れてくれた。

「休めと言われても、休めそうにないね」

「あなたは休みなさい。怪我は完全に癒えたわけではないのよ」

「おれはだいじょうぶ」

クロだけでも休ませようと思ったのだが、シャナがそうであるように、クロも着替えない。剣も腰に帯びたまま、気配を探るよう  
に空気を張りつめている。

「……おれがここに来たせいで、デイランと争うことになってしまったね」

「まだ言うの？ 遅かれ早かれ、デイランとは問題が起きていたわ。あなたも知っているでしょう？ 銀山のことだけではないのよ、デイランとの微妙な関係は」

主な問題はデイランが所有する銀山ではあるものの、だからといってそれだけで戦争に発展するわけもない。デイランとの関係は、少しずつ、崩れ始めていたのだ。

「とりあえず賢王、なんだよね？」

「ええ」

「女性関係のことで、他国を巻き込むような事態に発展するかな？」

「どうかしら……けれど、少なからず関係はあるでしょうね。賢王とはいえ、私生活が充実していなければ、いつか心は壊れるわ」

「ああ……なるほどね。それであの王子か……王子がああなったのは、デイランの国王の存在が、とても大きかったせいかもしれないな」

「そうね……」

カルトにとって、国王の存在は、確かに大きかっただろう。かけられる期待も、半端ではなかっただろう。だが、だからといって、同情はできない。王族とは、そういう世界に在る象徴なのだ。乗り越えねばならない。シャナが、そうして立っているように。クロが、強くあるうとしてるように。

「どう出るかな」

「將軍たちと話したように、最初の矢は射られたのだから、おそろしくこちらの手は伝わったでしょう。こちらが持つ力も知られたわね」

「う……本当にごめんなさい」

「挑発に乗ったこと？ もう過ぎたことよ。それに、あなたが悉く矢を斬り落としたことで、デイランは踏み止まったわ」

「少しは役に立てた？」

「ええ。あなたの実力も、知ることができたわ。本当に武闘派だったのね」

北方將軍や西方將軍とも話したが、クロの剣捌きは目を瞠るものがある。試しに打ち合ってみませんか、と北方將軍に誘われて数分だけ剣を交わしたクロは、無理なく相手をし、北方將軍だけでなく西方將軍を驚かせた。クロの実力は、大隊の隊長を凌ぐほどであるらしい。今度皆に指導して欲しい、と頼まれてもいた。

「まあ大体のことは、ノエに教えてもらったからね。そもそもおれ、体力がまず続かないから、相手の武器や動きを見ることが、その頃合いの測り方とか、そういう最小限の体力で済むように訓練したんだ。武闘派だけれど、長くはもたない。ごめんね」

「それでいいわ。無理はして欲しくないもの」

クロが気配なく動けるのは、そういった訓練の賜であるようだ。そういうことなら、気配なく動くことが当然となっても、仕方ない。

「ねえクロ、本当に、休んでちょうだい？ だいじょうぶ、なにかあればすぐに起こすから」

「そう言われても……シャナは、休まないだろ？ おれだけ休むなんていやだ」

「……頑固だわ」

「シャナも一緒に休んでくれるなら、いいよ？」

「そういう我儘はちょっと……」

「なら……シャナが膝を貸してくれるなら、休む」

「え？」

休まない、と頑固だったクロは、椅子を離れるとシャナの隣にき



て、シヤナの膝を枕にして寝転がった。

「クロ！」

「おれが少し休んだら、次はシヤナの番だよ」

そう言つて、瞼を閉じてしまふ。

緊張感がないといえば嘘になるが、それにしてもこの状況でシヤナの膝を枕にするとはいい度胸だ。

シヤナは苦笑すると、肩の力を抜いた。

「わたしにも膝を貸してくれるの？」

「もちろん」

自分が休んだら次はシヤナだ、と言つたクロは、シヤナにも自分と同じことをさせるつもりらしい。少しすると、寝息が聞こえてきた。寝つきはいいらしい。

「まったく……あなたはわたしをよく振り回すわね」

甘えられるのは素直に嬉しい。そう思っている己れに、やはりわたしはクロに好意を寄せているのだと、つくづく思う。もう、否定はできない。

「クロ……」

あなたがわたしを好きだと言う。そのつもりはなかったのに、気づいたらそうなつていたと言う。予想外なことだったと、言う。シヤナにも予想外だ。

「あなたを想う日が、くるなんて……」

もう二度とないと、思っていた恋。

もう誰も、家族以外は愛さないと、思っていた心。

頑なに決めていた気持ちは、いともあっさり、クロによって壊された。

なんて単純だろう。

愛されると、嬉しくてたまらないなんて。

なんて滑稽な決意だろう。

歳下の婿に、簡単に決意を覆されて。

クロだったから、そうなのか。それとも、自分は誰でもいいから、愛されたかったのか。

どちらにせよ、愛し愛されることの、喜びを知ってしまった。

もう戻れない。

なかつたことにはできない。

否定できない。

それは、気紛れな精霊との契約をした時点で、わかっていたことだけれども。

「わたしも歳ね……」

寂しさには勝てない。

喜びには勝てない。

なににも、勝ることはない感情が、シャナの中で息を吹き返した。

「ヴィアンナ……」

それはかつて愛した人の、名。

思い出したのは随分と久しぶりのことだ。

忘れるほど遠い昔ではなかつたと思うのだけれども、忘れるほどには、記憶に留めていられなかつたことだ。

今ここで思い出すなんて、なぜだろう。

「なぜかしら……」

そうため息をついたとき、眠っていたはずのクロの瞳が、開けられていて。

夕焼け色の瞳が、ただ真っ直ぐとシヤナを見つめていて。

それはダレ。

と、音もなく唇が動いた。

そのときだった。

「殿下。殿下、起きておられますか」

扉が叩かれ、その少し慌てたような声に、シヤナは反射的に返事をしていた。

「起きているわ。入りなさい」

中に入ることを許可すると、扉が開かれる前に、目覚めていたクロが身体を起こしてシヤナから少し離れた。

「夜分遅くに失礼いたします、王女殿下」

「なにか動きがあったのね？」

「は。竜旗が、こちらに向かっております」

「早いわね……最期の食事、というつもりだったのかしら」

「北方、及び西方の将軍は、階下で指示をお待ちです」

「今行くわ」

やはり戦は免れず、血が流れる事態へと、発展するらしい。動き

が早いことから、闇に乗じるといふよりも、最期の一時を過ごすまで待っていただけかもしれない。

「クロ、聞いた通りよ。ノエが来るまで、籠城戦になるわ」

椅子を立ってクロを振り返る。クロの双眸は、ただまっすぐ、シヤナを見ていた。

「……おれが出るよ」

「だめよ。あなたは、まだだめ」

「いや、出る」

「……クロ？」

深呼吸して立ちあがったクロは、なぜか、その双眸を細めた。

「腹が立ったから、八つ当たりしないと治まらない」

「……八つ当たり？」

いきなりどうしたのか、クロは怒っているようだった。いったいなにに腹を立てているのか、シヤナにはさっぱりだ。

しかし、シヤナが首を傾げると、どんっと、唐突にクロの雰囲気 が重くなった。

「エリオン、北方將軍に伝える。おれが出る」

「は……え、クロネイ殿下？」

「指示に従え」

「！ ぎよ、御意」

静かな怒気だった。エリオンを走らせると、呆気に取られているシヤナの横を通り過ぎ、部屋を出て行くこうとする。

「クロ！」

待ちなさい、と声をかけたが、クロは聞く耳を持たない。仕方なくシヤナは、クロの静かな背を追った。

「クロ、待ちなさい。あなたはだめよ。王陛下も言ったでしょう？無理をしない程度に、と」

「面白くないって意味、身に染みた」

「は……、え？ なんのこと？」

「ほんと、面白くない」

ぶず、とした声しか返ってこない。シヤナの歩幅をまったく無視して、クロはずんずんと前へ進んでしまふ。追いかけるシヤナは小走りになった。けつきよくその追い駆けっこは階下まで続き、シヤナが止める間もなくクロは北方將軍と西方將軍に指示を出し、ふたりを勝手に動かした。

「クロ！」

「シヤナ。悪いけど、おれは機嫌が悪くなった。ちょっと憂さ晴らししてくるから、部屋で待機しててくれる？」

「意味がわからないわ。なにがどうして、あなたは怒っているの？」

「面白くないから」

「なにが面白くないのよ」

自ら機嫌が悪いと宣言までしたクロは、漸くそこでシヤナを振り返った。感情のすべてが削げ落ちた、無表情のクロがいる。少しだけ、ほんの僅かだけ、怖いと思った。

「ヴィアンナって誰」

「……、え？」

「シヤナのなに」

「……なにを言っているの？」

「面白くない」

クロがなにを面白くないと言っているのか、わからなかった。けれども、まさか、とちらりと思うことがある。それはシヤナにも身に覚えがある、面白くない、である。

やはり後宮が人で溢れることは、今後も考える必要がないかもしれない。

「なにに腹を立てているのかと思えば……ちょっと名前を出しただけで」

「うん、面白くない」

なぜだろう、ノエの言葉が蘇った。

『あいつ、わりと素直なんで』

ノエが言った通り、クロの反応はわりと素直だ。

「そういうことだから、動けるうちに、憂さ晴らししてくる」

「待ちなさい。理由が不純だわ。やめなさい」

「いやだ」

「クロ」

「おれは心が狭いんだ」

「……そのようね」

呆れるほど、クロの想いは純粹だ。ため息をつきたいところだが、ここは正直に、シヤナは苦笑した。

嬉しいからだ。

「ヴィアンナは従兄よ。もう、いないわ」

「……、え？」

「死んだの。わたしが、十歳を迎えた冬に」

忘れようとし、その記憶も留めていられなくて、今日まで名前も口にできなかった、愛した人。

まさか、幼い頃にした恋を、クロに話して聞かせる日がくるとは、思わなかった。

「……ごめん。でも、やっぱり面白くない」

しょぼん、と肩を落としたクロは、しかし頬が少し膨らんでいる。シヤナの口から自分以外の男の名を、それも知らない名を聞いて、随分と腹が立つたらしい。

「わたしも今まで忘れていたの。けれど、ふと思い出してしまったのね……あなたがいるから」

「……おれ？」

「あとでちゃんと聞かせてあげる。嘘は言わないわ。だから、今は出て行かないで」

「本当に、教えてくれる？ いろいろと……ヴィアンナのこととか、おれがいたからとか」

「ええ」

「気分が悪くなる話しなら聞かないけど」

「いいわ。だいじょうぶ。もう思い出として、昇華させているから……なら、絶対だよ？」

「ええ、約束するわ」

思い出したのだし、クロが知ってしまったのだから、話そう。べつに、隠そうとしていたわけでもない。本当に、今の今まで忘れて

いたのだ。忘れることができていたのだ。むしろ、だからこそ、ク  
ロには話さなければならぬだろう。昔愛した人のことを、今こう  
して思い出したのには、きつとなにか理由があるのだ。

「わかった。けれど……おれは、出るよ」

「クロ」

「八つ当たりしないと、どうしたらいいかわからない。初めてなん  
だ。ちよつと見逃してよ」

どうしても苛立ちを抑えられない、とクロが困ったように眉をひ  
そめる。それは無表情だったクロに漸く感情をもたらし、シヤナを  
ほつとさせる。

「……それなら条件があるわ」

「なに？」

「一時間よ。無傷で、帰ってきなさい」

落ち着くための時間をあげよう。ただし、怪我は許さない。その  
条件の下、シヤナはクロを前線へと許可する。

「それから、わたしは監守台にいるわ。あなたが見えるところに。  
あなたからも見えるところに。いいわね？」

「む……ちよつとやだけど、わかった」

条件を渋々ながらも飲んだクロに微笑んで、シヤナは「では行き  
ましょう」と、クロと並んで外へ出た。





シャナが監守台に到達したとき、下のほうでは睨み合いが続いていたが、クロが現われるとやはりとたんに矢が投擲された。いきなりすることにひやりとしたが、クロは相変わらず難なく矢を剣で弾いてしまう。数回それが繰り返されると、竜旗を掲げたデイランの兵が一斉に動き出した。

ここから籠城戦へ持ち込まなければならぬ。或いは、ノエの到着まで城門を死守しなければならぬ。

予め講じていた策に従って、セムコンシャス側も動き出した。ただし、折角の策を練り直さなければならぬ事態は、やはり発生する。

「！ クロ、下がらなさい！」

ひとり飛び出していったクロだ。勝手に北方將軍と西方將軍を動かしたくらいなので、もはやクロの頭には戦略などない。シャナが声を張り上げて制止するも、その声はまったく届かなかつた。

「クロの援護をするよう伝えなさい！」

こうなつてはクロを中心とした戦略を練らなければならぬ。もちろん、クロが勝手に動く可能性は考えていたので、まったく策がないわけではない。だが、それはクロを切り札として考えていた策だ。初手からそれを出さなければならぬなど、やはり一時間とい

う制限を設けたのは失敗だ。早くもシヤナは焦ってしまう。

しかし。

ひとり、飛び出していったクロは、シヤナの目にもわかるほど、優れた力量を持っていた。

「……殿下、これは」

「ええ……クロは強いわ」

矢は常にクロを狙い、兵もクロを狙いを定めて攻撃している。たくさんの殺意が向けられたクロは、だが一つずつ確実に、最小限の動きだけでそれらを切り崩していく。

「怪我はまだ完治されておられないのでは？」

「出る前に鎮痛剤を服用したわ。それが効いているとは思うけれど……フィル、クロは長くもたないわ。できるだけ早くデイランを攪乱するよう伝えて」

「御意」

視線はクロから外さず、シヤナは報告を聞いては指示を出し、指示を出しては報告を聞く。

あつというまに、城門前は戦火に包まれていった。だがクロの働きは、早くもセムコンシヤス側を優位にさせていき、デイランの兵力を削っていく。道端で拾った矢をデイラン側の射手に投擲し、ひとりずつ戦闘不能にさせてしまうと、戦況はさらに変わった。

「殿下、竜旗が！」

最終的には籠城戦へと持ち込むはずであったのだが、その必要が

なくなった。まさかこの展開が広げられるとは、さすがのシャナも予想外なことだ。武力で勝るなど、微妙なところだったのだ。それがどうだろう。

クロひとりの働きでセムコンシャス側の士気が高められ、逆にデイルンの士気が下がった効果だろうか。

「竜旗が引いていく……」

意地でも喰いついてくるかと思われたのが、意外にもあっさりとデイルンの竜旗が後退していく。同じだけクロは距離を詰めていたが、約束の時間が近いせいか、引き始めたデイルンを追いかけるような真似はしなかった。

そして驚いたことに、クロは戦場の中にあって、誰ひとり殺していなかった。クロの周りに倒れた兵は皆、腕や足を斬られ動きを封じられているだけだ。もちろん彼らの武器は、クロによって悉く破壊されている。

「クロ！ 時間よ！」

クロの歩みが完全に止まったところで、シャナは大声でクロを呼ぶ。

たった一時間だ。

一時間、クロに時間を与えただけだ。

「殿下……われわれは、勝利したと、そう思ってよろしいのでしょうか」

正直、シャナはこの状況を疑っていた。クロに僅かな時間を与えただけなのに、その時間内で、決着がっこうとしている。

果たしてこれは、本当にクロの力量によるものだろうか。いや、確かにクロの力は大きく貢献している。

「……だめよ。油断しないで。クロを早く城内に連れてきなさい」  
「御意」

このままデイランが引き下がるようなら、それでいい。そうであつて欲しい。

「その判断は正しいね。後ろの兵力を考えるなら、クロは戻して休ませたほうがいい」

ふと唐突に、そんな声が背後から聞こえて。

驚いて振り向くと、そこには銀髪の青年がひとり、軽く武装した姿で立っていた。

「まあ、もはやクロネイの出番は、ないだろうがな」

さらにもう一つ、横から声が聞こえた。こちらにも軽く武装した金髪の青年が、戦場を眺めながら立っている。

「あなた方は……」

シヤナは瞠目した。どちらの青年にも見覚えはないが、彼らが身にまとうものには、憶えがある。

「突然の出現で驚かせたね。わたしはネフィス・エバン・ティファ・トワイライ。トワイライ帝国で、皇太子などという職についている、しかし紛れもないクロの兄だ」

にこりと笑ったのは、クロと同じ銀髪に夕焼け色の双眸を宿した、シャナの真正面に立つ青年。

「そしてその彼は、わが国の客人だが暇そうなので連れてきた。まあ気にしないでくれ。今はただの暇人だからね」

シャナの側面に立つ、金髪に碧眼の青年は、表情もなくなただちらりとシャナを見やっただけで、笑いもしない。

「初めましてだね、シャルナユグ王女殿下？」

改めて声をかけられると、ハッと慌ててシャナは礼を取った。クロの兄上さま、しかもトワイライの皇太子だ。

「し……っ、失礼いたしました、皇太子殿下。まさかこのような場所でお逢いすることになるとは」

「いやちよつと気になってね？ クロが一目惚れしたと聞いて面白そうで、ついつい出しゃばって……ああ、わたしのことはネフィスと呼んでくれ。そんなに畏まらなくていい。今は状況が状況だからね」

「申し訳ありません」

「謝らなくていい。こちらこそ、遅れてしまつてすまないね」

いいから頭を上げろ、と促してくるトワイライ帝国皇太子ネフィスに、シャナは躊躇いながらも姿勢を戻した。

「遅くなつたが、助力にきた」

そうネフィスが言う。

「まあクロがほとんど潰したみたいだから、あとは後ろの兵をわたしが片づけるだけになったがね。間に合ってよかったよ」

それは、本当の意味で、セムコンシャスが勝利したことになる言葉だった。

「トワイライに向けての開戦宣言だったのに……迷惑をかけてしまったね」

「いいえ、そのようなことはありません。確かにデイランの狙いはクロ……クロネイ皇子でした。ですが、それは口実でもあったと思います。セムコンシャスは、デイランと微妙な関係にありましたから」

「そうだね……けれど、ノルイエから聞いたところによれば、クロが最初に挑発したそうだね？ 愚弟がすまない。ちよつときつめに言っておこう。なに、あれはそう簡単に死にやしないから」

ははは、と軽い調子で笑ったネフィスは、羽織っていた外套を大きく捌き、シャナの隣に並んで鎮まりつつある戦場を見下ろした。

「サリヴァン、きみはこの状況をどう見るかね」

と、ネフィスが声をかけたのは、同じく戦場を見下ろしている金髪の青年だ。

「おれを当てにするな。いきなり連れてきておいて、状況もなにもさっぱり意味がわからない」

「見たままを述べてくれてけっこうだよ」

「……なら言わせてもらうが、なぜ戦争など起こした」

碧い双眸が、ぎらりと底光りし、ネフィスだけでなくシャナをも





「あの国は、クロを殴ったのよ……っ」

その傷は今も癒えていない。

「わたしの大切な人を……っ……わたしのクロを、あの国は殺そうとしていたのよ！」

奪わせやしない。失うのはいやだ。だからノエと契約し、苦しみから解放されない選択をさせた。

後悔はない。

「わたしからクロを奪わないで！」

身から迸る想いを叫んだ、そのときだった。

「シヤナあー！」

クロの大きな声を聞いて、耳慣れない音がシヤナの肩を貫いた。

「え……っ？」

痛いというより、熱いという感覚が、肩を襲う。立っていられなくて、身体が傾いだ。

「銃声だっ？ どこからだ！」

「聖国の武器がなぜここにある！ どういうことだ、サリヴァン！」  
「おれが知るか！ くそ……っ……ラク！ ラク、狙撃手を生け捕りにしろ！」

ネフィスと金髪の青年の怒声が、頭上で練り広げられる。シャナの倒れた身体を、ネフィスが咄嗟に抱きとめてくれていた。

「シャルナユグ王女、だいじょうぶ、銃弾は肩を掠めたただけだ。命には関わらない。だいじょうぶ」

「い……ったい、なに、が……？」

「あなたは撃たれた。けれどご安心を。その武器の発明国の国主が、ここにいるからね」

ネフィスはそう言うと、すぐに衛生兵を呼び、医師の手配をする。シャナは肩口のひどい熱に顔をしかめながら、撃たれたという言葉の意味を考えるも、しかしさっぱりわからない。

撃たれたとは、わたしのことだろうか。

だいじょうぶとは、この肩の熱のことだろうか。

発明国の国主、それは金髪碧眼の青年のことだろうか。

まとまらない考えを熱に耐えながら整理しようとしていると、ふとその視界が陰った。

「シャナ！」

「……クロ」

シャナが考えごとをしている間に、場所が少し移動されていた。

シャナは真っ白な敷物の上に寝かせられ、医師によって熱い肩の治療がなされている。そのシャナに覆い被さるようにして、涙目のクロがいた。ぽとり、とクロの涙が頬に落ちてくる。

「シャナ、シャナ……っ」

「クロ……？」

泣いている。クロが、涙を流して泣いている。いつかも見た。それはシャナが泣かせたからだ。また泣いている。

クロを泣かせるのは、いつもシャナだ。

「い、痛くない、だいじょうぶ、おれが、おれが治してあげる、だいじょうぶだから」

「……クロ、だいじょうぶよ」

痛いというよりも熱い肩は、もうその感覚も遠い。意識もすっかりとしているから、問題はない。ただ、なぜ自分が治療されるほどの怪我をしているのか、シャナにはまったくわからなかった。

つかの間、意識を手放していたシャナは、しかし温かい手のひらを感じて目を開ける。肩は、熱を感じるのではなく、引き攣るような痛みを持っていた。

「……っ」

「シャナ！ ああ、吃驚した……目を覚まさないかと」

「……わたし」

「うん、撃たれた。狙撃手を今探してる。もうだいじょうぶだよ。痛いと思うけど、だいじょうぶだから」

温かい手のひらは、クロのものだった。シャナを腕に抱き、その目に未だ涙をためながら、シャナの様子にほっと安堵している。

「撃たれたって、なに？ なにがあったの？」

「聖国の最新兵器に、銃、という遠距離攻撃型の武器があるんだ。小さな鉛玉を火薬で発射する武器。大砲は知ってる？ その小型版。原理は同じ。けど、すぐに壊れてしまうから、聖国から持ち出すことが難しい武器だ」

「……それに、わたしが？」

「デイランの誰かが、わざわざ聖国にまで行って、手に入れたんだ。それでシャナを……」

悔しそうに、クロの顔が歪む。

「ごめん、ごめんシヤナ……おれが、いたのに」

「……あなたのせいなの？」

「おれは銃の存在を知ってる。デイランが所持していたとは、知らなかったけど……でも、そういう武器があるって、知ってたんだ。なのに、ここにはないと、油断して……っ」

クロの油断が、シヤナのこの怪我なら、シヤナも同じだ。油断していたのだ、勝利したと。気を抜かないようにしていたのに、ネフイスの登場で勝利を確信したシヤナは、周囲の警戒を怠った。

この怪我は、クロのせいではない。

「あなたが無事なら、それでいいわ」

シヤナは痛みを耐えながら身を起こし、クロの胸に手をつくると微笑んだ。

「あなたが、銃という武器の的になっていなくて、よかったわ」

クロの言う通り、銃というものがそういう武器なら、シヤナよりもクロのほうが危険は大きかった。まるで切り札かなにかのように銃がシヤナを狙ったのは、その銃をもってしてもクロを狙えなかった理由があるだろう。たとえばそう、クロの剣の腕だ。なにを見ることもなく投擲された矢を切り落とすことができるクロなら、きつと銃の鉛玉も避けられる。デイランは、だから標的をシヤナに切り替えたのだ。敗戦確実だった、その意趣返しに。

「シヤナ……ごめん、ごめんね、痛かったよね、痛いよね」

「もうだいじょうぶよ」

「ごめん、シヤナ」

クロに深く抱き込まれて、互いに無事であることを漸くシャナは確認する。

しばらくそうして互いの体温を感じていると、ふたたび目の前が陰った。クロの肩口から顔を上げれば、そこにはノエが立っていた。

「……おかえりなさい、ノエ。そしてありがとう。あなたのおかげで、間に合ったわ」

「おれは姫の命令に従ったままです」

シャナの目線に合わせて屈んだノエは、複雑そうな顔をしていた。どうやら、シャナが怪我をして動揺したのは、クロばかりではなかったらしい。ノエにとっても、契約主たるシャナは、心配になる存在のようだ。

「すみません。姫に怪我なんて、させるつもりなかったんですが」「少し痛むけれど、泣き叫ぶほどではないわ。それに、ここは戦場だったのよ。わたしよりもひどい怪我を負った人は、たくさんいるわ」

「ネフにも同じこと言われましたよ。けど、おれはそうだったんです。かつこよく帰ってきたかったんですよ」

気分は騎士だから、と口を尖らせた精霊は、シャナにしがみついているクロをついでのように撫でまわし、そうして立ちあがった。

「ネフ、狙撃手は？」

気づかなかったが、ここはまだ城門の監守台で、シャナが意識を手放したのは本当に一瞬であつたらしい。近くにはまだ医師も控えていて、ネフィスと金髪の青年もまだ城下を見下ろしている。

「サリヴァンのところの騎士が、捕まえてくれる。こちらも、後ろに控えていたデイラン兵は捕縛した」

「狙撃手は王子か？」

「そのようだ。手間取っているね、サリヴァン？」

ネフィスの刺すような視線に、金髪の青年は睨み返す。うるさい、と低く声を出すと、その双眸は再び城下に移された。

「このところ、あちこちで聖国の武器を見かける。数は少ないが…  
…いったいどういうことだ」

「きみの目があっても、行き届かない場所はある。そういう穴を、彼らは見つける。まあ、きみばかりの責任ではない。これを期に、自国の状態を見直すといいよ」

「それはあなたにも言えることだ。自国に開戦宣言をされていながら、同盟国がこの状態だ」

「痛いこと言うねえ…さて、王女が目を覚ました。これからの話をしようか」

金髪の青年と話していたネフィスが振り向き、苦笑にも似た笑みを浮かべる。

「申し訳なかった。と、その言葉だけでは謝罪にならないか…セムコンシヤスを戦場にしてしまったのだからね」

改めて謝罪されたが、シヤナがなにか言葉を返す前に、クロがシヤナから離れてネフィスを睨んだ。

「なぜデイランを放置していたのですか、ネフ」

「けしかけたのはおまえだろう、クロ」

「シヤナに無礼な態度を取ったからです！」

「だからといって、祖国を売るような発言は、控えるべきだと思わないか？」

「売るなど……！」

「だからデイルンは攻めてきたのだろうが」

ネフィスがクロを睨み、その威勢を挫く。

「自分の立場がわかっていないようだね、クロ。おまえはなにもしなくていいと、わたしは常から言っていたはずだが。父上も、母上も、昔からそう言っていたと思うが」

「おれ、は……今は、シヤナの、夫、で」

「おまえのせいで父上の計画は台無しだよ」

ネフィスの言葉は、シヤナの耳にもひどくきつく聞こえる。きつめに言っておこうとかなんとか言っていたが、これは本当にきつい。

「だいたいにして、その失態はなんだ？ 前線へ立ったわりには、デイルンの王子を捕らえてもいない。おまえは、どうやって責任を取るつもりでいたのかな？」

「おれは……」

言葉に怯え、相手の威圧に挫けているクロなど、初めて見る。あの飄々とした態度もない。

シヤナは改めてネフィスを見やった。

クロの兄上さまは、クロが黙っていればそうであるように、ひどく玲瓏だ。その中身も、クロとは違い、容姿に見合った性格なのだろう。



ネフィスの言葉も、クロの想いも、どちらも理解できるシャナには、そのときなにか言うことはできなかった。クロの味方をすることも、ネフィスの言葉に反論することも、どちらも選べなかった。

けれども。

「なぜ、クロに自由意志が与えられないのですか」

「……王女？」

「なぜクロに、なにもしなくていいと、あなたは言ったのですか」

疑問を投げることはできた。

「クロの身を案じてのことですか？　ですがそれなら、理不尽が過ぎるというものです」

「……王女、これは兄弟の……そうだね、喧嘩のようなものだ。無茶をする弟を、わたしは叱っているだけだよ」

たいしたことではない、とネフィスは笑い、そのくせひどく冷めた瞳をする。それがシャナの言葉に対する怒りであるというのは、すぐに知れた。

「狙撃手を捕まえましたよ！……っと、おや？」

どこからかいきなり、侍従が現われた。いや、恰好は侍従だが、腰には剣がある。騎士だろうか。金髪の青年と同じ特徴を持っている。

「ご苦労だった、ラク。今はどこに？」

「すぐ下に連れてきてますけど……駄目でした？」

「いや、いい」

騎士のような侍従は、金髪の青年が連れてきた者らしい。話が終わるとすぐ、金髪の青年がシャナを振り向いた。

「王女、こちらの好きにさせてもらってもいいか」

「……え？」

「王女の怪我は、こちらの責任でもある。始末はこちらでつけたい」

なぜそれを訊いてくるのかわからなかったが、どうやらシャナが肩に負った怪我は、クロやネフィスたちトワイライ帝国にはかり問題が向くわけではないらしかった。

「サリヴァン、それはわたしが。きみはこちらでは客人だよ」

「使用された武器はわが国のものだ」

「だとしても。きみの責任は、見届けることだ。そして経緯を知ることだよ。わたしが行こう。だが……王女、あなたにも来てもらいますよ。狙撃手は、あなたを狙ったのだからね」

ネフィスが動き、そしてさらに言葉を続ける。クロ、とその名を呼んだ。

「責任を取りなさい。わかっているね？」

青褪めたクロは、それでもなお挑むようにネフィスを見やり、立ち上がるとシャナに手を差し伸べてきた。

「ごめんね、シャナ」

なぜ謝るのだろう。

なぜ、謝られているのだろう。

「クロ？」

青褪めているクロの双眸に、涙はない。  
けれども、悲しみがある。

「この戦は、おれに責任がある……ごめんね、シャナ」

「……言ったでしょう。こちらにも、相応のものがあつたと」

まだそんなことを言うのかと、少し腹を立てながら、シャナはクロの手を取って立ち上がる。僅かばかり肩に痛みが走ったが、真っ直ぐ立つことに問題はない。歩くこともできる。

クロが首を左右に振った。

「ネフを怒らせた……だから、ごめん」

シャナが思っていたような「責任」とは違つと、クロは唇を噛んでいた。

「……なにをそんなに謝るの？」

問いに、クロは口を嚙む。

「王女、クロ、おいでなさい。首謀者を捕らえたのだからね」

ネフィスの冷やかな、夕焼け色の双眸。彼は怒っていた。クロに対して、クロのために、怒っているように見えた。

ハツとする。

ネフィスが怒っている。それはクロのためなのだ。クロが無茶をしたからでも、クロがトワイライの意思に反するような発言をしたからでも、なんでもない。

ネフィスは知っている。

クロが、この先長くないことを、知っている。

だからネフィスは怒っている。

なにもしなくていいと、クロから自由意志を奪ったのは、クロの命を知っているからだっただけだ。

クロがネフィスの言葉に怯え、威圧に挫けたのは、自由意志を奪われたからではなく、そうまでして自分を護ろうとしてくれている兄に、何を言えればいいかわからなかったからだだろう。

「……なんて人たちの」

だいじょうぶだろうか、とシャナはため息をつく。するとすぐに、クロが「幸せが逃げる」と慌てた。

「……本当に逃げてしまいそうだわ。いえ、逃げてしまったのね、きつと」

「え、シャナ？」

クロの口を手のひらで塞ぎ、シャナは先を歩き始めたネフィスを呼び止める。

「ネフィス殿下、一つだけ」

「……なにかな？」

「戦はわがセムコンシャスにも責任があると、憶え置きくださいませ」

金髪の青年が言っていたように、戦争を回避するすべは、考えればなかったこともない。迎え撃つと、決めたのはシャナであり、それは国の総意にもある。そのことを忘れて欲しくない。

「……では、わたしは弟の嫁であるきみも、叱らなくてはならないね」

ぞくりと震えがくる。ネフィスは怒らせてはならない人であったらしい。

「あとでゆっくり話をしよう。ノルイエとの契約についても、訊きたいことが山とあるのでね」

「……承知しました」

「では、行こう。指揮官は王女だね？ 王陛下は、王女に一任しているのだったよね？」

「はい。この戦、わたしが総指揮を任せられております」

「なら、いいね」

にこりと不気味に微笑んだネフィスに、シャナはクロとふたり、ふるりと震える。

「あなたの兄上さまは怖いわ」

こっそりと告げると、

「ネフは特別怖いんだよ」

兄弟の誰も、ネフィスには逆らわないという。これならクロが言葉に怯えるのも、威圧に挫けるのもわかる。

「あなた、よくあの兄上さまがいて、国を出られたわね」

「こっそり出てきたに決まってるだろ」

「あら……」

「ネフの怖さは、あれだけじゃないんだから」

ネフィスはものすごく怖い、と恐怖心に負けてクロがシャナの手を握る。怪我を労わるようにクロはシャナの足許に気を配り、そうしてシャナたちは階下へと移動した。

怪我を心配してクロが随分と丁寧に誘導するので、階下へ行くの  
にかなりの時間を費やした。数分で降りられるところを、十数分も  
かけて歩いたので、逆にそちらのほうにシヤナは疲れてしまう。そ  
れをクロに言ったら、抱え上げられそうになつたから慌てた。ふた  
りで揃つて転びたくはない。それも言ったら、寂しそうな背中を向  
けられた。男の矜持を傷つけてしまったらしい。そういうつもりで  
言ったのではなく、純粹に体重を気にしてのことだつたのだが、そ  
れでもクロには矜持に傷がつく言葉であつたようだ。

「おれってそんなに頼りないのか……そこまで貧弱に……いや、貧  
弱だけど……うう、自分で肯定しておいて虚しくなってきた」

「そうだね、おまえはよくわたしやノルイエに抱えられていた」

「余計なことは言わないでください、ネフ！」

「事実だろうが」

「シヤナの前ですよ！ ああシヤナ、違うからね、小さい頃の話だ  
からね」

「最近だとー……」

「ネフ！」

クロにきついことを平気で言うネフィスだが、それなりにクロの  
ことは可愛がつているようで、クロもその愛情はわかっているよう  
だった。仲がいい兄弟というのは、たとえやり取りが物騒でも、見  
ていて微笑ましい。

「あなた方……緊張感はないのか」

「おっと、そうだった。これから甚振らねばならない王子がいたね」

金髪の青年が呆れた眼差しで振り返ったとき、そこはもう、戦争の首謀者たるデイランの王子カルトを捕らえている部屋の前だった。警戒するように扉の前で警備する兵士が、シャナとクロを見つけ、慌てて敬礼する。

「今、所持品を改めているところなので」

完全に改めるまでもう少しだけ待たなければならぬようだが、待つというほどの時間も経たずに、部屋の中から騒々しい声が聞こえてきた。

「なにかあったか？」

騒々しさに金髪の青年が首を傾げ、警備の兵士を促して扉を開けようとした。

その、一瞬。

「！ シャナ！」

いつかのように、クロに大きな声で呼ばれた。

また、と思った。

またわたしなのか、と思った。

耳に聞こえてきたのは、銃という武器が発するという音。とても耳に痛くて、不愉快な音だ。

顔をしかめると、不愉快なその音から護るようにいつのまにかシ



ヤナの前に立ったクロに、両耳を塞がれた。

「だいじょうぶ？」

「……クロ？」

青褪めたクロは、シヤナが怪我をした衝撃の名残が色濃く、ずっと瞳が潤んでいた。吸い込まれそうな夕焼け色の双眸に、けれどもシヤナは、違和感を覚える。

なぜ、わたしの前に立っているの。

「シヤナ、だいじょうぶ？」

再び問ってくるクロに、シヤナも手のひらを伸ばした。

「クロ……なにが」

銃声がした。不愉快な音は、シヤナを狙っていたわけではないようだが、開けられた扉の向こう側からこちらに放たれていた。扉の前には、ネフィスも金髪の青年もいたが、どうやら彼らは無事のようで、銃声の対処をしている。

「耳、痛かったね。おれも、痛かった」

ふと苦笑したクロの、その額に汗を見つけて、シヤナは手を伸ばして拭ってやった。擦ったそうにしたクロは、なんだか嬉しそうに肩を竦め、シヤナの耳から手を放す。そのまま抱きついてきた。

「よかった……」

「え？」

耳元で囁かれた。

病み上がりでよかった、と。

目先のものに急いで走ることができから、と。

「……………クロ？」

「今度は、護れた」

シャナの肩に頭を預け、にこりと笑ったクロから、とたんに力が抜けた。ずるりと滑り落ちていくクロの身体を、シャナは呆然と見詰めてしまう。

どさりと、クロが床に倒れた。

「クロ……………？」

じわりと、床に広がっていく赤いもの。自分の胸元にも、べつたりと赤いものが付着していた。

「クロネイ！」

ノエが、ネフィスが、いきなり倒れたクロに驚き、駆け寄ってくる。

「……………クロ？」

シャナは呆然と、クロの名を呼ぶ。だが、倒れたクロは動かない。赤い水溜りも、止まりを知らず広がり続けていく。

「く、る……………っ」

赤いもの、それは、血だ。

クロが、血を流して、倒れている。

その瞬間、シャナは現実を否定した。

出血のわりに、傷そのものは大したことはない、医師アイルアートは言った。問題は、傷の場所だった。

「心の臓に近く……或いは血管に傷があるやもしれません」

銃の傷を治療するのは初めてで、明確なこととは言えないと、アイルアートは肩を落とした。そのアイルアートを庇うように、なぜか治療に立ち会った金髪の青年が、アイルアートの治療は的確だと言う。

「小型も小型の銃は、それほど威力がない。だが、弾丸が貫通していた。体内に鉛が残っていなければ、傷は剣でつけられたものと同程度だと思っいいい」

銃に詳しいらしい金髪の青年は、そういつてアイルアートを励ましたあと、小型の銃を隠し持っていたデイラン国の王子カルトの尋問に立ち会うと言い、部屋を出て行った。

シヤナは、ただじっと、祈るように俯いていた。

涙はこぼれない。泣きたいとも思っていなかった。泣いても、この状況が変わることはないのだ。

「……姫、ちょっといいですか」

騒ぎ立てることなく沈黙していたシャナに声をかけてきたのは、同じように沈黙を護っていたノエだった。返事をすることなく耳を傾ければ、俯くシャナの視線に合わせるようにノエは膝をつき、椅子に座っているシャナを見上げてくる。

「まだ、おれの声が、聞こえますね」

もちろんだ。さまざまな声が、シャナの耳を通つては、抜けて行く。だからアイルアートの謝罪も、金髪の青年の言葉も、きちんと聞こえていた。ただ返事をする気力がなかったただけだ。

「……姫、泣いてください」

ぼんやりとノエを見つめたシャナだったが、ノエのその言葉に、ぴくりと眉を震わせる。

「あなたが泣かないと、なにも始まらない」

ゆるりと、シャナは首を傾げる。

なぜ自分が泣く必要があるのか、それでなにが始まるというのか、わからなかった。

「なんのために、あなたはおれと、契約したんですか」

そつと静かに、ただ穏やかに、ノエは問ってくる。

「いったい、なんのためですか」

責めるふうでもない、そつとした問いに、シャナは拳を震わせた。

「……くる、が」

「クロが、なんですか」

「くるが……ひつようなの」

全身を包む強張りが、声を出すのに必要以上の力を欲する。発せられた声は、情けなくも引き攣っていた。

「ほしい、の……わたしを、ひつようとしてくれる、くる、が」

思い返せば、たかだか数十日間のところ、シャナの心はクロのことではいっぱい満たされた。するりと入り込んできたクロという存在を、拒絶しようにも拒絶できなくて、そして受け入れた。その気持ちは徐々に膨れ上がり、愛されることに喜びを見出し、気づけば戻ることもできない場所まで来てしまっていた。クロに振り回されるその日々を、いとしく思うように、なってしまっていた。

だから、ノエと契約した。

努力で得られた恩寵を差し出すことに、躊躇いもなかった。

「すぎ、って……っ」

引き攣った咽喉に、懐かしいような感覚がする。じわじわと昇ってくるそれに、けれども矜持が立ちはだかつて、シャナは息を詰めた。

泣いても始まらない。

泣いても、クロの怪我がなかったことには、ならない。

「……姫、いいんですよ」

見上げてくるノエが、ただ真っ直ぐ、シヤナの双眸にその姿を映す。

「あなたは、泣いていいんです」

微苦笑したノエには、シヤナのちっぽけな矜持など、無駄だと思ふものなのだろう。だが、それでも、シヤナが唯一クロに対して卑屈に思ってしまうそれを、簡単に手放すことはできない。

ぐっと唇を噛み、シヤナは深く俯く。

くつと、ノエが咽喉を鳴らして笑った気配がした。

「頑固だなあ……クロは、思いつきり泣いて、ネフに切れられたつてのに」

それは、とシヤナは城門でのやり取りを思い出す。シヤナが肩に受けた怪我のことだろう。瞳が潤んでいたが、やはりあのとき、シヤナが少し意識を手放していた間、クロは泣いていたのかもしれない。

ちっぽけな矜持、もはや意地でもあるそれに拘って、涙を流さない自分は、薄情だと思われるだろうか。

「いや、でも、それが姫の本来あるべき姿なんだろうけどな。クロは、あいつはただ甘やかされて、皇子の教育なんてほとんどされてなかったから、我儘だ」

くつくつと笑いながら、ノエは立ち上がったのか、シヤナの頭上に影を作った。

「姫、おれはクロと約束がある。セイエンに、クロと約束したことは死んでも護れと言われた。だからおれは、クロとの約束を優先さ

せるぞ」

それまでシャナを敬っていた口調は消え、気紛れな精霊がそこにはいた。

ふと顔を上げれば、ニツと笑う精霊がいる。

「……の、え？」

「あなたはクロに世界を見せる。おれが、そうさせる。そのためにおれはあなたと契約した。だがまだ契約は完全じゃない」

「なにを……」

「血だ」

「え？」

「クロが流した分の血を、あなたからもらう。それで契約は完全なものとなる。まあ、多少強引な方法だが、おれから持ちかけた契約だからな。融通はきく」

ノエはシャナに手を伸ばすと、握りしめていたシャナの手のひらをやんわりと解いた。

ノエの言葉を理解できずにいたシャナだったが、考えようとする暇もなく、急激に視界が歪んだ。それがなんのかもわからずに、傾いだ身体が椅子から落ちそうになる。

「王女殿下！」

部屋に残っていた医師アイルアートが、焦ったように大きな声を出した。シャナはその声を聞いていたけれども、返事をすることはできなかった。

床に落ちた身体が、叩きつけられる前に、ノエによって助けられる。



「……のえ、なに……を」

「血は、水の部類に入る。操るなんて造作もない。おれは、水の精霊なんでね」

なんだか恐ろしいことを言われている。そう思ったが、急な眩暈は治まる気配がなく、シャナは耐えきれず瞼を閉じ、ノエに身を任せた。

「ノルイエどの、殿下にいつたいなにを！」

「姫が」

「は……っ?」

「泣かないから、強硬手段に出た。泣きたくても泣けないんだから、仕方がない、おれが折れた。それだけだ」

「……、殿下になにをしたのです」

アイルアートとノエが、なにか会話をしている。それを聞きとることはできるのに、身体が動かない。少しすると思考する力まで遠ざかっていき、シャナは、気づくと意識を手放していた。

シャナの初恋は、七つになったばかりの頃だった。相手は母方の従兄、ヴィアンナ・セナ・カフマ、その当時十八歳の美丈夫である。なぜヴィアンナに恋したのか、はつきりとした理由はない。ただ、ずっと一緒にいられる人であり、シャナはヴィアンナを夫に迎えるのだと、漠然とだが思っていた。もちろんヴィアンナの優しさや逞しさ、シャナに向ける温かな微笑みには憧憬にも似た感情を抱いていたし、そういうところが好きだったのだから、けつきよくのころ全体的にヴィアンナに恋していたと言えるだろう。

ヴィアンナは好意を寄せるシャナを邪険に扱うことはなかった。ヴィアンナ自身も、シャナの夫になるのだろうという漠然とした思いがあったのだろう。どんなに忙しいときでもシャナのところへやって来て、他愛もない会話をしては笑う人だった。

「とてもやんちゃな人だったわ。運動神経があまりよろしくないのに、木登りをして見せて、足を踏み外して木から落ちて。騎士と試合をしては必ず負けて、悔しがるところか大きく笑って…… かつこいいところなんて一つもなかったわね。極めつけはあれね、剣を鞘から抜こうとして、丸ごと手から離して陛下の顔面に直撃させたことかしら。鞘が抜けなかったから惨事にはならなかったけれど、ひどく怒られていたわ」

ヴィアンナのことを思い出せば、言葉になるものがたくさんある。シャナにとってヴィアンナは兄であり、家族であり、とても大切な

人だった。

「好き、というよりも……そうね、お兄さまだったから、ずっとお兄さまでいて欲しくて、夫婦にはなりたくないと思っていたわ。兄妹であれば、ずっと一緒にいられると思っていたの」

恋には、恋だったと思う。それでも、恋にしたくなかった思いもある。一緒にいられば、それでよかった。

けれども。

あの日。

ヴィアンナは死んだ。

シャナが十歳を迎えた冬、ヴィアンナは二十一歳だった。

「運動はてんで駄目な人だったけれど、とても賢い人だったの。だから、毎年僅かに数字が合わない財政について、陛下の勅命を受けて調査していたわ。それで明らかになったのが、デイラン国と密約を交わしていた高官……ヴィアンナはその高官の罪を暴いた。公の場で糾弾された高官は、開き直ったうえに逆上し、陛下に襲いかかったわ。ヴィアンナはそれを庇って、死んだのよ」

あの日は珍しく、ヴィアンナは帯剣していた。使うことがなければいいけど、と言いながら、シャナにその勇士を見せていた。行ってくるよ、と笑ったヴィアンナを見送った記憶が、鮮明に蘇ってくるほど、その日のヴィアンナはシャナにとってとても遅しく映った。

「最期まで、剣を抜かなかったらしいわ……なんというか、ヴィアンナらしい姿ね。剣を抜く、その意味を、彼はよくわかっていたと思うの」

犯した罪への贖いを、ヴィアンナは求め続けた。その正義が、結果、ヴィアンナを死に至らしめたと言えるだろう。確かにヴィアンナは剣が得意ではなかったかもしれない、けれども、それは剣が人の命を奪うこともあるのだと知っていたからだ、シヤナは思う。

ヴィアンナは、人が人と争う世界を、嫌っていた。戦争を否定していた。いつでも、言葉を交わし合えば相互理解できると、言っていた。

「わたしは、駄目ね……あなたが傷つけられて、黙ってなんていらなかったのだから」

ヴィアンナはシヤナとは違う。シヤナは戦争を受け入れた。たくさん命が犠牲になると知りながら、その衝動を、抑えられなかった。

今も、その衝動は、漸く抑えているような状態だ。

「ねえ、ぜんぶ、話したわよ。ヴィアンナのことが、知りたいって……言ったのは、あなたでしょう？」

握った手のひらは、仄かに温かい。僅かな赤味が戻った頬は、それでもまだ白い。いつも微笑んでいる口許は緩く閉じられ、軟らかく細められる双眸は今きつく閉じられている。

「お願い、クロ……起きて」

シヤナを庇って銃弾を身に受けたクロは、あれからずっと眠り続けている。ヴィアンナのことが知りたいと言っていたから、だから聞かせたのに、それでもクロは目覚める気配がない。

わたしはまた、大切な人を失うのだろうか。

あの日、あのとき、ヴィアンナの冷たい姿を前に無力さを思ったように、またあの思いを、抱くことになるのだろうか。

ヴィアンナを失ったシャナは、今度こそ大切な人を護れるようにと、戦争を受け入れたはずだ。この手で大切な人を護りたくて、あのときのようにはなりたくなくて、それで、戦争を受け入れたはずだった。

「けっきょくわたしは、大切な人を、護れないの……？」

戦争しようがしまいが、どちらにせよ、大切な人を護れない。それならいったいどうすれば、シャナは、大切な人を護れるというのだろうか。

「王女殿下、よろしいでしょうか。陛下がお呼びです」

補佐官フィルの声に、シャナは振り向く。

戦争が起きたからと言って、日々の執務を怠るわけにはいかない。むしろそのあとだからこそ、より多く増えた執務を疎かにはできない。休むことなく働いてくれるフィルに、シャナは小さく頷いた。

「クロのそばに、誰か」

「承知しております」

「ありがとうございます」

クロが目覚めないからといって、心配だからそばに居続ける、などということは王女たるシャナにはできない。

ノエが言っていた。クロだって、それは望まないだろうと。クロは、シャナの働く姿に、惚れたのだからと。泣くだけ泣いたら、あとは、この精霊を信じても、任せてもいいだろうと。

この契約がある限りクロは死なない、ノエはそう言ったのだ。

「……ノエ」

今は姿を見せることもできない状態にある精霊に、シャナは声をかける。

「早く、わたしにクロを返して」

シャナはそつとクロの頬を撫でると、部屋をあとにした。

いつまでそうしている気だ、どこからかノエの声が聞こえてきた。クロはその声に、笑って返す。

「帰りたくても帰れないんだ。どうすればいいかな」

「おまえに帰る気がないだけだ」

「おれは、シヤナのところに帰りたいたいと思っているよ」

「本当に？」

「ひどいな、ノエ。おれは帰りたいたいよ。帰りたいたいと思うようになったんだよ」

見ていればわかっただろう、とクロはくすくすと笑う。今も脳裏に浮かぶのはシヤナのことで、シヤナのこと以外は考えられない。

「なら、立て」

「立ってるよ」

「前に進め」

「進んでる」

「振り向くな」

ノエの声は、どこから聞こえてくるのだろう。そして自分は、なぜこんなところを歩いているのだろう。

今さらそんなことを疑問に思いながら、クロは歩き続ける。不思議なことに身体は疲れず、息が上がることもない。

「ノエ」

「なんだ」

「おれは、どうしてまた、ここにいるのかな」

この場所には見覚えがあった。幾度か彷徨ったことの在る場所だ。けれども、どこかはわからない。一面が真っ白なのか、それとも黒いのか、それすらわからない場所だ。ただ、自分は立って歩いているという感覚がある。そう、しいていうなら、感覚だけがこの場所にある。

「おまえは迷子になり易い」

「迷子？」

「道を作ってやる。それを辿って、帰れ」

「道……そんなものがここにあるの？」

「在る」

そのとき、どくん、と強く心臓が鼓動した。どくどくと、断続的にその感覚がクロを襲う。

不意に、なにかが気になった。

「あ、れ……？」

気になるものがなにかわからない。けれども、気になる。

クロは手を伸ばし、気になるそれを掴もうとした。だが掴むことができない。身体をもっと前に進めなければ、それには届きそうもなかった。

「進め、クロネイ・エイブン・セムコンシヤス」



ノエの声で、よりいつそう強く、心臓が脈打つ。苦しいくらいの鼓動に眩暈にも似たものを感じた。それでも、クロは気になるそれを掴むため、前に前にと足を進める。

なにが気になってるのだろう。なにが、こんなにも気を惹かせるのだろう。自分はシャナのことしか考えられないのに、もしかするとそれはシャナなのだろうか。

シャナが、呼んでいるのだろうか。

「しゃ、な………？」

シャナを呼んだ声は、なぜか掠れた。さっきまでノエとふつうに会話していたのに、いきなり声が出なくなってクロは戸惑った。けれども、そんな動揺も気を惹かせるものを前にしてはどうでもいいと思う。

「しゃる、なゆぐ………」

呼ばれているのかもしれない。シャナに、ここにおいでと、誘われているのかもしれない。だから気になるのだ。

「そつだ。そのまま進め」

ノエが促してくる。

クロはとにかく身体を前に前にと運び、そうしてふと、その姿を見つめる。

「しゃな………っ」

やっぱり、気になったのはシャナだ。

シヤナがそこにいるから、気になったのだ。

シヤナはその報告を執務室で聞き、瞠目した。

「クロ、が……いなくなつた？」

「はい。アイルアート医師が怪我の具合を診に窺つたところ、その身はどこにもなく……寝台はまだ温かかったそうですので、すぐにお探しいたのですが、近くでは見つけれず、現在も搜索中です」

なんてことだと、シヤナは持っていた書類を卓に叩きつける。

「もっと人を増やしなさい！ クロは大怪我を負っているのよ」

「殿下の騎士隊が搜索に加わっております」

「誘拐の可能性は？」

「形跡はございませんでした。ご自身で部屋から出られたものかとアイルアート医師はおっしゃっております」

「そんな……昏睡状態にあつたのに、すぐ動けるわけが」

誘拐されたと思えないクロの失踪に、シヤナはわれを失う勢いで動揺する。こんな姿は誰にも見せられない、などと冷静に思っている部分もありながら、報告してきたエリオンに自分も探しに行

くことを告げた。

「本当に、誘拐の可能性はないのね？」

「部屋は密室に近く、また不審者の目撃もありません。意識のないクロネイ殿下を部屋から連れ出すのは、警備の状況から見ても難しいかと」

「そう……わかったわ。クロの行動範囲はくまなく搜索なさい。わたしも近くを探すわ。それから……ネフィス殿下」

シヤナの執務室には、客人として改めて招かれたクロの兄ネフィスがいる。シヤナの仕事ぶりを眺めるついでに、さまざまな意見を出し、また相談していたのだ。

「お心当たりがありそうなお顔をしていらっやいますね」

ネフィスは笑っていた。くすくすと、まるで弟の遊びに呆れているような笑い方だ。

「心当たりと言つか、まあ、なんというか……もはや本能なのかと、思ってたね」

「本能？」

「あれは、実は天恵にも似たような感覚を持っていてね」

「……クロが？」

「唐突に動き出すことがある。それは突き動かされているとしか思えない行動でね。おそらく、まともな思考が働いていないのだろう」「？ どういう意味ですか」

冷静なネフィスは、どうやらクロの失踪に心当たりがある。

「クロを呼んでみなさい」

「はい？」

「廊下に出て、クロを呼んでみなさい。そうすればわかる」

さっぱり意味がわからなかった。だが、ネフィスは断定的に言うてくる。クロを呼んでみると、そうすればわかると言っただから、ネフィスには経験があるのだろう。

シヤナはとりあえず、言われたとおりに部屋を出て、廊下を見渡した。

「クロ……？」

どこにいるの、と囁くように、廊下の隅から隅まで、確認するよ  
うに視線を動かす。

クロの姿はどこにもない。  
だが、なにか感じる。

「……近くにいるの？」

広く細かく、視線を流してクロの姿を探す。

執務室からネフィスが出てきて、同じように周りを見渡した。

「いるねえ……」

「本当に？」

「あれはノルイエという精霊に好かれているからね。ああ、天恵にも等しいものを持っているというより、存在そのものが精霊に近いのかもしれない」

「精霊……クロが、精霊」

「あれは精霊に生かされていると言っても過言はないからね」

確かに、と思う。

クロはノエの力で生きている。ノエに見捨てられたら生きられない。人間としての生命力が薄いと言えるだろう。それなら、精霊に近くなっても不思議ではない。

「クロ、どこにいるの?」

もしクロが精霊のだとしたら、ノエがそうであるように、するりと姿を見せることができるだろう。気配なく歩くのだって、剣の嗜みがあるからというよりも、精霊のように生きているからできることだろう。

呼びかければ、探すまでもなくクロのほうから、現われるかもしれない。

「クロ……わたしはここよ」

目覚めたのなら、ここに来なさい。

わたしのところに、帰ってきなさい。

強く祈りながら、命じながら、クロを待った。

そのとき。

「しゃ、な……?」

背後から、声がした。

「しゃる、なゆぐ……」

その声に振り向く。

必死な顔をしたクロがすぐ後ろにいた。

「しゃな……っ」

いきなり現われたクロに、驚くとかそついうことの前に、シャナは涙を浮かべた。

クロが目覚めたのだ。

クロが帰ってきたのだ。

「クロ！」

両腕を広げ、倒れ込むように収まったクロの身体を、強く抱きしめた。

24 : 精霊のよつば。(後書き)

本年も拙作をよろしくお願い申し上げます。

デイランを陥落させたトワイライは、名をデイラン公国と改めさせたのち公国を属国にし、王侯貴族には刑として下位の貴族位を与えた。もちろん優秀な臣は対話ののちトワイライの王宮に召し上げられ、腐っていた中枢は取り除かれた。

「と、いうことで、銀山の所有権はトワイライがいただくよ」

「はい、かまいません。取引はしてくださるのでしょう?」

「細工に関してはセムコンシャスに敵わないからね。むしろ優先的にそちらへ銀を送るから、加工に力を入れてくれ」

「承知いたしました」

「ただ、銀山は無限資産ではない。いつか底をつく。加工技術をさらに上げなければ、生き残れないと知っておくんだよ」

起きた戦争の片づけを終える頃、デイランが所有していた銀山の権利についても決着し、トワイライがその所有国となることで世界情勢は安定した。

一番の問題であった銀山が片づけばあとは微々たるもので、セムコンシャスも漸くいつもの姿を取り戻す。

「もういいですか、ネフ。おれにシャナを返してください」

「寝台から離れられない怪我人が、満足に王女の相手もできなかる

う」

「な…っ…ネフには関係ありません!」



「いやいや、しばらくはわたしに任せなさい」

「ちよ、ま…っ…義姉さんに言いつけますよ！」

「ああそれはかまわない。アーシヤは側妃推奨派だ」

「シヤナはおれの妻です！」

他愛もない兄弟喧嘩はよくシヤナの前で繰り広げられ、最終的にはクロが大敗してシヤナに泣きついてくる。

今日も今日とて兄ネフィスに口で勝てず、揶揄されまくり、とことん遊ばれたクロは、本気で泣きながらシヤナにしがみついていた。それを可愛いと思ってしまうから、シヤナは笑いながら兄弟喧嘩を黙って見守っていた。

「じゃ、しゃなは、おれのおくさん、です…っ」

ネフィスが本気で言っているわけがないのに、本気に受け取って泣くクロは可愛い。

「そうね、わたしはあなたの奥さんね」

くすくす笑いながらクロの好きにさせると、ネフィスに取られまじと嫉妬しながらしがみついてくるから少し楽しい。うっかりシヤナもクロで遊んでしまう。

「ところでシヤルナユグ殿下」

「なんです？」

「ノルイエとの契約についてお訊ねしたいのだが、そろそろいいかな？」

クロで遊び終わったらしいネフィスは、それまで訊かずにはいたこと、精霊ノルイエとシヤナの契約について訊いてきた。このことに

はクロも関係しているので、涙を止めると睨むようにネフィスを見やる。矛先が違う、とクロを宥め、シヤナは口を開いた。

「本来なら、血縁にある者であれば、契約は簡単だったそうです」  
「……やっぱりね」

はあ、とネフィスはため息をつく。

クロで遊ぶネフィスは、本当にクロを可愛がっている。そのネフィスを置いて、シヤナがノエと契約するというのは、とても面倒で遠回りなことだった。ノエはクロの祖母と契約してクロの生命を支えていたが、それは血縁という関係があったからできたことなのだ。まったく血縁のないシヤナが契約するよりも、ネフィスと契約したほうが、クロの生命は危ぶまれないということである。

「なぜノルイエは、わたしよりもあなたを選んだのだろうね」  
「それは……」

シヤナが答えようとした矢先、シヤナから少し離れたクロが、その口を手のひらで塞いできた。

「おれがノエに言ったんですよ」  
「おまえが？」

「おばあさまが亡くなられて、少しして……ノエが訊いてきたんです。どうするかって」

「……。それで？」  
「おれは、もう少し世界が見たいと答えました」

クロの口から語られるそれは、おそらくはシヤナ以外に初めて明かされる話だ。

「世界を見たいと言ったおれに、ノエは条件を出してきました」  
「条件？」  
「国を出ろ、と」

いくらか真面目な顔をしてクロの話聞いていたネフィスが、ぴくりと眉を動かして少しだけ剣呑そうにする。それはクロを愛しているがゆえの、ノエに対する怒りなのかもしれない。

「国を出なければ世界を見ることなんてできない。ノエの言うことは間違っています」

「そうだね……」

「だから国を出る決意をしました」

「わたしに黙って国を出たのは、なぜかな」

「ネフやほかの兄上、姉上たちでは、おれを国から出そうともしません。だから黙って国を出ました」

「協力したのは先王かい？」

「脅したんです。おばあさまが亡くなった以上、おれの命は遅かれ早かれ消えるでしょうと」

「最期の願いだと聞いた……と、先王や父上は言っていたね、確かに」

つまり、と続けたネフィスが、少し怖い顔をする。

「おまえは騙したのかい、先王を、父上たちを、わたしを」

ネフィスは怒らせてはならない、とクロは言っていたが、その通りだ。ネフィスから発せられる冷気は、ひどく冷たくて寒気がする。ただ見つめられているだけなのに、心臓が止まりそうになる。

けれども。

「おれは、生きていたくなかったんです」

ネフィスに怖気づくことなく、クロはその本音を口にした。  
とたんにネフィスから発せられていた冷気は薄れ、息を詰める気配が伝わってくる。

「……なにが……なにが不満だったんだい」

「不満なんてありません。おれは、幸せでした」

「なら」

「幸せを抱えたまま、終わりを迎えたかったんです」

ひどく傷ついたような顔をしたネフィスに、クロが申し訳なさそうに少し俯く。

小さく震えている拳に、シャナはそつと手のひらを添えた。

「わたしたちは、そこまでおまえを、追いつめていたのか」

「そうではありません。ただおれは……もうみんなに、心配されなくなかったんです。その心を煩わせるようなことは、したくなかったんです」

「おまえを愛しているからみんなおまえを心配した。当然だ。おまえはわたしたちの小さな弟なんだぞ」

「もう成人しました。こんな大きな子どもが、いつまでも兄たちに頼って生きるなんて、できませんよ。それに、世界を見渡せばおれみたいな子はたくさんいます。王族だからという理由でその子たちと違う待遇を受けるには、おれはあまりにも、甘やかされ過ぎています」

苦笑したクロは泣きそうな顔をしていた。さっきまでネフィスに遊ばれて本気で泣いていたから、涙はすぐ出てくるだろう。同じよ

うな顔で、ネフィスも静かにクロを見ていた。

「おまえはどんなに大きくなっても、わたしの可愛い弟だ」

「そう言ってもらえるから、その幸せのまま、終わりを迎えようと思っただんです」

クロはネフィスの気持ちをよく理解していると思う。だからこそ、その気持ちを抱えたまま、消えてなくなりたかったのかもしれない。そつと静かに、思い出になりたかったのかもしれない。

「だからおれは、ノエにそう言いました。ノエは頷いてくれました。最期までつき合つと、言ってくれました」

「ノルイエがわたしたちに契約を持ちかけなかったのは、おまえの願いが、それであつたからということか」

「そうなります。ですから、そこから先のことは、ノエが判断したことで……おれもまさか、ノエがシャナと契約するなんて、思つてなかつただんです」

ふたりの視線が、一気にシャナへと向けられる。同じ色の双眸に見つめられると、違いを見つけたくなるのは仕方ない。ネフィスはクロとよく似ているし、瞳と髪の色はまったく同じだ。性格も似ていると思う。違うのは、持って生まれた身体、くらいではないだろうか。

もしクロが健康的に育っていれば、きっとネフィスのような青年になっていただろうし、シャナと出逢うこともなかった。

クロがクロでよかったと、シャナは思う。

「大切にしたい、と思つたのよ」

シャナはそのときのことを思い出しながら、温かな気持ちに微笑

む。やはり後悔はどこにもない。ノエと契約してよかったと思う。

「この想いを、大切にしたいと思ったの。それはクロを失いたくないということ、同じだったわ」

「……シヤナ」

「わたしは言ったわね、クロ。想いを大切になさいと。だからわたしも、想いを大切にしたのよ」

自分からクロに言うておきながら、自分がそれを護らないなんてことは、あつてはならないと思う。

だからシヤナは、想いのまま、ノエと契約することを選んだ。

そしてノエは、シヤナがそうすることを予想していた。むしろ初めから、シヤナの想いとは関係なく、契約しようとしていた。クロが予想もしていなかったノエのそれは、クロを気に入っているノエの自己判断だ。

騙していたというなら、それはクロではなく、ノエが周りを騙したと言えるだろう。本当に、気紛れな精霊だ。ノエがそう動いてくれなかったら、今頃シヤナは、どうしたらいいかわからなくて途方に暮れていた。クロも、シヤナへの想いに苦しみながら儂くなるどころだった。

「……ノルイエとの契約の経緯は理解したよ。どうやらノルイエに一杯喰わされたね」

「今ではそう思います。ですが……ノエの優しさに、わたしは救われませんでした」

「精霊は、精霊位が高いほど、気難しい。ノルイエがノルイエであつたから、おばあさまも救われたことだろう。もちろんわたしも、クロもね」

シヤナのノエとの契約を、クロが結果どう思っているかはわから

ないが、受け入れてくれた様子はある。それは生きたいと思つてくれた証拠で、死にたくはないと言つたクロのそれを確かなものとしている。

「そのノルイエは、さて、どこにいるのかね」

「ああ、今はおれの中に」

「おまえの？」

「疲れたとかで」

「……おまえは精霊の巣になっているのかい？」

「ノエの力を直で受けているので、休むにはおれの中が一番いいそ  
うなんです。どういう理屈かは、ノエ自身も説明できていませんで  
したよ」

「わたしにもその理屈はわからないね……」

命が危ぶまれるほどの怪我をしたクロを、ノエがシャナとの契約  
のもと助けるには、シャナがクロを名実ともに夫として迎える必要  
があつた。だがそれには時間がなく、ノエは自身の契約だからと強  
引な手段に出、結果クロを目覚めさせた。その強引な手段のせいで、  
ノエは随分と疲弊したらしい。クロが目覚めてから、ずっと姿を見  
せない。どこにいるのかと思つていたら、クロの中にある棲処で休  
んでいるようだ。

「シャナの中でも休めると言つてました。まあ、許しませんでした  
けど」

「……。おまえは意外と心が狭いね」

「シャナはおれの奥さんです」

「ノルイエは男性体だが、精霊だから雌雄はないのだがね」

「それでも許せません。シャナはおれのです」

はつきりと、迷いなく断言するクロが、恥ずかしい。けれども、

そう言ってもらえるのは嬉しい。

「シャルナユグ殿下」

ふと、ネフィスに呼ばれる。

「こんな弟だが、よろしく頼む。わたしの可愛い弟だ」

ネフィスにはもともと反対する気持ちなどなかったと思う。クロが黙って国を出たのも、実はそんなに怒っていないはずだ。むしろ、クロが国を飛び出したことを、一番喜んでるのはネフィスではないかと思ってしまう。でなければ、こんなに優しい笑顔にはならない。

「ありがたく、そのお言葉を頂戴いたします」

微笑んで返事をしたシャナに、満面の笑みを浮かべてついでにしがみついていたのはクロで、おまけとばかりにネフィスの目の前で口づけされた。

「そういうことはわたしが見ていないところでなさい」

ばしん、とネフィスに頭を叩かれていたが、クロは、とても幸せそうに笑った。



夜、クロが熱を出した。体調が万全ではないせいだと医師アイルアートは診断したが、クロは熱にうなされながらも胸を押さえていた。

「殿下、お訊ねしたいのですが」

アイルアートは確認するように、シヤナにそろりと訊いてくる。

「クロネイ殿下は、胸に……病を抱えておられるのでは？」

クロのそれに、医師たるアイルアートが気づかないわけがない。知っておいてもらう必要があるだろうと、シヤナはクロの病について説明した。ネフィスに頼んで、クロがそれまで受けてきた治療の記録は取り寄せてもらったので、それもアイルアートに見せた。

「……そう、でしたか」

クロの治療記録に、アイルアートは渋い顔を見せた。治療記録はシヤナにはよくわからない内容が多かったが、アイルアートが言うには、治療らしい治療ではないと言う。

「たとえば苦しんでいるときに、その苦しみをいかにして取り除くか……痛みをいかにして取り除くか……これは薬に頼るほかあり

ませんが、使われている薬は一時的なものです。特別なものは使われておりません」

「一時的、というと……」

「完治させるための薬ではありません」

それは、治す気がない、とも捉えられるが、そうではないらしい。以前ノエが言っていたように、クロの病は治るものではない。治す気がないのではなく、治せないから、一時的に取り除く方法しか用いられなかったのだ。

「殿下、これはあまり言いたくはないのですが、今後のためにも、どうかそのお耳を汚すことをお許しく下さい」

「……いいわ」

「覚悟はなされてください」

「どうということ?」

「クロネイ殿下は、たとえそのお命をノルイエどのに支えられているとしても、このように倒れられることが多くございましょう。無理をすればした分だけ、身体に返ってくることでしょう。それは確実に、クロネイ殿下を疲弊させます」

アイルアートの言うことは、わかって、覚悟していることだった。クロに苦しみを与え続けることだと、わかっていることだった。改めて言われると心が挫けそうになる。

それでも、失えない。

大切にしたい。

そう想うから、覚悟を決めた。

「アイルアート」

「はい、殿下」

「あなたには苦勞させると思っわ。けれど……頼みたいの」

苦しみも悲しみも、分かち合うと誓った。クロの苦しみはシャナのものだ。アイルアートにはこれまで以上に手を煩わせることになるが、それでも、シャナはクロと共に在り続けたい。

「殿下にその御心がありますれば、わたしに否やはございません」  
「ありがとうございます、アイルアート。クロのこと……あなたに一番、頼ることになるわ」  
「承知いたしております」

真剣な面差しで頷いてくれたアイルアートにホツとし、シャナは漸く微笑む。

クロが確実な死を迎えることはないといっても、どうしたって永続的にアイルアートの存在が必要だ。それを強いる自分の非情さとそれでも一緒にいられるという安堵感とでは、安堵感のほうが強い。この罪悪感は、一生抱えていくことになるだろう。

「殿下、もう一つだけ、よろしいでしょうか」

「なにかしら」

「敢えて、言わせていただきます」

わざわざ居住まいを正したアイルアートに、少し緊張する。

「クロネイ殿下を大切になさってください」

それは、シャナにとって思いがけない言葉だった。

「甘やかしではありません。大切に、想っていただけなのです。クロネイ殿下がおられなかった頃には、もう戻れませんでしたでしょうか？ 今ある大切なものを、殿下もわれわれも、護らなければならぬ

と思うのです」

「……あなたにとつても、クロは失えない存在？」

「殿下にとつてもよい嵐を起こしてくださったお方にございますれば」

クロを「嵐」と表現したアイルアートの、それは一歩間違えれば不敬とも取れたが、シヤナは笑った。

「そうね、わたしはクロにとつても振り回されているわ  
「とつてもよいことだとわたしは思います」

アイルアートもにこりと微笑み、だからこそ大切に想ってください、と繰り返した。

「……想いは伝播するものなのね」

「わたくしどもは殿下を愛しておりますから」

シヤナはクロにとつて苦しい選択をした。けれどもそれは、結果的にたくさん笑顔と幸せを招くことができたと思う。クロを大切に思うのはシヤナだけでなく、アイルアートを始めとしたシヤナの部下たちも、クロをとつても大切に思ってくれている。

「ときには苦しい選択も必要なのだと……そう思っているのかしら  
「クロネイ殿下の笑顔をお護りすればよいのです。わたしはその努力を惜しみません」

「……ありがとう、アイルアート。今日はあなたに励まされてばかりね」

「殿下のお役に立つことは、わたしの誉れにございます」

ゆっくりと深く礼をしたアイルアートに、シヤナはもう一度、ありがとうと口にした。

目を覚ますと、このところいつもそこに、アイルアートという医師がいる。丸眼鏡を鼻にかけ、水色の双眸を僅かに陰らせ、ヒヨコみたいな黄色い頭が目印の、細身の青年である。

「おや、お目覚めですか」

「……アイルア？」

「アイルアートです。まあ好きに呼んでくださってかまいませんが」

失礼しますよ、と言ったアイルアートは、目覚めたばかりのクロの額に手を置き、体温を確認する。そのあと脈と取られ、目の状態を確認するのが、いつのまにか恒例となっているアイルアートの行動だ。

「まだ少し熱がありますので、今日もできるだけ安静にしてください」

「熱？」

「はい」

「……昨日の夜、シヤナがいた気がする」

「ええ、あなたさまが熱を出されたので、その報告をしましたから様子を窺いにいらっしやいました」

「……おれ、眠ってた」  
「残念でしたね」

よしよし、と頭を撫でられた。ものすごく子ども扱いされている気がして、クロは顔を引き攣らせた。

「おれは子どもじゃないよ」

「わたしの半分も生きていない子どもに、子どもではないと言われましても」

「……。えっ？」

「はい？」

「若づくりもほどほどにしたらっ？」

「……。診断を誤りました。侍従を呼びますから着替えて昼食にしてください」

安静にしていると言った口で寝台を追い出そうとするアイルアトに、こんな人だっただろうかと少し驚かせられながら、なんだかんだ言いつつ着替えを手伝ってもらって寝台を出た。いや、寝室を追い出された。

「おれ安静にしてなくちゃいけないんじゃないのっ？」

「少々の微熱は身体を動かして発汗させることにより解消されます」

「肋骨まだ痛い！」

「大声を出すからです」

未だ完治していない肋骨の怪我は、固定以外に治療法がないという。アイルアトのそれが本当のことかわからないが、とりあえず大声を出すのはやめようと思う。そもそも疲れる。

「肩のあたりもまだ痛い……」

「全治一月、でしょうかね」

「そんなにかかるの？」

「銃創はわたしも初めてですので確かなことは言えませんが、聖国からのお客さまによればそのくらいであると」

「……怪我はするものじゃないね」

「以後お気をつけください」

満身創痍なんて初めてだ。胸の病でよく床につくが、怪我をすることはなかった。怪我の前に病に忙しかったのだ。

「つて……昼食？」

「ああ起きたのか、クロ」

「あ、ノエだ」

寝室の隣は居間になっている。そこでノエが、卓に食事を並べていた。量からしてふたり分の食事は、おそらくクロが目覚めることを想定して用意されたのだろう。

「アルアもここで食べるの？」

「ついでですから。お嫌でしたら下がりますが」

「いやじゃないよ。いつもひとりだから、むしろ一緒に食べて欲しい」

「では、同席させていただきます」

ノエは精霊だから、人間の食事はしない。たまに口に運んでいるが、味はよくわからないらしい。だから食事はいつもひとりで食べていたのだ。一緒に食べてくれる人がいるのは素直に嬉しい。できたらシヤナと一緒に食事したいところだが、婚姻式を終えるまではまだ無理だ。書類上では夫婦であっても、この前のように戦時中で一緒に行動している場合を除いては、式典という通過儀礼が王族に

は必要とされるので仕方ない。

「ノエ、いつのまに出てきたの？」

「少し前だな。姫に呼ばれたから」

「シヤナに？」

「おまえ以上にこき使ってくれるよ、姫は」

半眼したノエは、どうやらシヤナに精霊という特性を上手く使われているようだ。いやそうではなく楽しそうだから、使われることに文句はないだろう。

はは、と笑いつつ、少しふらふらしながらクロは用意された食事の席につき、向かいにイルアートを促した。病後には優しそうな食事は、なぜか久しぶりに食事をした感をクロに思わせる。祖国にいた頃は祖父母と食事をするのが当たり前だったせいも、久しぶりに誰かと一緒というのがクロにそう思わせたのかもしれない。

あまり空腹を感じていなかったクロだが、イルアートと食べ始めるると自分が随分と空腹であることに気づき、ゆっくりとだが黙々と皿を空にしていく。その食べ方にイルアートが首を傾げていたが、とくに会話らしい会話にはならず、静かに食事は進んだ。

「万遍なく食されるのですね」

食後、漸くイルアートが首を傾げていた理由を口にした。

「どづいことと？」

「偏食であるなら、と想像していたのです」

注意されるところであったらしい。



「食べられないものならあるけど」

「たとえばどのような？」

「魚は平気だけど、貝類は発疹がでるから食べられないよ」

「貝類ですか……ほかには？」

「それくらい。発疹がでなければほとんどは貝類も食べたいくらいだね」

「嫌いなものがないのですか」

「食べものに嫌いなものはない、とクロは頷く。

「珍しいですね」

感心された。王侯貴族には偏食家が多いらしい。

そもそもクロの場合、食べものに文句を言える立場ではなかった。貧弱な身体は、とにかく栄養を取らせ続けなければならないからだ。そのために豪華さよりも栄養の均衡を大事にされた。それはセムコンシヤスに来てからも続いている。

「こちらに来てから、食したことのないものもありましたでしょう」

「あつたけど、食べられた。味はトワイライとあんまり変わらないからね」

食事に關しては、そういうえば困ったことにはなっていない。ノエが事前に確認しているから、というのも前提にあるが、食べものに関して文句を言うクロではない。

「おれは食事ができる立場にあつた。毎日、毎食、欠かさずにね。世界のどこかでは飢えている人もいるのに、それは幸せなことだ。食事ができることに感謝しないと」

「……よい心がけです」

「はは。幸せを手放したくない我儘だよ」

そんな大層なこととはしていない、と苦笑すると、丸眼鏡の奥にあった水色の双眸が細くなり、眩しげにクロを見つめてきた。

「なに？」

「あなたをお迎えできたことは、わが国にとって大変な幸福である  
と、つくづく思っています」

「……。いきなりなに」

「お身体のこと、ノルイエどものこと、シャルナユグ殿下からお聞きしました。わたくしアイルアート・フォロン・ファルムは、全力  
であなたをお支えする所存にございます」

唐突な宣言に、思わず沈黙してしまう。なにやら忠誠を誓われた  
気がするのだが、聞き間違いだろうか。

「……って、え？ ファルム？ アルア、ファルム公爵となにか…

…」

「父です」

「……。シャナの叔父さんっ？」

宣言よりも、アイルアートがシャナの叔父であったという事実の  
ほうが、クロには重大なことだった。

先の戦争で被害が出た城下の復興は、戦争の期間が一日だけであったことから、それほど難しくはないようだった。壊れたのは城門前のいくつかの家の屋根くらいで、終わればその賑わいがあったというまに取り戻し、戦争があったことなど微塵も感じさせない。加えて勝利したとなれば、誰もが安堵の笑みを浮かべて生きている今に感謝し、被害が最小限であったことを大いに喜んだ。

意外なのは、クロが随分と城下で有名になったことだ。

「なんでも王女さまの旦那さまが、ひとりで全部を蹴散らしたらしいわよ」

「飛んでくる矢もさつと剣で一振り！ そりゃあ見事な腕前だそりよ」

「おまえに死者がでなかったそうじゃないかい。うちの国は本当に戦争なんかしたのかい？」

どこで見ていたのかは不明だが、クロの雄姿は城下の女性たちの心を鷲掴みにしたようで、戦争をした、という事実が城下では少しずつ埋もれていった。

「殿下、このようなものが売られていましたよ」

城下の様子をお忍びで見に来ていたシャナは、エリオンが見つけてきたものに、思い切り目を見開いた。

「に、似ているわね……」

それはクロの肖像画で、おまけに剣を手にして矢を払った瞬間のものを、まるで見ていたかのように描写されている。クロの姿がとても上手く表現されていて、思わず見入ってしまう。

「買いますか？」

う、と言葉に詰まる。

「こちらはお守りのようなものになっていて、女性の方々に人気ですよ。あちらでは大判を売っていましたよ」

エリオンが見つつけてきたのは手のひら大のもので、持ち運べるものだ。お守りにされるのは、クロのこの姿からも、よくわかる。あれだけ淡々と射られた矢を弾いていたのだから、邪まなものから悉く護ってもらえる、と女性なら思うだろう。シャナですら思ってしまう。

「ふだんは、こんな姿ではないのだけれど……」

がっかりさせたいわけではないが、あのときのクロは本当に大國の皇子っぽかった。衣装だけであれば見映えが変わる人はそういないだろう。ふだんは神官服を着て、ふにゃつと笑いながら王城内を歩いているけれども。

「どうします？ 大判のほうも、買いますか？」

式典ののち姿を国民の前に曝したら、城下はとても大変なことに

なるかもしれない。

「……買うわ」

「では行つてきます」

「待ちなさい」

「はい？」

「その……これを描いた画家を、調べておいてちょうだい」

「……。わかりました」

エリオンが、にやり、と笑っていたのを見逃さない。恥ずかしくて俯いた。

手に力が入りそうになって、慌てて手のひら大の肖像画を懐にしまう。いい買い物をした。

「わたしも若かったのね……」

たかが肖像画、と思う。だが、父王がたまに画家を呼んで母后を描かせていたことを思えば、父王のその血が確実に自分にもあることを考えずにはおれない。

エリオンが大判の肖像画を購入してくるのを待つて、シヤナは場所を移動した。

目的は城下の様子見であるが、昨夜熱を出したクロが昼には目を覚まし、神殿に行ったというので、病み上がりなのに無茶をしてくれる婿どのを迎えに行く都合がある。

神殿は王城の真隣りにあって、一本の通路で王城から向かうことができる。城下からは、正面の大門を潜って入ることになる。ちなみに大神殿は、王城の隣にあるこの神殿ではない。大神殿は王城の後ろ、南側の山の麓にあって、クロとの婚姻式の際に使うことになる。王城の隣にある神殿は、王家貴族、城下の人々のために建立さ

れた小さな神殿だ。

正面の大門から神殿に入ると、予めシャナがこちらから入ることを通達されていた神官がその姿に気づき、恭しく頭を下げてくる。一貴族を装っているので華々しい出迎えはない。

「若さまはあちらに」

クロの居場所だけ教えてもらうと、あとはさり気なく王族用の廊下へ向かい、そこからクロのところへと足を向けた。

いつもは本殿で祈りを捧げてから神官長の座学を受けるというクロは、しかし今日は本殿の奥、静かで小さな祈祷屋に籠っているという。

「アイルアート？」

部屋の前には、ノエやクロにつけた騎士のほかに、なぜかアイルアートがいた。

「漸くお迎えですか、殿下」

「城下の様子を見てからこちらに来たのよ。なぜあなたが？」

「クロさまは本調子ではありませんから、そばに控えておこうと思っ  
いでまして」

いつのまにか、アイルアートのクロの呼び方が「クロさま」になっている。なんだか微妙な呼び方で笑いそうになったが、笑ったらたぶんクロが怒るだろうなと思って、必死にこらえる。

「クロが籠っていると、聞いたけれど」

「ええ。呼びかけても出てきません。ちなみにノルイエどのも拒否

「されています」

どうしたのでしょうかね、と言うアイルアートには、クロが祈祷屋に籠ることになった理由がわからないらしい。ノエはそっぽを向いているからなにか知っているかもしれない。

なにか不安に思うことでもクロにはあつたのだろうかと危惧したが、シャナの声が聞こえたのか、祈祷屋の扉が僅かに開く。ちらりと顔をのぞかせたのは、少しだけ顔色の悪いクロだ。

「シャナが来たの？」

「クロ、帰るわよ」

声をかけると、扉が思い切り開き、白い物体がシャナに飛び込んでくる。それほど勢いはなかったので軽く受け止めると、神官服姿のクロが、なぜか必死にしがみついていた。

「? どうしたの？」

「アイルアートが」

「……。誰のこと？」

おそらくわたしのことです、とアイルアートが言う。

「アイルアート？」

「じゃ、シャナの、叔父さんだった……っ」

そのことか、と思う。てっきり知っているものだと思ったのだが、そう言えばシャナからは教えていないので、知らなかったのだろう。しかしなぜ恐慌状態にあるのかが不明だ。

「わたしのところへは挨拶に来ませんでしたからね」

と、アイルアートの言うと、ぎっくん、と明らかにクロは怯えた。  
「だ、だって、いな、いなかっただもん！」

なんのことだと首を傾げると、どうやらクロがセムコンシャスの  
王城に到着してすぐの、貴族への挨拶回りのことらしい。大体のと  
ころへは挨拶に赴いたというクロは、アイルアートのところへも  
ちろん挨拶に行った。しかし、ファルム公爵家の跡取りではないア  
イルアートは、公爵邸に居があるわけではない。一代貴族として自  
身の邸がある。そちらにふだんいるはずのアイルアートだが、王族  
が抱える御典医であるため、確実に自身の邸にいるとは限らない。  
むしろ王城内の医務局に詰めている。

「医師だって、知らなかつただもん！」  
「だもん、て……」

「挨拶に行くたび主人はまだ仕事から戻りませんって、言われて…  
…どうしようかと思ってたら目の前にいたただもん！」

しぶとく挨拶には行っていた。しかし逢えなかつた。だが実際は、  
こうして目の前にいる。しかも医師その人だった。

となれば、吃驚したのも頷ける。

だからといってなぜここまで怯えるのか、とシヤナは半ば呆れた  
が、クロには大問題なのだろう。ノエがそっぽを向いている理由が  
わかつた。

「怒らない、と言っているのですがね」

仕事で王城に詰めているのは当たり前であるアイルアートにとっ  
て、それは些細なことなのだろうが、クロには重大なことのようで



ある。

「その笑顔が怖いんだよっ」

「発言のほうに問題があるといつになったら気づくのでしょうか……」

混乱しているクロに、シヤナは苦笑する。

クロが祈祷室に籠っていたのは、セムコンシヤスに来てから初めて慣れた場所であったから、逃げ込んだ、ということのようだ。

「落ち着きなさい、クロ。教えなかったわたしも悪いけれど、アイルアートも自身のことを教えなかったのだから、あなたが悪いわけではないわ。そもそもわたしから言う前に自分から挨拶に動いたあなたは偉いわ」

これだけアイルアートの正体に怯えているということは、必要な挨拶回りができなかったのはアイルアートだけなのだろう。それを考えると、アイルアート自身、わざとクロに自分のことを言わなかった可能性が高い。クロが気づいていないことをいいことに、クロという人間を観察していたと思われる。

「わたしばかりが悪いように聞こえますが、わたしに気づかなかつたクロさまも悪いのですよ?」

「ごめんなさいってばあ!」

泣くのが得意なシヤナの夫は、アイルアートの遊んでいるような発言に半ば涙目だ。

「アイルアート、それくらいにしてあげて」

「失礼。殿下を前に不敬でした」

「まあ、今後はクロのことであなたに一番頼ることになるのだから、

あまり強くは言えないけれど」

クロとアイルアートのよい友好関係を築ければいい、とシヤナは思っている。この国でクロの味方は未だ少ない。そんな中で、クロを護ることに協力は惜しまない、とはつきり口にしたのはアイルアートだけだ。叔父ということもあってシヤナは全面的にアイルアートを信じているが、クロにもそうあって欲しいと思う。アイルアートのさまざまなことを教えてもらいながら、少しずつ、この国セムコンシヤスに馴染んでいつて欲しい。

「うづう、シヤナあ」

「はいはい。アイルアートのいじめられたら、わたしのところに来るといいわ」

「！ うん」

涙目ながら、シヤナの言葉にクロは嬉しそうに笑う。

わたしはこの笑顔に絆されたのだ、とつくづく思う。

シヤナの中にするりと入り込んできた青年は、愛されるように育っている。末っ子という立場を最大限に利用していると思う。うっかりシヤナも絆されるくらいだ。その代わりシヤナはクロに苦しい選択を科した。お互いさまではないだろうか、今なら思う。

「そろそろ冷えてきますね……帰りましょうか、殿下方」

「そうね。帰るわよ、クロ」

いつまでもしがみついたままのクロを容赦なく引き剥がすと、クロは少し寂しげにしたが、その手を差し伸べるとまた笑って、手を伸ばしてきた。

「帰ろう、シヤナ」

いつもより温かいクロの手のひらは、本調子ではないと言っていた。アイルアートの診断を確かなものとする。また今夜にでも熱を出すかもしれないと思うとゾツとしたが、シャナのその不安を吹き飛ばすかのようにクロは微笑む。

「シャナ、笑って」

「え？」

「笑って、シャナ」

手を引いていたのはシャナのほうだったのに、いつのまにかシャナがクロに手を引かれるようにして歩いていた。

「シャナは笑って。おれを見て、笑って」

力をちょうだい、と言われてるように聞こえた。

「シャナが笑うと、おれは幸せになれる。おれを幸せにさせて、シャナ」

お願い、とねだるその笑みに、優しさを感じて、シャナは微笑んだ。

「あなたも笑っていて。あなたの笑みに、わたしも幸せを感じるわ」

罪悪感は一瞬抱えていく。苦しみも悲しみも、痛みもなにかも、分かち合うと誓った。

それはクロだから、抱いた感情。

「……シャナ」

神殿から王城へ入る廊下の終わりまで、手を引いていたクロが立ち止まり、シヤナを振り返った。

「花咲く歌を、夜明けにつなぐ」

「？ なに？」

「宝を見にいくと言った人が、最後に口にしたんだ」

なんのことかわからなかったが、クロの双眸はシヤナの奥にあるなにかを見つめていて、目を反らすことができない。

「花咲く歌を夜明けにつなぐ、そのことが一番の宝だって」

「歌を、夜明けに？」

「シヤナだよ」

「わたし？」

「シヤナがおれの、花咲く歌」

繋いだ手のひらが離れて、温かいというよりも熱を感じる両の手のひらが、シヤナの頬を包んだ。

「シヤナという花咲く歌を、おれは夜明けにつなぐ」

そういえば出逢った頃、クロは言っていた。

シヤナという花を、明日につなげるために、自分はここにいます。

「明日を迎えよう、シヤナ。おれと一緒に」

「明日、を……？」

「おれには不似合いだと思っていた。けれどシヤナに出逢って、違うんだってわかった。本当に、それは宝だった。おれはただ目を背けていただけだったんだよ、シヤナ」

「……明日を迎えたくなかったの？」

「迎えられないと思っていたんだ。おれはこんな身体だから……でも、シャナがいてくれた。シャナがおれと出逢ってくれたから、おれは変わることができたんだよ」

明日を迎えたいと、思うようになった。それはシャナがいてくれたからだ、クロは言う。

「おれは宝を得られた」

嬉しそうに、幸せそうに笑んだクロは、シャナの額に口づけし、頬に口づけし、シャナの両手を取って指先にも口づけしてくる。

「行こう、シャナ。だいじょうぶ、おれはシャナがいてくれる限り、シャナを夜明けにつなぐために、地盤で在り続けるから」

揺らぐなど、罪悪感など抱えなくていいと、言われているようだった。選んだのはシャナだけではない、自分でもそれを選んだのだと、クロは言っているのだ。

「……あなたを苦しませるわ」

ぼろりとこぼれた言葉は、謝ることなんてできなくて、言えずにいたことだった。

「わたしは、あなたを苦しませる選択をしたの。あなたを苦しみから解放させることなんて、わたしにはできないの」

ごめんなさい、と掠れた声は小さかった。

「責任は取ってくれるんだろ？」

陽気な声に、俯きかけていた視線が戻る。

「苦しいことさえ、おれには幸せなことになるよ」

クロは相変わらず笑っていた。

「シヤナがおれを欲しいと思ってくれたんだから、それはとても幸福なことなんだよ、シヤナ」

だいじょうぶ、とクロは言う。

「おれがいるんだから、シヤナの足許は揺らがないんだよ？」

もうそんな顔をするなど、言われて。

選んだ道に間違いなんてないのだと、言われて。

「シヤナにその選択をさせたのは、おれなんだから」

逃げ道を作ってくれるクロの優しさに、溢れたのはいとしさだった。

「…………つ、わたし、あなたがいいわ」

「おれ以外にシヤナに相応しい夫なんて、いないよ。おれにも、ね」

シヤナだけだよ、とクロが瞳を細める。潤んでいるのは熱のせいだろうけれども、いとしさゆえに泣き虫のクロは涙を浮かべてくれたのかもしれない。

クロにつられて泣きそうになった。半ば涙目で見つめていると、

目じりに口づけされる。

「おれと一緒に明日を迎えよう、シヤナ」

これが最後の求婚、もう二度と受け入れることのない囁きに、シヤナは頷いた。

「あなたがいいわ」

人目など気にするクロではないから、それが伝播してしまったらしいシヤナは、想いのままにクロへと腕を伸ばしてしがみついた。

27 : 花咲く歌を夜明けにつなぐ。2 (後書き)

これにて「花咲く歌を夜明けにつなぐ。」は終幕となります。  
読んでくださりありがとうございました。

お気に入り登録してくださった方々、感謝いたします。

番外編を考えていますので、よろしければもう少しだけおつき合  
いくださると嬉しいです。



28 : アイルアート・フォーラム・ファルム (前書き)

\* 医師アイルアート視点です。

あと少しで婚礼を挙げるというのに、セムコンシャスの王女は政務に忙しい。お茶の時間にはいつも邪魔をしていた王女の夫は、今ばかりはその強行をするにはあまりにも邪魔で、突撃を我慢させられていた。それをフィルやエリオンたち王女の側近に惜しまれていくことは、知らずにいる。

「うっ……シャナがかまってくれないよう」

「誰のせいですか」

「アルア容赦ないー」

落ち込むクロに、医師アイルアートは容赦なく追い打ちをかける。だが、シャナが忙しいのはクロのせいであることに、間違いはない。

「あなたがもう少し、勉強してくださっていたらね……」

クロの隣でお茶をいただきながら、アイルアートはぼやく。

「仕方ないでしょ！ おれは政治学なんて勉強したことないんだから！」

「興味もなかったとは……あなたそれでも皇子ですか」

「なんかこの頃アルアートル容赦ないよね、ほんと！」

「アイルアートです」

アイルアートの、シャナが自分とクロがよい友好を結べればいいと考えていることを知っている。アイルアートはそれに対して否やはない。クロをいじるのは正直楽しい。

「おれよりかなり歳上のくせに子どもで遊んで楽しいっ？」

「あなたも充分、わたしで遊んでいるように思えますが」

「打てば返ってくるんだもん！」

楽しいよ、と断言するクロに、これで遊ばないなんて無理だ、とアイルアートは思う。

もともとクロネイという大国の皇子には興味があつた。婚約者もその候補も一切受け入れなかつたセムコンシャスの王女シャルナユグに、唯一「仕方ない」と思わせた人物だ。たとえ国のために想つての受け入れであつたにしても、シャナがクロを受け入れたことに違いはない。おまけに、祖国トワイライを出立してからセムコンシヤスに向かう道中、歩いていたというのだから笑える。手荷物も売りはらつて着替えもなかつたとシャナから聞いたときは、笑いをこらえるのに大変だつた。

「今からでも政治を学んでみては？」

「無理」

「やる前からなぜ断言するのですか」

「考えるだけで頭痛くなる……ネフとかシャナも、よくできるなあつて思う」

クロは賢いと思う。立場を弁えて、シャナを立たせている。政治に興味がないのは本当だろうが、やらせればできなくはないだろう。勿体ないと思うのは、たまにノルイエという精霊騎士と手合わせしている姿を見るからだ。

あれだけ性格に相手の武器を見、動きを見、自分がどうすべきか

を瞬時に判断する動きは、本能的というよりも思慮深さの問題だ。相手をよく見ているから、クロの剣には一切の迷いがない。正確な剣の動きを見れば、判断の仕方は国政のそれを任せても間違いは起きないだろうと、アイルアートは思うのだ。

「そういえば兄上さまは意外にあっさり帰られましたね」

「ん、ああ、ネフは皇太子だからね。もともとおれの様子を見に来ただけだろうし、用事が済めば帰るでしょ」

「婚礼の際にもいらせられるでしょうが……寂しくないのですか？」  
「寂しくないって言ったら嘘になるけど……ネフには黙って国を出たから、想像以上に怒られなくてホッとしているというか……むしるおとなしく帰ったことに恐怖を覚えるというか」

皇子としては第三、つまり継承権第三位、しかし末子として生まれたクロは、兄妹たちによく可愛がられて育ったという。甘やかされて育ったわりには我儘でないところを見ると、長子である皇太子ネフイスにきつちりと躰けられたに違いない。刷り込みにも近い畏怖心を兄に抱いているのはいいことだ。上手く歳上に好かれる体質になったのも、ネフイスの教育の賜物だろう。

現在クロは、歳上に絶賛可愛がられ中である。アイルアートは代表格だ。

「あなたは歳上が歳下を可愛いと思うその瞬間をよくご存知です」  
「なにそれ」

無自覚なのが面白い、というのがクロの周りを囲む者たちの言葉だ。我儘に振る舞うこともなく、ひたすらシヤナを想い、かまってももらえないことに萎れるその姿に、いったいどれだけ城の者たちが絆されているか、それはクロが知るところではない。

お茶をいただきながら、この席の茶菓子を貢いだ人々にアイルア

トは笑う。ほとんどはシャナの身の回りにいる部下たちで、ついで侍女や女官、意外なところでは上位貴族たちだ。媚を売るというより、クロの一途さに心を打たれた者たちが、遠目からクロを眺めて癒されている。今も、この庭先でのお茶の席にはイルアートがいるだけだが、意識を向ければ至るところから視線を感じる。

「ん？　なんか……なんだろ」

虚弱体質でも武闘派なクロは、遠目からの視線にもちろん気づいている。だが、悪意や殺意といったものが感じられないので、こうして庭先でお茶をしてもとくにいやそうな顔はしない。

暢気に庭先でお茶ができるのも、クロが意外に人の気配に敏感だからだった。これで虚弱体質でなければ、今頃は騎士隊に混じって訓練でもし、貴族の女性たちの歓声を浴びていたことだろう。ひっそりとした視線で済んでいるのは、それでもシャナには面白くないことかもしれないが、状況的には後宮の心配をせずにいられるところだ。

「あなたが殿下一筋でよかったと思う瞬間ですね」

「なんのこと？」

「あなたに向けられる視線ですよ」

「ああ……居心地悪いけど、なんかそれって生温かいというか、ぞわつとするからで……なにもないから逆に不気味なんだよね」

後宮の心配は不要だろうが、襲われないように見護らなければならぬと思う。近くに控えている近衛騎士を呼んで、こっそり頼んでおいた。

「どうしたの？」

「襲われては殿下が嘆きますからね」

「は？」

「国の安泰を願っているだけです」

「？ それはおれも願うけど」

天賦の才に、ゆくゆくは自覚を持たせたほうがよさそうだ。

そう思いながらお茶を飲みみると、二杯めを頼む。ちなみにお茶を淹れてくれているのはクロだ。意外に美味しい。

「そういえばこの頃、新しい友だちができたんだけど」

「聞いています。ハーレン・リスタンでしょう？」

「そうそう。よく知ってるね」

知っている、というか、なぜ彼がクロの友人になったのか、その経緯まで知っている身としては、苦笑せざるを得ない。

「商人でもある画家ですからね。ただ画家としての腕は、殿下に見込まれたことで有名になったのですよ」

「シヤナに？」

「ええ。もともと商人としては有名でしたが、絵を描いているというのはそれほど広く知られたことはありませんからね。殿下に見込まれなければ、むしろ画家を名乗ることもなかったでしょう」

「ああ、そういえばハレ、絵を描くのはあくまでも趣味だとか言うてたな」

「はれ？」

「ん？ ハレでしょ？」

アイルアートを「アルア」とか「アルアトル」と勝手に呼ぶクロは、商人で画家ハーレン・リスタンのことも「ハレ」と勝手に愛称をつけたようだ。

「シヤナがかまってくれないから、ハレに遊びに来てって言ったんだけど……今日は来てくれないかなあ」

「遊ぶ暇があるなら勉強されてはいかがですか」

「頭痛い」

「嘘おつしやい。今日は万全の体調のはずですよ」

卓に頂垂れたクロに恨めしそうに睨まれたが、毎朝必ずその日の体調を確認しているので間違いはない。今日のクロは久しぶりに元気だ。だから庭に出てお茶をしている。

「おれにつき合ってるアルアはなんなの」

「わたしは医師です。あなたのそばに在ることも仕事の一つですよ」

「遊ばれてるだけの気がする……」

「それもありますか」

「おもちゃにしないでくれるっ?」

打てば返ってくる、クロがイルアートに言ったように、それはイルアートも思うことだから、楽しいから仕方ない。

「はあ……ハレが来ないなら、ちょっと身体動かそうかなあ」

「それがよいでしょうね。剣の腕は鈍ることもありますから」

「アルア、できる?」

「医師になにをさせる気ですか」

「無理か……ノエはシヤナのところにいるからなあ」

いつもお守りをしている精霊騎士は、契約者がシヤナなので、よく使われている。クロの体調がいいときはとくに使われるので、今日はそばにいない。

身体を動かしたいというクロに、イルアートは近衛騎士を相手

に推奨した。

「彼でもいいでしょう」

「真剣にやってくれない」

「つい先日まで病床にいたのです。当然ですよ」

「汗かきたいもん」

「また寝台と仲良くなりたいたいのですか？」

漸く満身創痍ではなくなったというのに、たとえば、クロがいやそうな顔をした。起きているときはこうして飄々と振る舞っているが、それもできない状態に陥るといふ自覚があるのかないのか、とアイルアートはたまに思う。

「この身体ほんと不便……はあ、仕方ない」

真剣に相手をしてもらえなくてもいいかと諦めた様子で、クロは椅子を離れる。

「シンくん、おれの相手頼むよ」

「……。サンジュンです」

「うん、シンくん。頼むよ」

愛称をつけるのが趣味なのか、サンジュンという名の近衛騎士を「シン」と呼んで、クロは卓から少し距離を置く。

「シンと呼ばれているのですか、きみは」

「はい、なぜか」

「……。ちなみにあちらの、カラミア・リフェルは？」

「ラミアン、と」

「……。まったく基準がわからませんね」



「同感です」

クロにつく近衛騎士は、このサンジュンとカラミアのふたりだ。どちらも勝手に愛称をつけられ、そう呼ばれているらしい。

「シンくん、なにしてんの、始めるよ。剣寄越して」

「お待ちください、クロさま」

「なに、アルア」

「剣は訓練用のものをお使ください」

「えー」

「文句は受けつけません」

サンジュンに訓練用の刃が潰れた剣を取りに行かせ、真剣でいいよと言うクロにくどくどと怪我の説明をした。

「お顔に傷がつき、シャルナユグ殿下がどう思われるか」

「はい、訓練用の剣を使います」

結果的にシャナの名を出すことが一番の効力を持っていた。

サンジュンが訓練用の剣を持ってきたあとは、アイルアートのんびりクロとサンジュンの試合を眺める。

クロの相手は辞退したアイルアートだが、べつに握れないわけではない。それなりに扱える。だからこそクロの相手は無理だ。

クロの剣術は、おそらく我流もあって、先が読めない。流れるように剣を使い、たまに舞っているようにすら見える。サンジュンのような騎士が相手でなければ、クロの剣は受けられないだろう。

「本当に、その体質が勿体ないですね……」

あれだけの腕前なら、騎士団を確実に統率できる。上に立ち、国防の増強に力を得られたはずだ。しかも近衛騎士たるサンジュンに指導までできるのだから、大したものである。これは惜しまれる才能だ。いっそのまま騎士団を預けてみても、クロなら上手くやれるのではないかと思う。

「……………。殿下に進言してみましようかね」

体調次第では任せられる部分もある。補佐を多くつければどうにかなるかもしれない。

クロの今後を改めて考えながら、アイルアートはクロの剣技を眺めた。

「アールア、おれに体力ちょうだい」

力尽きてクロが卓に戻ってきたのは、それからすぐのことだった。相変わらず体力が乏しい。

「適度に運動しておくことですね」

「それだけ？」

「日々の積み重ね以外になにか方法があるのですか？」

「う……………そうですね」

先ほどまではクロにお茶を淹れてもらっていたので、今度はアイルアートが、運動後にはちょうどいい具合の薬草茶をぬるめに淹れ、さらに砂糖を少し混ぜてクロに差し出した。薬草の匂いに一瞬いやそうな顔をしたクロだったが、おそろおそろ口に運んで一口含むと、あとは咽喉を鳴らして飲み干していた。

「ぶはっ」

「一気飲みする類のものではないのですが」  
「もう一杯」

美味しかったらしい。不味いものは出していないので、当然だ。

「このあとはいかがなされますか？」

「ん？ んー……神官長も忙しいみたいだから神殿には行けないし、かといってシヤナのところに行ってもたぶんまだ邪魔だし……アルアは？」

「あなた次第ですね」

「仕事ないの？」

「わたしが仕事に追われた日には、城内が静まり返っているでしょうね」

「……。それもそうだ」

「細々としたものはここへ来る前に終わらせています」

道楽でクロにつき合っているものの、この虚弱な皇子の体調管理を任されているのはイルアートだ。四六時中そばにいる必要があるわけではないが、かといって連絡が来てからでは遅い場合もある時間があるときは常にそばにいて欲しいとシヤナには言われているので、このところのイルアートの日常はクロの都合に合わせてられていた。幸いにもイルアートは医務局において地位は高く融通が利き、城下の治療院で業務する日数や時間も自分で調整できるので、クロの都合に合わせるのは簡単だ。弟子も巣立ちしたので、次を育てることがあればクロのために育て上げるとしよう、と思っている。

「式典の衣装合わせはどうなったのですか」

「それは明日。あ、アルアつき合ってください？」

「時間にもよりますが、かまいませんよ」

「午前中なんだ。だいじょうぶ？」

「では仕事は午後に戻しましょう」

「お茶は？」

「またわたしをお誘いくださるのですか？」

「だってアルアしかつき合ってくれない」

「まるでわたしを暇人かのように言ってくれますね」

「違うよ。シンもラミアンも席に座ってくれないし、おれまだここの人たちに慣れてないから、アルアくらいしか呼べないんだよ」

ぶつ、と可愛らしく頬を膨らませたクロは、やはり、ものすごく城の者たちの心を驚掴みにしていることに自覚がない。この自覚を持たせる必要もあるだろうが、こればかりは自分で気づいたほうがいいだろうなと思って、イルアートは微笑んで明日のお茶会に招かれることにした。

「ねえアルア」

「なんででしょう」

「おれが呼ばなくてもお茶に来てよ」

「あなたは大抵、殿下とお過ごしでしょう」

「じゃあ……おれから行っていい？」

「わたしに伺いを立てる必要はありませんよ」

「なら今からアルアの職場に行く。どこ？」

「……。気が早いですね」

「自由に歩き回れるけど、おれが住んでたところより広いから、勝手がわからないんだよ。今日だってほんとはアルアのところに行こうと思ったんだけど、辿りつけなくて呼んでもらったし」

「サンジュンとカラミアはあなたのための騎士ですよ」

「自力で行きたかったの！ 冒険みたいでちょっと楽しかったし…

…」

「そうやってうっかり王陛下のところへ辿りついていたのですね」

「なんで知ってるのっ？」

「わたしの姉は王妃ですが」  
「……、そうだった」

城内でたびたび迷子のクロを見かけることがある。徐々にそんな姿も見なくなるだろうが、今はそれが城内では少し有名な光景だ。明らかに迷子になっているから城の者たちも声をかけるのだが、というよりそれを好機に思っけてクロとお近づきになろうとするのだが、だいじょうぶ、と言われては手の出しようもない。そこで無理に目的地を聞き出そうとすれば、それはただクロに媚を売ろうとしているだけの者なので、さすがにクロもそれには気づいて上手く回避しているようだ。

「もう！ ほら、とにかくアルアの職場に行くよ、道覚えるんだから！」

「そうですか。では、クロさまのお部屋から、医務局へ向かうとしましょう」

「おう！ シン、ラミアン、行くよー！」

まるで悪戯をしに行くような子どもだな、とアイルアートは笑う。成人してはいるものの、やはりクロにはシャナのような落ち着きがまだ足りない。甘やかされて育った末子だというから、子どもっぽさが抜けるのにはもう少し時間がかかるだろう。おまけに虚弱だ。本能的に、身体が弱いからこそ護ってもらったためのものが、働いていると思う。

これは王女に可愛がられるために産まれてきた皇子だ、とアイルアートはひっそり笑い、クロに促されて道案内のためにお茶の席を離れた。



28 : アイルアート・フォロン・ファルム。(後書き)

なんとなくアイルアート視点を描いてみました。  
楽しんでいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8141v/>

---

花咲く歌を夜明けにつなく。

2012年1月6日03時54分発行